

JAMARC No.48

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 海洋水産資源開発センター 公開日: 2024-03-11 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	https://fra.repo.nii.ac.jp/records/2001230

This work is licensed under a Creative Commons Attribution 4.0 International License.



JAMARC



創立25周年記念合併号

第48号
'97 / 2



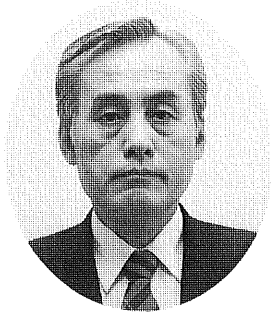
海洋水産資源開発センター

JAPAN MARINE FISHERY RESOURCES RESEARCH CENTER

JAMARC 第48号(創立25周年記念合併号) 目次

◇あいさつ	海洋水産資源開発センター 理事長	中村 晃次	1
☆寄稿☆			
◇創立25周年に寄せて	北部太平洋まき網漁業協同組合連合会 会長	尾島 雄一	4
◇アカイカ開発調査の思い出		安井 敬一	6
◇開発センターでの貴重な3年間		保田 康一	8
◇魚をとる研究		市川 渡	11
— 追悼 竹濱秀一さんのこと —		市川 渡	13
☆話題☆			
◇創立25周年記念『外洋性大型イカに関する国際シンポジウム』基調講演 — 外洋性大型イカの生物学的意義と潜在資源 —	日本大学生物資源科学部 教授	奥谷 喬司	16
◇東シナ海のアカアマダイ調査から		久野 操	19
☆報告☆			
◇創立25周年記念『外洋性大型イカに関する国際シンポジウム』の概要	海洋水産資源開発センター	企画課	26
◇第25回海洋水産資源開発魚種展示会の概要 — おさかなフェア'96への参加 —	海洋水産資源開発センター	企画課	32
☆25年の動き☆			
○役員の推移			46
○評議員の推移			47
○職員の推移			48
○現職員の構成(平成8年12月現在)			51
○JAMARC総目次(創刊号～第47号)			52
○調査一覧(昭和46～平成7年度)			71
◆センターだより◆			
◇平成8事業年度調査事業実施概要(中間報告)			82
◇調査風景紹介			87
◇外国船情報(平成8年1月～12月)			92
◇主な活動状況や出来事(平成8年1月～12月)			98
◇役職員等の異動(平成8年1月～12月)			106
[編集後記]			107

あ い さ つ



海洋水産資源開発センター
理事長 中村 晃次

海洋水産資源開発センターは、海洋水産資源の開発及び利用の合理化を図るための調査並びに情報の収集提供を目的として、昭和46年に設立され、本年創立25周年を迎えることができました。これもひとえに水産庁をはじめ関係業界の皆様のあたたかい御支援、御鞭撻があったればこそと感謝致しております。

当センターは設立以来まぐろはえなわ、まき網など11業種に及ぶ新漁場の開発や、南極オキアミ、シマガツオ等新資源の開発を進めてまいりましたが、漁業をめぐる情勢の変化に対応して、近年では我が国 200海里内漁場の再開発調査や、経済・合理的な漁撈システムの開発など、新たな分野にも踏み出しております。

今般、25周年を記念して外洋性大型イカ類に関する国際シンポジウムの開催を企画しましたところ、多くの方々の御賛同と多くの関係団体からの御協力が得られ、国内の研究者はもとより、6カ国7人の外国の研究者の参加を得て開催の運びとなりました。

イカ類の世界の総漁獲量は約 240万トンですが、その資源量は数千万トンとも数億トンとも言われております。我が国でも約60万トンを漁獲しているほか約10万トンを輸入しており、食用消費量の最も多い魚種であります。また栄養面からみても、イカ肉は極めて良好なアミノ酸組成を持つほか、タウリンを豊富に含むなど優れた栄養特性を有しております。

ところで外洋性大型イカ類は沿岸性のイカ類に比べ組織的な漁獲が困難なことなどもあって、十分な研究が行なわれているとは言えない状況にあります。このシンポジウムを機会に外洋性大型イカ類研究の進展が図られ、この資源の有効利用が促進されれば望外の幸であります。

さて、この25年の間、我が国漁業をとりまく情勢は大きく変化しておりますが、特に一昨年の国連海洋法条約の発効と本年の我が国の同条約の批准、それに伴う関連法の整備は新たな漁業秩序の時代への幕開けとなりました。こうした情勢の中で、私ども開発センター役職員一同は、この25周年を新たな出発点として、新しい漁業の時代に向けてより一層の努力をしていく所存でございますので、今後とも一層の御指導と御協力をお願い致します。

寄 稿

— 創 立 25 周 年 に 寄 せ て —

創立25周年に寄せて

北部太平洋まき網漁業協同組合連合会

会 長 尾 島 雄 一

海洋水産資源開発センターが創立25周年を迎えられたことを心からお慶び申し上げます。

センターが昭和46年に設立された当時は、世界的に海洋開発に関する新技術の発展が著しく、アメリカ、フランスをはじめ、先進国が深海底資源開発など、残されたフロンティアの開発に競って乗り出しており、これと相俟って、各国は漁業の開発意欲にも旺盛な時期でありました。

このような世界的な背景のもとで、我国としても、将来の水産食糧の需給ギャップや、今後における漁場開発コストの増大に対処して、企業化を目的とした新漁場開発を官民一体となった第3セクターにより、組織的且つ効率的に実施することの必要性が議論され、開発センターの設立となったものと理解しております。

以来、今日まで新漁場開発をはじめ、漁業操業の合理化等、我国漁業のみならず、世界の漁業の先達船として、数々の成果を挙げてこられた事に対し、深く敬意を表するものであります。

いま、思い出すまゝ、その成果のいくつかを述べてみたいと思います。

海外まき網

南太平洋及びインド洋におけるカツオ・マグロ漁場開発に成功し、業界念願の周年操業が確立され、操業隻数、漁獲量共に大巾に増加、且つ安定生産を維持するに至った。また、人工流木、パヤオ等集魚補助漁具による効率的操業も可能となった。

まぐろ延縄

既存漁場の周辺、外延的拡大に成果を収めた外、投縄自動化による省人省力化の実用化に成功した。

遠洋底曳網

ニュージーランド及びパタゴニア沖における底魚（オキサワラ、キング、ミナミダラ、ホキ、シルバー、マツイカ、アカウオ）漁場の開発に成功し、現在も合弁事業等で操業が継続されている。また、ミナミダラ、ホキのすり身化に成功し、フェロー諸島沖合でのブルーホワテングのスリ身生産にその技術が応用されている。

いか釣り

未利用の大陸棚縁辺や公海域に広く分布するアカイカ、マツイカを釣りと流し網を併用し開発に成功した。特に北太平洋遠洋性の大型アカイカについてその漁場開発と漁法の改良に成功し、公海流し網の停止がなされるまでの間、着業船が増大したが、停止後は釣り漁業が同海域の開発に意欲的である。

以上は成果のごく一部であるが、このような目に見える成果の外にも、沿岸国の漁業振興と我国漁業の漁場確保のための、沿岸国の資源開発についての共同調査や、中層トロール、浮魚礁の外、船内省人省力化、生産物の鮮度保持などの努力の結果が、我国漁業の活力と、漁場の継続的利用に繋がっていることを思うとき、この25年間のセンターの我国漁業に果たした役割の大きさを改めて認識す

るものであります。

それにしても、この25年の間に、初代久宗、2代安福、3代藤村の各理事長、初代油井、2代江原の各専務理事はすでに他界され、職員も数多く幽明境を異にされました。あの哲人の如き久宗さん、情熱の塊の安福さん、真実無垢の藤村さんはじめ今はなき役職員の方々のセンターに対する並々ならぬ情熱に対して心から感謝申し上げると共に御冥福をお祈りするものであります。

ひるがえって、一昨年、国連海洋法条約が発効し、我国でも本年、国会において同条約及び関連国内法も承認、成立し、名実共に200海里排他的水域の時代が到来しました。そしてこの新しい時代のニーズに、今迄25年間に亘り蓄積されて来た実績とノウハウが更に一段と大きく意義づけられ活用される時に至ったわけであります。

すでにセンターでは「あり方検討会」において検討されているとおり、従来の新漁場・新資源開発に加えて、我国周辺水域の合理的利用を図るための再開発調査、漁業の合理化を図るための新漁業生産方式の開発調査などが実行に移されており、着々とその成果が挙がりつつあります。

今後は漁業先進国として、途上国への国際協力の面、地球規模での海洋環境調査等についても活動の面を拓けて行くことが必要なことであると思います。

25周年の節目に当り、創立時点の原点をあらためて見直し、これから21世紀へ向けて、巾広い理解と、長期的展望に立って、更に大きく飛躍され、我国漁業のみならず、世界の漁業の発展に貢献されることを切に期待致します。

アカイカ開発調査の思い出

安 井 敬 一

私が開発センターに勤務していたのは1978年～1984年の6年間です。所属していたのは開発部調査第二課で、いか釣（流し網を含む）、かつお・びんなが釣、さんま棒受網の新漁場企業化調査に従事しました。在籍期間の半分（1978年～1981年）は、北西太平洋海域と同東部海域のアカイカ調査を担当しました。

日本のアカイカ漁業は、近海産スルメイカの漁獲の急激な減少により、未利用イカ資源であるアカイカが注目され、1974年から釣り漁業が始まり、1978年から 170° E 以東の流し網漁業が加わりました。しかし、1993年からいか流し網を含む大規模公海流し網漁業が禁止となり、現在に至っております。

この様な経過の中で開発センターでは、1976年から3カ年北西太平洋海域を1979年から同東部海域のアカイカ調査を実施しました。西経海域においては、アカイカの新漁場を数箇所発見しました。その結果、いか流し網漁業の東方への進出に貢献したものと信じております。

特に西経海域は、日本近海と海洋条件が異なり強い収れん域が形成されず、6月～7月における釣り漁場の把握は困難であります。1993年から外洋アカイカの流し網漁業禁止の代替漁法（釣）の調査研究が行なわれ、採算性が高まり期待されていると聞いており、昔、開発調査に携わった一人として喜んでいる次第であります。

今度、創立25周年記念事業として外洋性大型イカ類に関する国際シンポジウムが開催され、当時のアカイカ調査を振り返って印象の深かったことを記してみます。

成長の早いアカイカ — アカイカの分布、生態及び回游等の生物学的知見を得るため、毎年標識放流を実施しました。放流は、再捕条件をよくすることを考慮して、一般漁船の漁場に回游すると思われる群を想定し、1978年には日本近海で、6月初旬約 4,000尾（外套長16cm～23cm）について実施し、再捕報告は5尾でした。この結果、成長率は1カ月当たり 4.8 cm～6.5 cmであり、中には外套長48cm（体重約3 kg）に達したものがみられ、アカイカの成長の早さに驚いた次第であります。

白長須鯨に遭遇 — 西経海域で操業中（1979年9月18日、44° N、171° W付近）夜半過ぎ、鯨の潮吹き音が聞え、その音が大きくなった途端に本船の舷側約 100m以内に鯨体を現わしました。捕鯨経験者の私にはすぐ白長須鯨とわかりました。体長は20m～21m位に見えました。体色は淡灰色を呈し、水面下では青色に見え英名の Blue Whale はこのことに由来するのです。潮吹き後、浅潜水すると集魚灯の明かりで、鯨体がブルーに輝きまことに見事な光景であります。本船を2周して姿を消しました。この日のアカイカ漁獲量は約2 tでしたが、付近はアカイカの好漁場であり、白長須鯨の餌となるオキアミも多かったと思われます。

空とぶアカイカ — いか釣調査に従事し初めて、空とぶアカイカを見ました。それは1980年2月14日、27° N、172° E 付近、水温20.6℃で操業中、シイラ群（30～40尾）に追われた小型アカイカが海面上を飛行する姿で、詳細は次の様に思われました。(1)その数は約500尾（船内に10数尾舞込む）、(2)方向は船首尾線に平行で風上に向う、(3)高さは海面上4 m～5 m、(4)飛行距離は船長の1～2倍

(50～80m)、(5)飛行時間は数秒(3～5秒)、(6)大きさは外套長14～18cm、(7)鰭は水平に広げており、色は白っぽく見えました。この場所での漁獲量は、大型アカイカ31尾、小型20尾、トビイカ16尾でありました。冬期(1～2月)20°N以南で操業中、時々シイラ群が集魚灯に付くことがありました。

18日間の漂泊操業 — いか釣船は、両舷に自動いか釣機を設置し、操業時はパラシュートアンカーを海中に投入しこれに船体を繋留、船首を風向に向け風波による船体への抵抗を少なくし、船の流れを止め釣糸の絡まりを防止し操業しております。

パラシュートアンカーの傘体は、船の大きさにより異なるが総トン数300～400tの船では直径約35m(海中で70%位広がる)のものを使用しております。風力4～5位では船は殆んど流されないとのこと。

船には衛星航法装置があり、常時船位を知ることができるので、極力海流を測定し報告書に記録しております。

西経海域において42°N線付近を東進調査中、1980年8月20日、170°W付近で一週間振りに3.4tの漁獲量がありました。翌日、午後DBTによる各層水温観測や流れなどを検討し、そのまま操業したところ好漁が続き、パラシュートアンカーを入れたまま18日間操業しました。この間の1日当り平均漁獲量は4.1tで、1日当り最高漁獲量は9.3tで、翌日から3日間7.3t、4.8t、4.1tと好漁が続きました。この場所は、水深100m層の水温が7℃代から8℃代に上昇したところでありました。この18日間に船は、67°方向へ90㎞流されており、記録によると一昼夜の流れは、右廻りの過流によって東方へ平均約5㎞移動しております。

西経海域では表面水温の変化が少ないので、漁場把握には100m層の水温に注意する必要があると思います。また、好漁があった場所は、状況にもよるが翌日もそのまま操業して様子を見るのも一方法かと考えております。

なお、大型アカイカを漁獲対象とする流し網当漁船は、釣り漁場(中型主体)より緯度にして2°～3°北側で操業し好漁した模様であります。

以上思いのまま書きしるしましたが、いか流し網漁業が禁止となり早や3年がすぎ、アカイカ資源は回復していると思われます。西経海域のアカイカ釣漁業は、水産庁始め関係者の多大なるご尽力により、企業化される日も間近と期待しております。

開発センターでの6年間は非常に勉強となり、私の生涯の中でも貴重な財産となりました。今なお、新しい知見を求め関係者からの報告をまっております。改めてご指導、ご教示いただいた皆様に厚くお礼申し上げますと共に、開発センターの益々の発展を祈念いたします。

(元海洋水産資源開発センター)

『開発センターでの貴重な3年間』

保 田 康 一

海洋水産資源開発センター（以下「開発センター」という）が、創立25周年を迎えましたこと、心からお慶びを申しあげる次第です。

私は、開発センターには昭和56年4月～昭和59年4月にかけて3年間お世話になりましたが、それから数えて早いもので、もう13年も経ちました。先般、OBに対しての寄稿依頼があり、遂に順番がきたかという思いで、当時のことを思い浮かべながらペンを取りました。

当時私は、第一勧銀上野毛支店に勤務しておりましたが、人事部から内密に、開発センター出向の連絡がありました。“国内と海外の出張もあります”の一言（エサ？）で、動いた（釣られた？）と言っても過言ではないかと思います。前任者大矢氏からも“まきエサ”に値するような活き活きした声で、“ニュージーランドでゴルフをやってきたよ”の言葉があり、心の動揺も解消、思いは海外という事で、出向を快く応諾した次第です。

早速、総務課の経理関係に配属されましたが、初代今田氏から数えて私が3代目という事でした。前任者からの引き継ぎの中で、特に酒類の管理について細かい指導を受けました。私にとりましては“水を得た魚”ではありませんが、酒類の管理については、自分自身飲む趣味もあり喜んで日夜在庫のチェックを行い、しかも夕方にはいつも飲める状態にと細心の注意を払ってきました。そんな飲み会の席で思い出されることは、当時藤村理事長が話されていた①酒についての甲類・乙類の定義。②日露戦争時、オハラ少尉という呼び名が、ロシア語で意味する逸話。③オットセイにまつわる話。等いつも興味シンシンに拝聴したものです。そのような状況の中で、開発センターでも健康診断が実施されました。その結果、何んと理事長以下検診された職員の1/3程度が再検査という有様でした。勿論私もその中の一人であり、大勢いれば恐くないという安心感かどうか、検査後も相変わらず反省もなく皆と酒を嗜んでいたところ、今でも検診の都度、何んらかの項目で保健指導を受けている現況にあります。

ところで、開発センターで総務以外の仕事として楽しみだったのは出張があったことです。国内の出張も様々のエピソードがありましたが、今回は海外であった出来事を書かせて頂きます。

海外出張の行先は、第3播州丸（調査員佐藤敏郎）の用船解除のため、南アフリカ連邦国のケープタウン。予定では当時の藤村理事長とご一緒の予定でしたが、当理事長のご都合が悪くなり、急遽一人で行けとの指示でした。何時ものように、夕方開発センターで酒を飲み交している時でした。当時の大鶴専務から「人工衛星“ヤスタ”にならぬよう、無事日本に帰ってこいよ。」と、いつも言われていました。出発が間近に迫ってきた時は、海外へ行けるという期待よりも、果してケープ迄辿り着けるかどうか、そして帰ってこられるかどうか、不安で一杯でした。

まず最初、フランスへ向いました。エアーフランス機内のトイレで、ワイシャツに付着したチョコレート拭きとるため、ペーパーを使い過ぎてトイレを詰らせてしまった事。また、第一勧銀のパリ駐在員事務所を探している最中、どうも匂うと思っていたら犬のフンを踏んでおり、危うくそのまま事務所に足を入れようとしていた事。コンコルド広場や道路脇に、フンが“点在”していたのには驚きました。これも、その国の文化の一つなのかと思いました。

そしてうんがついたかのように、フランスからケープタウンへ向う途中、ヨハネスバーグ迄の機中において、私の座席の隣には、何んと女優のブルック・シールズにそっくりな美しい白人女性がいきました。フライトしてから約20分間程度経過した後、なんとか話す？キッカケを掴もうと考えたすえに、日本から持参した海苔巻き煎餅と菊柄の飴（金太郎飴とほぼ同一種類）をすすめて見ました。

“ジャパニーズノリバンドクラッカー” “カッティングアンドカッティングドリームジャパニーズキャンデー” と言った調子で、手まねをしながら知っている単語を並べ、その時は真剣でした。理解されたかどうか判りませんが、一応彼女は笑いながら受取って食べてくれました。そして、緊張感もほぐれた頃、私は6ヵ国語（日英仏独伊ロ）の本を取り出して、お互いに質問したい内容のページを開きながら、意志を通じ合う事ができました。スチュワーデスや近くの乗客が、私達に視線を投げかけていたのが感じとれました。彼女の職業は初めモデルかなと思いましたが、彼女は学生で、親戚があるキンシャサへバカンスに行くとの事でした。彼女と別れる際、握手を求めましたところ、驚くなかれ、私の“頬”に軽く「なに」をしてくれました。（妻には報告未済）

ケープタウンに辿り着く迄、いろいろな事がありましたが、無事空港に到着、東洋系の人間はほとんど見当たらず、白・黒の“囲碁仲間”？の人達で、ロビーは一杯でした。すぐ、大洋漁業の森所長に気がつき一安心しましたが、同時に帰りの事が気になり、“通うりゃんせ”の童謡歌が思い浮んだ次第です。4泊5日のケープタウンにおいても、数々の出来事がありましたが、特筆すべき事を一つだけ、挙げさせていただきます。

それは、銀行へ行って両替をした時のことです。何気なく、両替をした紙幣（50枚程度）を縦読み（普通、左手で札をはさみ、右手の親指、人差指、中指を使い、一枚ずつ数える方法→銀行では、同種類の札かどうか確認し数える。）と、横読み（扇子のように、中心を動かさないように札を開いて、4枚あるいは5枚ずつ数える方法→銀行では、スピードさを要求、再度枚数を確認し数える。）をして数えたところ、窓口係の金髪女性が驚いた様子で、もう一度やって見せるよう頼まれましたので2～3回やりました。すると、私の周囲には、既にロビーにいた数人の白人男性と黒人の警備員が、その動作を見ていた様子でした。帰る時、その女性は、私のことを“マジシャンか”と質問してきました。側にいた森所長から「この方は日本の銀行マンです。」と伝えたところ、またちょっとびっくりした様子で、握手を求められた事がありました。

出張の最後の目的地、イタリアのローマでも、後藤一等書記官ご夫婦に、大変お世話になりながらも、いろいろ珍道中をしてまいりましたが、誌面の都合上今回は省略させていただきます。

ローマからスイスのチューリッヒで、ようやく日本航空に搭乗することができました。成田を出発し、日本に帰途する迄、日本食は絶対に口に入れないと決めていたところ、タイミング良く機内に日本食（寿司他）が出されました。日本酒も飲みました。五臓六腑に、ジワーと染みわたるようなうまさを持続しつつ、日本食は何と旨いんだろう！日本は何と素晴らしい国なんだろう！そして、日本人に生まれて良かった！と思う満足感を味わいながら、人工衛星“ヤスタ”にならず、無事帰還することができました。

開発センターに出向している間、いろいろな人達と出会い知り合う事ができました。銀行でも数多く親しくしている人はいますが、それより何よりも、開発センターで一緒に仕事をしたその当時の素晴らしいメンバーに恵まれた事、それが私にとっては、大きな、大切な財産だと思っております。

今現在、私は、第二の人生の職場として、タナカ印刷㈱に出向しております。これも偏に、開発センターで経理の仕事を経験していたことが土台となって自信につながり、まさに今の自分が形成され

ているところであり、心から深く感謝している次第です。

最後に、今後とも情報化時代の中で、開発センターが更なる発展をされることを切に祈っております。

（ 現タナカ印刷(株)
元. 海洋水産資源開発センター ）

魚をとる研究

市 川 渡

【はじめに】

開発センターが25周年を迎えた。この歳月は歴史であろう。この大半の期間を開発センターに勤務し、実務に携わってきた者にとっては一入の感慨がある。漁業がまだ盛んだった時からオイルショック、200海里に円高そして現在。その時々政治経済、社会情勢と共に揺れ動きながら、懸命に生き続けて来た。今、OBとして離れた立場だが、開発センターの核である調査員について若干の私見を述べたい。調査員はそれぞれ生まれも育った環境も違うことから考え方も違っている。それだけに人材は豊富で多士済々である。未知の海で、様々な経験をしながら、計画どおり、また思いがけなく幸運に恵まれて新しい発見をすることなど、あまりないことだが調査員冥利につきよう。自己満足かもしれないが、ささやかな幸福感に包まれるのもこのような時だ。時代の推移で世界の海は狭くなった。求められる調査海域もだんだん限定されてくる。調査員にとっては、自由に思いっきり腕を振るい、自分の経倫を発揮するのも、様々な制約もあり困難になっている一面もあるようだ。理想と現実のはざままで、開発とは調査とはと悩むのではないか。

【魚をとる研究】

1. 事業、漁業種類別の調査に関する会議、集まりに、むしろ第三者、違う分野の人達に参加してもらって意見を求める。経験者、関係者でないだけに往々にして的外れ、常識に外れること、またタブーに触れる発言があるかもしれない。更に時間の浪費になる危険性もある。しかし、このことが一番大切ではないか。経験者、関係者には固定観念、規定事実という陥し穴がある。第三者の思わぬ発言は発想の転機にもなる。確率は低だろうが、頂きというグッドアイデアが期待できる。
『素人、何を言うか！』と発言を封じない。最後まで聞く耳をもつこと。この討議の方法は、殊更目新しいことではない。魚をとることは楽しい。その方法を考えるのはなお楽しい。皆が考えて意見を開陳する。楽しい討議になるはずだ。そして、激しい議論に展開して行く。
2. そこで、魚をとるには……と言うことになる。いろいろの考え方がある。最もオーソドックスなものとしては過去の経験から学ぶことがある。成功例、失敗例を復習、学習して科学的な法則性、パターンを研究する。同様に調査結果を徹底的に検討、究明する。成功も失敗もその原因を、計画段階まで遡って海域の選定、資源、気象海象、漁船の性能、乗組員の資質、能力、更に幸運、不運まで突っ込んだ討議を試みる。海と船と魚と人間、漁業はこの不確かな組み合わせになっている。討議には成功例よりも失敗例の方が良いのではないか。失敗例には必ず明確な原因があり、必然性があるからこそ教訓が導き出されよう。
3. 調査船の漁撈長、船長の独自の魚群探索、漁場選定、漁撈の実務、労務管理など詳細に観察する。必ず、考え方、方針があるはずでこれを持ち帰り、検討して評価する。この作業は漁撈のプロの域まで立ち入れるし、プロの意識も生まれてくる。名漁撈長、名人漁師と言われる人達は、殊更nice report, nice speaking はないが、哲学、信念があるようだ。何より研究心が旺盛で、考え方が柔軟で素直に人の話に耳を傾けて実行する、このような人が多い。現場の声、ニーズを聞く、新しい

発想、アイデアが出てくるのではないか。魚をとる研究である。

4. 各種のシンポジウム、漁業者の会合に積極的に参加する。新しい研究情報、研究者の専門分野を知り個人的な交友範囲を拡げることは調査員の資質の向上につながり、個人レベルから機関単位のものになる。漁業者のナマの声は貴重な情報である。更に、バイオ、ハイテクの分野にまで関わりを持つことが、開発センターの今後のあり方、取り組みに示唆を与えるだろう。その時々々の社会情勢による、各漁業が抱えている問題、対応、これから何をするか、何をしたいかを知り勉強する。魚をとる研究を追及して行く時、プロ意識が生まれ、プロに徹することで漁具・漁法の研究が進み、資源の保護も管理も、また、資源の利用も期待出来る。同時に混獲物やサメやシャチなどの食害の調査にも拡がって行く。情報を収集整理し、分析活用するのは情報の一面で発信することで差別化して信頼を得る。魚をとる研究はそのまま、調査のプロへの道である。
5. とった魚は売らなければならない。『漁業者はとるだけで良い。売るのは相場次第。安ければその分だけ余計にとる』そんな時代はとっくに終わっている。開発調査には、漁獲物の処理、製品加工も大きな目的の一つである。船上で出来る最も大切な前処理として、鮮度の保持と規格の統一による荷姿がある。『見て綺麗なものは、食べても美味しい』は、日本の食文化の第一義であろう。漁獲物の製品管理は、言ってみれば魂を入れる作業でもある。調査員として更に一步、関わりを持つ必要がある。魚をとる研究と共に、マーケティングの研究も大切ではないか。具体的にはそれぞれの魚についての、地域的な消費や嗜好の特性、更に流通、輸入の動向などを知る。また、自分のとった魚の販売に携わって現場の声を聞いたり、他船の物と比較するなど、魚を高く売る研究のベースになる。

【おわりに】

魚をとる研究を通じて、意見具申が出来、それが取り上げられる。

これは、結局、組織の活力化、活性化になる、このムード、雰囲気こそ大切ではないか。当然のことながら意見具申には、目的意識と人に納得させる論拠が必要で、可能性、ビジョンがなければならない。いずれにしても、皆が内容、様式を問わず意見百出で魚をとる研究を積極的に進めてはどうだろうか。また、この研究、お仕着せのものより同好会的、同人の集まりの方が良いと思うのだが。調査員の資質の向上、お互いの啓蒙、刺激になる。更なる活性化はこんなところにあるかもしれない。

竹濱秀一さんのこと

市 川 渡

訃報はいつも突然である。退職して何年も経つと、その訃報も遅れて聞くことが多くなる。社会から遠くなっていることだろうか、淋しい気持ちになる。竹濱さんの場合もそうだった。去る4月19日（1996年）、開発センターに所用がありその時知った。一瞬、頭が真っ白になり言葉が続かなかった。青天の霹靂とはこのことかと思った。竹濱さんも私も開発センターに勤務したが、共に机を並べることはなかった。歳月の隔たりがあったからだ。竹濱さんとは、同氏が水産庁資源課国際資源班当時、国際サケ、マス調査で、委託する側、受託する側のお互いの当事者として知り合った。この事業は開発センターの仕事の中でも、調査の性質、内容、実行面でかなり質の違うものだけに、それなりの折衝もあった。竹濱さんはタフでエネルギッシュで、腕まくりして仕事をするタイプの人であったようだ。外国で国際機関にも勤務したというが、バタ臭いところはなかった。体躯堂々、その風貌、所作、語り口も独特で一種の風格のあったお人柄だった。私は年代の違いはあったが、敬愛の念を抱いてお付き合いした。そんなことで気分が通じ合い、お互い気持ちよく仕事が出来たと今でも思っている。

私にとって忘れられない思い出がある。サケ、マス調査でどうしても調査員の手配がつかなかった。この時も、相当のヤリトリをした。結局、竹濱さん自身が乗船して自ら調査に当たった。未明まで仕事をこなし、一番の新幹線で岩手県の宮古へ、そのまま、調査船、新りあす丸で出港して行った。後に、係官からその経緯を伺って、『何とも済まないような、悪いことをしたような、大きな借りを作ってしまったような』気持ちがした。そんなことがあったものの、繰り返すようだが、人間同士としての気持ちはお互に通じ合ったと思っている。それから、仕事の面では離れたが、なんとなく交遊は続いた。その竹濱さんが、開発センターの開発部長として赴任して来た。『一緒に仕事をしたかったですね』が、お互いの最後の会話になってしまった。

竹濱さんは水産庁、県の時代、開発センターを通じて激務の連続であったろう。今思うと、竹濱さんの新りあす丸に乗船した何十日間の航海は、ご自身の本意ではなかっただろうが、物理的に陸上の仕事から解放された、竹濱さんにとって唯一のノンビリした時空間ではなかっただろうか。海上でどんなことを考え、どんな日々を過ごしたのだろうか。今はこれも何うことは出来ない。

花冷えに 友の訃報を 遅く聞く

（元開発部次長）

話 題

“外洋性大型イカの生物学的意義と潜在資源”

日本大学生物資源科学部教授 奥 谷 喬 司

ダイオウイカ類（ダイオウイカ科）*Architeuthis* は頭足類中最大であるばかりでなく、現生無脊椎動物の中でも最大の動物としてつとに有名である。これまで測定された最大のものは外套長 518cm、全長 1,828cmに及ぶ(Clarke, 1966)。Roper & Boss(1982)は、これまでの漂着と捕獲の記録を整理し、本属は一種の両極分布を示すことを明らかにした。わが国における本属の種の出現については本間他(1983)、本間(1990)及び Okiyama(1993)によって、死後或いは瀕死の個体の漂着は太平洋岸より日本海側の方に多く、或る年変動を示すことが明らかにされている(奥谷 1996)。

ダイオウイカと並ぶ大型種のひとつは、ツメイカ科のニュードウイカ *Monoteuthis robusta* で、最大標本は外套長 2 m を超すといわれているが、ダイオウイカと共に本種はアンモニア含有のイカとして食用にはならない。

南極域にはダイオウホウズキイカ *Mesonychoteuthis hamiltoni* が生息し、外套長 2.5 m、全長 4 m、体重 150kg に及ぶ。Roper 他(1984)によると、Klumov & Yukhov(1975)は、本種の肉は品質も秀れ美味で、潜在資源量は 9 千万トンに及ぶとされているが、このような中層大型イカの漁法は開発されていない。

最近沖縄から 2 種の大型イカすなわち、ツクシイカ *Asperoteuthis acanthoderma* 及びオオホウズキイカの一つ (*Megalocranchia* sp.) が発見され、前者は外套長 183cm、全長 2.5 m に及ぶが、共に漁業対象となるとは思えない。

漁業対象種

漁業は人間とイカの魚群が出逢い、且つ設備投資と人件費がそれに見合わなければならない。それゆえ、有用種は次のような要件を満たすものと考えられる。(1)肉質が良いこと、(2)体が大・中型、(3)生活史の或る時期(例えば索餌、交接、産卵など)に大規模濃密群を作る性質があること、(4)漁具取扱いの経済性からみて集群は比較的浅い所であること。

このような条件を充たしているイカはヤリイカ類(ジンドウイカ科)とスルメイカ類(アカイカ科)及び二、三種である。ヤリイカ類中、ヨーロッパオオヤリイカ *Loligo forbesi* の雄は外套長 90cm に達するが、この仲間は沿岸性で地方性が強い。

アカイカ科には純外洋性種と半外洋性種があるが、なかでもアカイカ亜科は大型種を含む漁業の対象となっている。

アカイカ *Qmmastrephes bartrami* は 1970 年代、凋落したスルメイカ資源の代替として本格的漁業が始まった。流し網漁業では外套長 50cm に達する大型雌を専らその対象とした。最大記録は外套長 76cm に達するという(Zuev 他、1975)。このように大型雌のみを選択的に取り除くことによる将来資源への影響については不明である。北太平洋のアカイカ資源については村田(1990)、Murata & Hayase(1993)等によって総述されている。

アカイカの大西洋資源の研究は多くない。しかし、大西洋には以前ヨーロッパオオアカイカ *Q. caroli* と呼ばれ、外套長 67cm に達するものが

知られ、英国海岸への漂着が Rees (1950)により報告されている。また南西太平洋から Rancurel (1976) が記載した亜種は外套長76cmに達するとされているが、いずれもアカイカの老成した個体である。

Nesis (1973)が初めて太平洋のアカイカの分布域に北緯20°と南緯20°の空白があることを指摘した。これはのちの多くの調査でも裏書きされている。のち、大西洋にも同様の赤道を挟んだ空白地帯があることが報じられた (Gaeuskaya & Nigmatullin, 1976)。これら四つの個体群 (すなわち北半球、南半球の太平洋・大西洋) の遺伝的関連についての分析が俟たれる。それには二つの仮説が考えられ、一つはそれぞれ遺伝的に分離しているか、さもなくば、何れかに遺伝子の交流を許す隠された通路があるかである。

アメリカオオアカイカ *Dosidicus gigas* はジャンボスキッドとして知られ外套長2mに及ぶという (Clarke, 1966 ; Lane, 1957)。しかし Nesis (1963) は顎板の大きさからせいぜい外套長115~120cm、体重多分50kg程度であろうと推定している。彼 (1970) は、はじめ外套長20~35cmのクラス、30~50cm及び50cm以上をそれぞれ1歳、2歳、3~4歳と推定したが、のち Erhardt 他 (1983) が、この種は1年で70cmに達すると述べた。最近平衡石の成長輪から外套長60cmには9ヵ月で達する (但し成熟とは同調しないが) ことが明らかにされた (増田他、1996)。余川 (1995) はアイソザイム分析から小型群 (24~26cm) も、中型群 (40~48cm) も、大型群 (83~92cm) も同一個体群に属していることを明らかにした。

本種の潜在資源量は数十万トンと推定されている (Nesis, 1983) が、海洋水産資源開発センターではカリフォルニア半島沖で1971年に初めて試験操業を行った。以来暫く中止されていたが、1984年以来本格化し、1994年には8万トンの漁獲をあげ、さらにペルーの船団はもっと漁獲をしている。

このように積極的に本種が利用されるように

なって初めて大型個体はアンモニア化することが明らかになった。アメリカオオアカイカは最も強力な遊泳者であると思われるが、老成して巨大化すると他の浮遊機構すなわちアンモニア化が必要とされるのであろう。この生物学的に意味のある現象は消費上の問題となったが、加工技術により克服されている (中谷、1995)。

トビイカ *Sthenoteuthis oualaniensis* はもう一つの大型外洋種である。沖縄及び台湾では小規模な釣漁業が行われてきた。Young (1975) と Okutani & Tung (1978) が総述を著している。

Nesis (1977) は、本種には異なった大きさで成熟し且つ分布も異なっている“超個体群”の存在を指摘した。この中で彼は初めて外套膜背面に発光組織のない個体を発見したが、現在これは種内変異というより別種と考えられている (Roeleveld, 1971)。1976年照洋丸によるインド洋の調査において外套長42cmを超す大型個体群の存在を発見した。Nesis (1993) はこれらを矮小型 (発光器なし)、中型 (最も普通のもの) 及び巨大型 (紅海~アラビア海) としたが、これらの種内、種間の遺伝又は系統関係の問題はまだ解き明かされていない。

大西洋には同属でトビイカに極めて近似するニセアカイカ *S. pteropus* が分布し、それは外套長40cmほどになるが、個体群量、個体群構造及び潜在資源等については最近 (Zuev & Nikolsky, 1983) まであまり多くの記述がなかった。

ミナミスルメイカ *Todarodes filippovae* は外套長50cmを超える (Roper 他、1984)。本種は北大西洋の同属の種ヨーロッパスルメイカ *T. sagittatus* (外套長75cm) よりやや小さめである。ミナミスルメイカの大きい資源があることはニュージーランドのニュージーランドスルメイカ *Nototodarus sloani* やのちパタゴニアにおけるアルゼンチンイレックス *Illex argentinus* の釣漁業の副産物として知られてきた。

本種は主分布域がいわゆる“吼える40度”と呼ばれる操業しにくい場所であるせいもあって

組織的開発は行われて来なかった。本種はヨーロッパスルメイカ、アングラスルメイカをつなぐ地理的クラインの一端に位置するものと思われるが、本種は将来利用し得るものと思われるにもかかわらず、それら種間の遺伝的／系統学的関係の解明は行われていない。

ソデイカ *Thysanoteuthis rhombus* はアカイカ科ではないが、全世界の暖水域に分布する大型外洋イカの一種である。本種はソデイカ科に属する唯一の種で、外套膜の側縁全長に亘る菱形の鰭は特長的である。300日で外套長75~80cmに達するという (Arkhipkin, 1996)。

1960年代頃から日本海では樽流し漁業が行われて来た。日本海に移入してくる個体群の大きさは年々の対馬暖流の海況に大きく影響され、0から数百トンの変動があった (名角、1975)。

この漁法は1989年以来沖縄に、更に最近では伊豆小笠原海域に伝承され太平洋に分布する個体群を漁獲するようになった。漁具・漁法は著しく改良され、沖縄で年間1,500トンも水揚げされるようになった。

漁獲対象群は黒潮と反流の縁辺域に収斂したものである。また、ソーセージ型の卵塊は沖縄 (Suzuki他、1979)、紀伊半島 (Misaki & Okutani, 1976) 更に遠く房総半島沿岸 (平野・奥谷、未発表) まで黒潮の影響のある海域に頻繁に漂着する。

本種は1~17頭の小群を作る (Nishimura, 1966)。また対になったものは必ずしも雌雄とは限らず (奥谷、1982)、また小さい個体も大きい個体も同時に出現する (板倉、1977; 名角、1975)。本種の資源管理には個体群構造を明らかにすることが焦眉の急である。

生物学的意義と将来の研究

以前は広汎な海域に棲む種はそれぞれ単一種とされていた。わが国のスルメイカについて資源評価と管理の立場から系群ないしは季節群の厳密な分離が行われて以来、そののちに開発されたアカイカ科のどの種にも同じ考えが適用

されて来た。この季節群の考えは最初に浜部・清水 (1966) により假説され、のち国内研究者の論議を経て改訂されて来たものである。

季節群 (生れ群) の考え方はスルメイカのよう生活史の一部は陸塊に関係している半外洋種の場合判り易い。また Hatanaka 他 (1985) はスルメイカ亜科とイレックス亜科の5種すなわちスルメイカ、ニュージーランドスルメイカ、オーストラリアスルメイカ、カナダイレックス、アルゼンチンイレックスにおける生活史の平行現象を説明している。

これに対して純外洋種の個体群構造の解明は未だ不十分である。北太平洋のアカイカ資源は永年村田・中村及び他の研究者によって研究されて来たが、流し網漁業から上がって来る資料による大規模な研究はモラトリアムにより頓挫した。

大型イカ、特にアカイカ科は種によって属する群集の構成員は異なっているにもかかわらず通常海洋の高い栄養段階にある。漁業によって特に大型のものだけが間引かれることは将来の個体群維持に影響しているかどうかは判っていない。その答を出すためには対象種の大規模な生活史研究、例えば稚仔の生態、群構造、年令、成長、食物関係や生物海洋学が必要とされる。

外洋イカ類の種分化に関わる個体群構造の主導的研究は、Nesis、Nigmatullin 及び国際研究者によるトビイカの研究である。トビイカにみられる型は今や種内変異でなく種分化が完成したものと考えられる。

更に充分理解されていない沖合性種がある。それらの種の分布域は一つの大洋ばかりでなく、複数の大洋にまたがっているので、データや情報を交換する国際協力が必要であるばかりでなく、合理的利用のため種内又は種間の遺伝的或いは系統的分化を明らかにするため、又その分化に確実に関連する水塊の進化を分析するため学際的ネットワークを確立すべきである。

東シナ海のアカアマダイ調査から

*久野 操

平成8年6月から、海洋水産資源開発センターのアカアマダイ資源調査が始まった。正確に申しあげると、資源管理型沖合漁業推進総合調査（東海あまだい）ということになる。

調査は、今なお続けられているので、終了したのち、識者からの詳細な報告を待つ事とした。私は、当初に乗船した一調査員として、アカアマダイ漁業から学び得たこと、この漁業の実態や感想などについて述べたい。

あまだいとは

6月当初、基地長崎に出向く前、ふと考えた。「あまだい」とはどんな魚か？いまさら何と恥ずかしい話であるが、若い時一度、近くの親戚で食べてうまいと言ったが、それっきり一度も我が家では食事に出たこともない。高価で、魚屋でもあまり見かけぬという。

スズキ目アマダイ科の高級魚である。あまだいは甘鯛で甘味のある自身の刺身を思い出す。乗船して末武船長から、アマとかクズナという方言を聞いた。なぜそういうのか。孫引きではあるが、1807年海魚考（饒田唯義）によれば、「クズナは屈頭魚の訓義なり…頭怪体にして屈むが如し。故にクズナと名付く」とある。ケタイとはケツタイ（奇妙な）の意味、ナは魚の古語であった。

分類上、アカアマダイの特徴として、眼のすぐうしろに銀白色の倒三角形の紋があること。尾びれには、5～6条の黄色帯があることは、どの図鑑にも書かれている。

また、この魚、幼魚は中下層を泳ぎ廻るが、

成魚は、砂泥中にもぐる…というものと、穴居生活をする（西海区水研）という記述を見た。残念ながらそういう生態写真を見た事はないが、後に測定板上で、体側に薄く、軟泥や砂泥のついたアカアマダイを何尾も測定したので、砂泥中から出たものとみている。

林（1977・79）によれば、大型魚は7月と10月、小型魚は8月と11月が産卵の盛期であるという。また、産卵は一度に放卵するのではなく、水深100m前後の海底で何回にも分けて産む多回産卵であること。体長28cmまではメスの割合が多く、それ以上になると逆転してオスの割合が多くなるという（オス・メスの比率が変わる。船田、1963）。このことは、繁殖・保護の面からみれば好都合な事かも知れぬが、調査する側からみると、何と面倒な魚かなと思った次第である。

分布については、本州中部以南・東支那海とあるが、過去網漁業の記録では、済州島東部の経度（東経127°前後）、水深100～130mの大陸棚縁にそった所での漁獲が多かった。

大分県では、農村水産統計の数字になる程の漁獲は見られず、県南から宮崎県にかけての釣りで、少しはとれている位だという。

食性としては、甲殻類・多毛類・イカ類・クモヒトデ・貝・小魚類など、きわめて多種多様である。

アマダイ科の魚

アマダイ科に属する魚にはアカアマダイ以外に次のような種がある。

シロアマダイ…尾びれに鮮黄色の帯がない。

キアマダイ……眼の前下縁から上顎にかけて銀白色帯が1本ある。

ハナアマダイ…背びれ第1棘^{キョウ}と第2棘間のみ
に黒色斑が1個ある。

スミツキアマダイ…背びれに黒色斑は多数あり、1列に並ぶ。眼の下縁に2本の白色縦帯がある。

残念ながら、私の乗船したよこ縄船での五航海期間中は、キアマダイとハナアマダイを採捕することができなかった。アカアマダイ（写真1）シロアマダイ（写真2）スミツキアマダイ（写真3）を掲載するが、白黒で前記の差異が明らかに区別できるかどうか心配である。

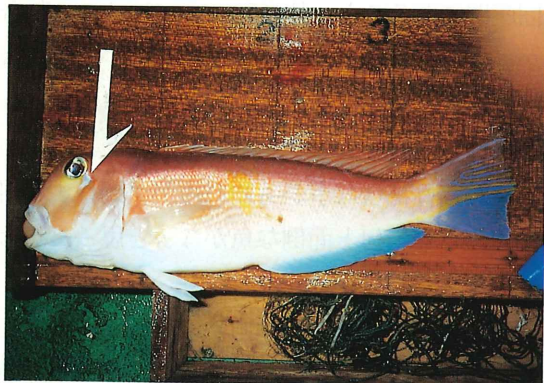


写真1 アカアマダイ

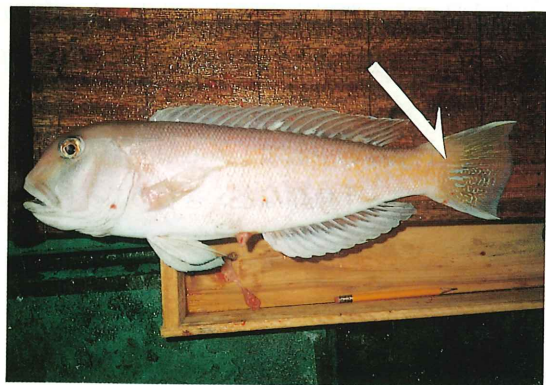


写真2 シロアマダイ

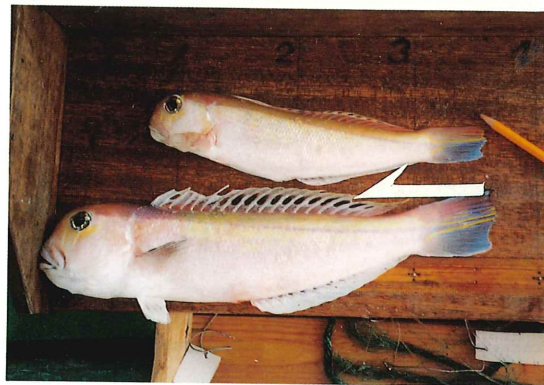


写真3 スミツキアマダイ (背びれ)

漁船と漁具



写真4 第三大漁丸 (57ト)

この調査には、第三大漁丸（山口県萩市）と第一勢力丸（長崎県島原市）が用船された。大漁丸は、「よこ縄式」で従来から使われてきた円型の鉢に収容された「はえなわ」が用いられた。一鉢に60本のタイ針がついており、一回の操業で10鉢から37鉢が使われた。勢力丸の方は、マリン技研㈱が開発した「たて縄式」の漁具だが、形式をよく見ていないので説明を省かせていただく。

操業中の日課

大漁丸では、ほぼ、次のような日課で操業した。

05時30分	起床
06 00	投縄開始 船長操船
06 30	投縄終了・朝食

06	50(1例)	揚縄開始	調査員 } 測定 船 長 } ・記録等
08	40	揚縄終了	
	∴	漁場探索・投縄・揚縄の連続	
	∴		
11	55	調査員・正午観測・昼食	
12	00		
13	05	船長無線連絡	
13	10		
	∴	漁場探索・投縄・揚縄の連続	
	∴		
19	00	漁獲物の箱立て	調査員 } 記録 船 長 } 整理
19	30	夕 食	
20	00	船内業務（漁場移動または停泊）	
		就 寝	



写真5 針に餌をつける



写真6 ラインホーラによる揚縄

操業中の一日をふりかえると、起床から就寝まで、船長はじめ船の6名は、実に無駄な時間がなく、きびきびとよく動くのには、唯々感服した。特に投縄・揚縄にも参加し、しかも僅かの合い間を利用して食事をつくるコック長や、全員に気を配りながら細かい仕事を次々に処理する船長・機関長の仕事さばきは範とするに足る立派なものだと思っている。少い人数の漁船の長は大変だなとも思った次第である。

調査研究と平常の操業

漁業では、及ぶ限り少いエネルギーで、短い時間内に、高価に売れる魚介を採捕して市場で販売する。そこには何らの無駄も許されないきびしさがある。だが、多少の無理が伴っている。将来はどうなる。明日の漁業はなど考えず、今をよりよくすることを第一義とするのが普通の考え方だ。しかし、調査とか研究では、当然の事ながら、これからの漁業、明日の…将来のと考えながら、若干の無駄使いもして、幅広く漁場を見ながら、網^{もう}拉的というほど、何でも取り入れながら、次第に焦点をしばらくこんでゆく方法で進められた。やゝさしさわりがあったかもしれないが、その辺を船の皆さんに理解していただきたかったので、あえて調査中に無駄な漁獲物も取り込むようお願いもした次第である。

一般操業時は価値のない魚介、例えば小さいヒラメ類やアナゴの類などは、船に取り込まず、ローラの所ではたき捨てられる。そんなもの

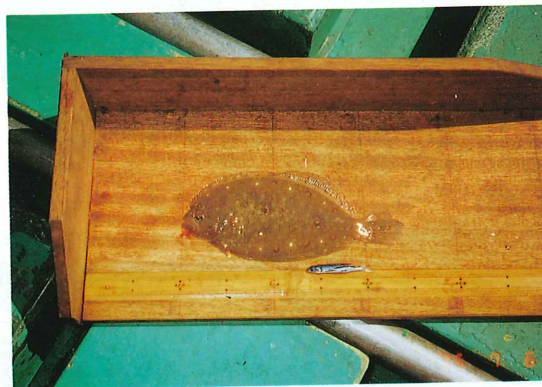


写真7 小さい魚（捨てられる魚）
ヒラメ科 トビウオ科幼魚

で、今回は船内に取り込んで見せてもらった。しかし永い慣習^{トウキ}でどうしても捨ててしまう人もあり、これは「投棄」と書いた記録もある。実は、船長などは経験が永いのでご承知だと思うが、アカアマダイとのかかわりについても知らなかったのである。

船員さんの中には、「こんな小さなものを、標本に取ったら繁殖保護上悪いんじゃないか。」という人もあったが、必要とみた種については、あえて取らせていただいた。

また、意外にアカアマダイの漁獲が少ない日のあることも、船長の不本意な所であったが、我々の感知できなかった負の条件もあることを申しあげた。

船長の漁場探索は慎重だった。まず広い図面綴りを開いて過去先人の操業実績を見る。次にフロッピーを使って、大漁丸の実績を画面に出し、操業航跡や多獲箇所をチェックする。それから、水温、カラー魚探・湿式魚探で海底の起伏を調べたり、表・中・底層の流速を見て投縄の方法を検討したりする。レーダーに現われる漁船の動きや、双眼鏡での観察も欠かさない。とくに中国の小型船が多く、まわりに集まって来た時は、どんなによい条件の漁場でも、縄をいれる事ができなかった。

漁具を失ったり、トラブルを起こす危険性を考えての事である。

アカアマダイの漁場

アカアマダイは砂泥域に潜る性質から、海底の起伏に注視が集まる。少々ゆるやかな所であっても、谷間に沿った所は好漁場になる場合がある。上・中・下層の潮流や海底地形を見て、縄のいれ方を検討するが、特に下層の潮が速い場合は、縄のもつれが出ることがある。一直線にいれる場合、U字型にいれたり、ジグザクにする場合もある。また一度に多獲されたポイントに再度、方向を変えて試みる場合もあり、投縄の方法は多様な曲線で画面上に残された。今、多獲された実績のある場所が、次の操業に活かされて功を奏した場合もしばしばみられた。

夏は水温が高くて、食いが悪い。表面で28～29℃もある。 — という声も聴いた。産卵期という事も関係があるのだろうか？。

とにかく、私の乗船期間中、第五航海の実績を見ても、1日1箱（アカアマダイのみ）しかできない事もあり、また、8月21日のように、47箱（うち、アカアマダイ39箱）という事例もあって、漁場の選定がいかにむずかしいものか



写真8 中国船

を痛感した。

腐らぬゴミ

広い東支那海の中で、アカアマダイの好漁場と言えば、過去先人が選んだ漁区で、限られた何割かの海域である。まだ新しい漁場で今後有望視される場が出てくるかもしれぬが、とにかく先人が選んだ漁場に絞ってみると、とにかく腐らないゴミの多いのにおどろく。

一筋の縄に4m間隔の針がついていて、20鉢で針数は1,200本であるが、これにかかるゴミの量は5個や10個ではない。縄を取る船員さんは、ひんぱんに、取り揚げたゴミをはたいて落としている。ビニール袋・化繊網・ロープ・金属棒・釣テグス、など多様なゴミがこの針にかかってあがってくる。取って捨てれば、また、誰かの縄にかかるだろうし、貴重な漁場は腐らないゴミのために、魚の生息の場が失われるのではないかと思う位である。

今後の漁場愛護のため、警告の意味で、取りあげた漁具片のいくつかをおめにかける。中国や韓国製の漁具片もあろうが、まず我々から漁場浄化の姿勢を示さねばならぬと思った。ゴミ持帰り運動の必要性を痛切に感じた。

東支那海の資源管理への道程には、今なお多くの問題点が残されている。何よりも先進国日本の漁業者の姿勢を正すことが第一歩であると考えている。

* 元大分県内水面漁業試験場（大分市在住）

文 献：

新版 魚類学（下）

落合 明・田中 克1986, P.694～703

東シナ海・黄海のさかな

西海区水産研究所 1985, P.158～161

魚と貝カラー百科

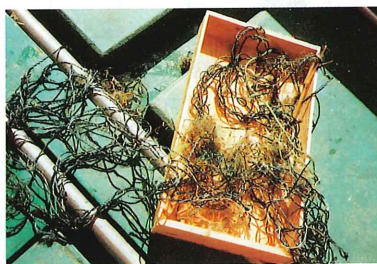
主婦の友社 1985, P.24～25

大分県漁業の動き

大分農林統計協会 1993, P.66～73



はえなわの針にかかった腐らぬゴミ
(漁具)

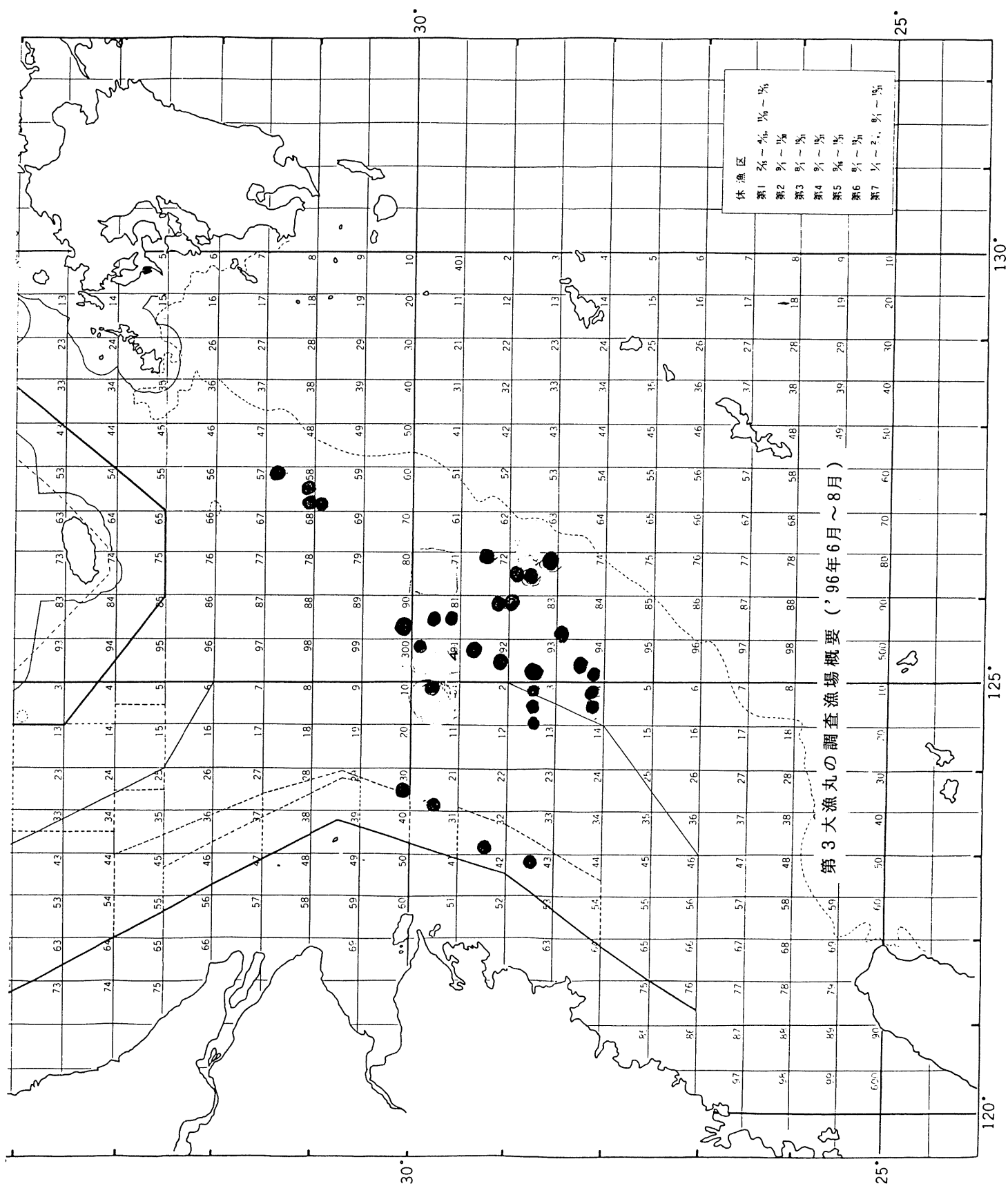


同 ゴミ
緑色のロープ、網



ゴミ
ビニール片

写真 9



報 告



「外洋性大型イカ類に関する 国際シンポジウム」の概要

海洋水産資源開発センター 企画課

I. 経緯

海洋水産資源開発センターは昭和46年7月1日に設立され、本年（平成8年）で25周年を迎えることとなった。

これを記念して海洋水産資源開発センターとしては初めての国際シンポジウムを開催することとした。

何故、国際シンポジウムのテーマとして「外洋性大型イカ」を選んだかということについては、このシンポジウムの生みの親でありながら、志半ばで急逝された故竹濱前開発部長の言葉を引用する。

「JAMARCは、我が国が沿岸から沖合、沖合から遠洋へと外延的に拡大していた時代に、新しい漁場、新しい資源の開発を目的に設立された。その後、時代の変遷とともに我が国周辺海域におけるさまざまな活動にも従事するようになったが、設立当時の新資源・新漁場の開発に関する調査も引き続き実施している。JAMARCは来る1996年、設立以来四半世紀を迎えるわけであるが、この間、手がけた水産生物のうちイカ類に限ってもカナダイレックス、ニュージーランドイレックス、オーストラリアスルメイカ、アカスルメイカ、ニセスルメイカなどがあり、現在アルゼンチンイレックス、アメリカオオアカイカ、アカイカ、ソデイカについて調査を実施している。また、これからの対象種としてトビイカも考えている。（中略）

外洋性大型イカ類はいくつか類似の生態がみられる。

まず、広範な回遊を行う。アカイカ、アメリカオオアカイカ、ソデイカはいずれも産卵場が熱帯または亜熱帯と考えられている。

また、短命で成長速度が非常に速いと推定される。3種とも寿命がほぼ1年と考えられている。ソデイカでは成長時には漁獲物の体長モードは毎月7～8 cmの割合で大きくなる。こうした成長速度を支える代謝機構には、種間に通ずるものがあるのではなかろうか。（中略）

（外洋性大型イカは、）外洋性であるがゆえに研究する機会が少なく、よく分かっていないことが多い。しかし、前述したように生態的に似た点があり、ある特定種での知見が他の種の研究のヒントになることもあると考えられる。

JAMARCの今後の調査対象として、とりわけ新しい水産資源としてイカ類は重要なものである。（略）

JAMARCは、当然のことながらイカに限らず広く水産資源について調査を行う機関である。だが、今回25周年を迎えるにあたり、外洋性大型イカ類に関するシンポジウムを企画するに至ったわけをご理解いただけたであろう。

なお、これらのイカは身近な研究対象とはなりにくく、必然的に研究者も限られてくる。したがって、わが国のみならず広く世界各国からの参加を求めている。（以下略）（「海と生物」Vol. 17-No. 6 December 1995（株）生物研究社刊）より引用。一部加筆訂正。）

このシンポジウムの企画運営のために、日本大学の奥谷教授を長とする実行委員会を組織し、

講演者の決定、プログラムの策定等を行った。
外国の講演者については、アメリカ合衆国、ロシア、イギリス、オーストラリア、アルゼンチン、ペルーの6ヶ国から7人の研究者をお招きした。

II. シンポジウムの概要

1. スケジュール等

日 時：平成8年7月18日 9:00～17:20
19日 9:30～17:40
場 所：三会堂ビル9階 石垣記念ホール

2. プログラム

シンポジウムは「アカイカ」、「アメリカオアカイカ」、「ソデイカ」、「アカイカ科他」、「漁具・漁法、利用・加工」、最後に「総合討論」の6つのセクションに分けた。



開会の挨拶をする中村理事長

まず主催者を代表して海洋水産資源開発センター中村理事長の開会挨拶で幕を開け、水産庁石川次長から祝辞をいただき、奥谷教授の「外洋性大型イカの生物学的意義と潜在資源」と題する基調講演（論文は「JAMARC」に掲載）のあとセッションにはいった。



基調講演中の奥谷喬司氏

詳細なプログラムは次のとおりである。

第1日目（7月18日（木））

セッション1：アカイカ

座長：窪寺恒巳（国立科学博物館）

- (1) 北太平洋におけるアカイカの季節的回遊および日周鉛直移動 (10)
村田 守*（西海区水産研究所）・中村好和（北海道区水産研究所）
- (2) 北太平洋におけるアカイカの資源構造
谷津明彦*・田中博之・森 純太（遠洋水産研究所）
- (3) 南半球におけるアカイカの資源一分布、生物学及び潜在資源量

Overview of southern hemisphere *Ommastrephes bartrami* resources — distribution, biology and fisheries potential.

M. C. Dunning（オーストラリア、クィーンズランド第一次産業局水産部）

セッション2：アメリカオアカイカ

座長：M. C. Dunning（オーストラリア、クィーンズランド第一次産業局水産部）

- (4) 南東太平洋海域におけるアメリカオアカイカ資源の漁場開発
黒岩道徳（海洋水産資源開発センター）
- (5) 南東太平洋海域におけるアメリカオアカイカの成長と資源構造
増田 傑（静岡県水産試験場）・余川浩太

郎*・谷津明彦(遠洋水産研究所)・川原重幸(国際農林水産業研究センター)

- (6) ペルーにおけるアメリカオオアカイカの生物学と漁業

Biology and fishery of *Dosidicus gigas* in Peru.

Carmen Yamashiro*, Luis Mariategui, Juan Arguelles, Ricardo Tafur and Miguel Rabi(ペルー海洋研究所)

セッション3: ソデイカ

座長: R. E. Young(ハワイ大学海洋地球科学部)

- (7) ソデイカの生活史

Life history of the *Thysanoteuthis rhombus*.

A. I. Arkhipkin* and C. M. Nigmatullin(ロシア大西洋漁業海洋研究所)

- (8) 沖縄周辺海域におけるソデイカの漁場分布と生物特性

川崎一男*・鹿熊信一郎(沖縄県水産試験場)

- (9) 日本海におけるソデイカ漁業について
武田雷介* (兵庫県立水産試験場)・反田實(兵庫県但馬水産事務所試験研究室)

座長: 瀬川 進(東京水産大学)

- (10) 沖縄周辺海域におけるソデイカの生物学特性について

武智 博*(海洋水産資源開発センター)・清水弘文(西海区水産研究所石垣支所)

- (11) ソデイカ流通の現状

大本茂之*・梶田 淳・白石博美(東和科学株式会社)

第2日目(7月19日(金))

セッション4: アカイカ科他

座長: 川原重幸(国際農林水産業研究センター)

- (12) トビイカの生態

Aspects of the ecology of *Sthenoteuthis oualaniensis*.

R. E. Young(ハワイ大学海洋地球科学部)

- (13) アルゼンチンマツイカの生活史と漁業生物学

Fishery biology and life history of *Illex argentinus*.

N. E. Brunetti, M. L. Ivanovic*, G. R. Rossi, B. Elena and S. E. Pineda(アルゼンチン国立漁業調査・開発研究所)

- (14) 南大洋におけるミナミスルメイカー開発と資源管理に関連してー

Todarodes filippovae in the Southern Ocean - an appraisal of knowledge relevant to exploitation and management.

P. G. Rodhouse(イギリス南極調査所)

- (15) ドスイカの分布、生物学、生態と漁業

The Gonatid squid *Berryteuthis magister*: distribution, biology, ecological connections and fisheries.

K. N. Nesis*(ロシア科学アカデミー・シルショフ海洋研究所)

C. M. Nigmatullin(ロシア大西洋漁業海洋研究所)

セッション5: 漁具・漁法、利用・加工

座長: 村井武四(海洋水産資源開発センター)

- (16) 大型アカイカの釣獲特性

稲田博史*(東京水産大学)・廣川純夫(海洋水産資源開発センター)・前田 弘・深田耕一(水産大学校)・山崎慎太郎・渡部俊広(水産工学研究所)・谷津 明彦(遠洋水産研究所)

- (17) 大型アカイカ釣漁業における集魚灯の有効利用について

渡部俊広*(水産工学研究所)・稲田博史(東京水産大学)

- (18) 外洋性大型イカ・アメリカオオアカイカの利用加工

中谷 肇(青森水産物加工研究所)

(19) イカ肉の物性

小川廣男*・望月義範・磯 直道（東京水産大学）

(20) 日本におけるイカ利用・加工技術の現状

福田 裕*（国際農林水産業研究センター）
・岡崎恵美子（中央水産研究所）

（*：講演者）

セッション6：総合討論

座長：畑中 寛（遠洋水産研究所）

(21) 総合討論

ポスターセッション

(1) アカイカの寄生虫とそれによる系群判別
長澤和也・森 純太（遠洋水産研究所）

(2) インド洋におけるトビイカの分布と生物学的特性－照洋丸による調査航海の中間報告

谷津明彦（遠洋水産研究所）・甲藤幸一（海洋水産資源開発センター）・柿添太（名古屋港水族館）・山中完一（水産庁照洋丸）・水野恵介（遠洋水産研究所）

（講演の順番は、諸般の事情により上記プログラムとは異なっている。）

シンポジウムのテーマが「外洋性の大型イカ」という限られたものであったので参加者は100名程度ではないかという予想をしていた。会場の設営の関係から、参加を登録制とし申し込み受けを開始した。最初の出足は鈍かったものの、シンポジウムが近づくにつれ、その人数は多くなり、ほぼ定員一杯となった。



会場の様子

シンポジウムがイカに関する生物学的な題材を扱った講演の他、漁法、利用加工に関するセッションも設けたので、この方面からの参加者も多く、（予想以上に）盛況であった。

シンポジウムの概要については、海洋水産資源開発センターの資料シリーズで講演集を発行する予定なので各講演の詳細については資料シリーズを参照されたい。以下、「セッション6：総合討論」の概要を報告し、シンポジウムの成果に言及したい。

Ⅲ. シンポジウムでの成果

(1) 総合討論は畑中遠洋水産研究所々長を座長として行われた。座長から、当該シンポジウムにおいて幅広い議論があったこと、そして新しい情報が提供されたとのコメントがあり、各講演に関する質疑応答を行った後、次のテーマに絞って当該セッションを進行していくことが提案され了承された。

① 生物学的に見た外洋性大型イカ類の生存のための戦略

② 漁法と利用加工

③ 外洋性大型イカ類の開発のあり方と将来展望

(2) 生物学的に見た外洋性大型イカ類の生存のための戦略

外洋性大型イカは大型であるがライフサイクルが1年といわれている。これに関連して、オーストラリアのDunning氏からは南半球のトビイカの年齢は7～10ヵ月のものが多く観測され、まれに12ヶ月のもあるということ、またロシアのArkhipkin氏からはソデイカに関しては12～13ヶ月が最長だとの報告があった。まとめとして座長から、ライフサイクルが12ヶ月でないとは仮定すれば毎年の産卵時期がずれることになり、生物学的には考えにくい現象であり、10ヶ月、あるいは13ヶ月の個体が発見されればライフサイクルは12ヶ月と考えるのがイカの研究者としては妥当であるとのまとめを行った。

続いて座長から「ソデイカの移動は回帰を伴った回遊か、あるいは単なる漂流者なのか、この行動と種の繁栄の関係如何」との問題提起がなされた。これに対して、海洋水産資源開発センターの村井開発部次長が、「開発センターが沖縄周辺海域で実施しているソデイカの標識放流で全く再捕がなかったものの今後の調査で移動の範囲に関するデータも得られ、アイソザイム、ミトコンドリアDNAを用いた分析により系群判別が可能となる」との見解を述べた。国立科学博物館の窪寺氏は「ソデイカは格好は漂流者だが肉質からは力のある生物である。イカ類は比重が大きく泳がなければ沈む。かなりのエネルギーを消費していると思われるが、成長に要するエネルギーと運動のためのエネルギーの配分如何。」という質問があり、座長から「急速に成長するイカは絶え間なく餌を採っており、例えばアカイカはDSLの移動と共に日周運動をする。従ってアカイカは24時間餌を食べているのではないか。（この件に関し、東京水産大学の稲田氏からは「DSLがあるところにアカイカはいるが、DSLがあるところに必ずしもアカイカがいるとは限らない。」と補足説明あり。）」と説明があった。英国のRodhouse氏は「ソデイカはその形状について流体力学的判断してもgriderである。」旨説明があった。

東京大学の清野氏（参加者）から、「イカに関する流体力学については、ソデイカ、アオリイカ、アカイカはそれぞれ形状が異なり、一般論では整理できないのではないか。今後『比較筋肉学』のような分野が発達すれば推測できるのではないか。」という興味深い意見が述べられた。

(3) 漁法・利用加工について

国際農林水産業研究センター福田氏は「イカ（特にツツイカ目）は塩辛にすると熟成が進み美味しくなるが、これは内在する強烈な蛋白質分解酵素が働いているためである。しかし、この酵素は他の加工品を製造するとき

はむしろ邪魔をするので、イカ加工品のほとんどは、製造過程で加工処理され、酵素を失活させている。イカ肉が魚肉のように蒲鉾になり難い原因もこの酵素のためではないかと現在研究中である。イカの成長は非常に早いですが、当然蛋白質の分解と合成の代謝スピードも非常に速いはずで、強烈なこの酵素は分解に拘わっているのではないかと考えられている。また、この酵素活性は低温度に生息するイカほど強烈である。イカの生理生態は加工特性に大いに関係しており、密接である。」というユニークな私見を披露された。

(4) 外洋性大型イカ類の開発のあり方と将来展望

国際農林水産業研究センター川原氏から海洋水産資源開発センターの調査に触れ、「海洋水産資源開発センターが漁場開発等の業務を通じて、企業化調査のみならず、沿岸国との科学的な共同調査も実施しているのは素晴らしいことであり、今後の海洋水産資源開発センターの活躍に期待する。」という海洋水産資源開発センター役職員一同にとって励みになる意見を頂戴した。

最後に座長が将来展望について

- ① 二日間の議論で大きな進歩があった。また、一方で解明すべき課題も生じた。
- ② 新しい資源の開発も重要であるが、今後は資源の管理について積極的に取り組む必要がある。
- ③ 国際的、学際的な協力のもとで研究を進



頑張る海洋水産資源開発センター職員

めていくことの重要性がこの場で再確認された。

というまとめを行った。

また、「海洋水産資源開発センターがシンポジウムを開催したことに対してイカの研究者を代表してお礼をしたい。30周年の時もイカシンポジウムを希望する」旨謝辞が述べられた。

IV. おわりに

国際シンポジウムの開催は海洋水産資源開発センターにとって「未知の領域」でありましたが、多くの参加者を得ることができ成功裡に終了したのではないかと考えております。

国際的にもイカ類の研究者の方々との友好を深めることができ、今後の海洋水産資源開発センターの調査活動にとって有意義な成果を残すことができました。

これはひとえに、お忙しい中、講演を快くお引き受け下さった国内外の研究者の皆様、シンポジウムの運営等に御協力いただいた実行委員会の奥谷委員長はじめ委員各位、外国人研究者の招聘について多大な御協力を賜った関係団体、そして、本シンポジウム全般にわたり御指導して下さいった水産庁のおかげであると深く感謝する次第です。

(文責：川田忠宏)

第25回海洋水産資源開発魚種展示会の概要

— おさかなフェア '96への参加 —

海洋水産資源開発センター 企 画 課

平成8年10月1日（火）東京都立産業貿易センター5階において、「第25回海洋水産資源開発魚種展示会」を開催いたしました。

当日は「東京都民の日」ということもあり、小・中学生をはじめ多くの人の来場を期待していましたが、台風の接近にともない、あいにく朝から雨という最悪のコンディションのためか前回よりも少ない1,200人の来場者にとどまりました。

また、開催にあたっては魚食普及月間でもある10月に昨年同様「おさかなフェア」と同時開催する事により、魚食普及にも努めました。

さて、今年は開発センター創立25周年にあたり、先に行われた25周年記念行事「外洋性大型イカ類に関するシンポジウム」もあったことから、今回の展示会はイカをテーマにした特別コーナーを設け、様々なイカを展示するとともに、漁具（自動イカ釣り機まで展示しました）、漁法から加工品まで幅広く展示を行いました。さらに、円形の大水槽を用意し、活きたイカの群遊を見ていただくという壮大なる計画を立てていました。しかしながら、悪天候のため漁船が出漁できず、とうとうイカがアジの大群に変わってしまうというハプニングにもみまわれました。

その他の展示コーナーについては、まず受付を通り過ぎると先ほど話しましたイカが泳ぐはずだった円形大水槽、氷柱魚に出迎えられ展示会の看板をくぐります。左からぐりと回るといきなり遠洋底びき網（深海）コーナーのグロテスクな魚たちが目に付きます。隣には新操業形態開発実証化事業コーナー、ハダカイワシと

続きます。カンパチ、シマアジ、マダイ等が遊ぶ大水槽をはさんだ反対側にはイカ特別展示コーナーを設け、まき網・かつお一本釣りコーナーにはビンチョウ、カツオ等が横たわっています。次のコーナーはまぐろはえなわ、ガストロ資源です。まぐろはえなわではニタリ、ヒラシモクザメ、ヨゴレとサメ類を数多く展示するとともに、バショウカジキ、メカジキ、フウライカジキと“大物”の魚が並び、子供たちをはじめ、大人までもが“こんな大きな魚初めて見た”とか、“サメに初めて触った”というような歓声が数多く聞かれました。このコーナーにはパネルとともに実物の針、テグス、ボンデンを使ったはえ縄を展示するとともに今年度で調査終了となるガストロも多数展示し、有終の美をかざりました。

ガストロの斜め前、資料室コーナーをすぎると沖合関係のコーナーです。美しい熱帯魚が泳ぐ水槽を取り囲むように、展示コーナーが広がっています。沖合関係では本年度から始まった資源管理型沖合漁業推進総合調査（東海アマダイ）の漁獲物をはじめ、ベニズワイや真っ赤なイバラガニの仲間など色とりどりの展示魚が並びました。その横は毎回人気のある「おさかないろいろコーナー」となり、たくさんの魚たちが展示され、来場者は興味津々に見入っていました。

それぞれの展示コーナーを見終わったあとは来場者の方々が楽しみにしている試食コーナーです。今回の試食はガストロ、アメリカオオアカイカ、アカスルメを材料に10種類の料理を用意しました。ガストロのステーキは温かい方が

美味しいということで、試食実演を行うなど工夫を重ね、来場の方々から好評を得ました。また、企画課では秘密裏のうちに来場者を驚かすべくビックな企画を考えていました。料理をお願いした(株)つかださんにご無理をいい、用意しようとしたものは

なんと、アメリカオアカイカの姿焼きでした。一番大きなアメリカオアカイカを使い完成にまでこぎつけたのですが、搬入する前に気を利かしたつかだの料理人さんが“これでは食べにくいだろう”と切り刻んでしまい、とうとう陽の目をみないまま終わってしまいました。

このような感じで開催された今回の展示会は、レイアウトの見直しによる広々としたスペース、展示魚解凍時のドリップ防止のためのとの設置（ちょっと失敗しましたが）、大量のドライアイス及び消臭スプレーの使用による臭いの防止など、様々な工夫を重ねた結果、来場者は前回よりも少なかったのですがより良い展示会になったと思います。

次に、試食コーナーにおいてアンケート調査を行ったところ、多数の方々にご協力いただきました。以下にアンケート結果について簡単に取りまとめてみました。

○展示会（おさかなフェア）について

1. 入場者の推移（資料1）

- (1) 前年度と比べ来場者数が減少した。

本年度は台風の接近に伴い、前日から風雨が強く、来場者は前年の約6割にとどまった。特に、女性及び子供の来場者は約半数となった。

- (2) 前年度は土曜日開催のためかお昼前の入場者が一番多かったが、本年度は開場時の入場者が一番多かった。

2. 公式入場者及びアンケートの有効回答者について（資料2）

- (1) 入口からの入場者（カウントされた方）の

ほかに、例年出口等から入場者もあるので入場者数を1,200人とした。

- (2) 本年度はアンケートを試食コーナーで直接配布したため、回答者数が大幅に増加した。また、同様の理由で複数回答者は一人もいなかった。
- (3) 次回の案内状の送付を希望する人が、飛躍的に増加した。

3. 来場者の年齢（資料3）

- (1) 男性については前年度に比べ20代、50代の比率が、女性については20～40代の比率が増加した。
- (2) 全体的に見ると年齢が高くなるほど入場者数が増加する傾向は前年とほぼ変わらないが、本年度は特に20代の入場者が増加した。

4. 来場者の職業（資料4）

- (1) 平日の開催ということもあり、昨年大幅に減少した公務員の来場が回復したとともに、学生等の来場が増加した。
- (2) また、本年度は水産業界関係に重点をおき案内状を送付したため、水産団体、水産関係の来場者が大幅に増加し、開発センターの業界へのPRに大きく貢献できた。

5. 来場者の住所（資料5）

- (1) 東京、埼玉、千葉、神奈川の1都3県で来場者の約9割を占めた。おさかなフェアの定着により会場近辺の来場者が多いためと思われる。
- (2) 前年度大幅に減少した神奈川県からの来場者が本年度は回復した。これは、平日開催のため、勤務の合間の来場者が回復したためと思われる。

6. 過去の来場（資料6）

- (1) 来場者のうち、約3割の方が昨年度も来場されていた。また、過去4年間に1度でも来場された方で見ると約4割となり、新規の来場者は全体の約6割となっている。これは、

前年度の新規来場者が約 8 割であったことを見ると、新規来場者が減少していることが示唆される。今後は、新規来場者の増加を目指し、一層の P R を行う必要がある。

7. 来場の動機（資料 7）

- (1) 案内状による来場が約 4 割と圧倒的に来場の動機の多くを占めている。案内状は前年度の来場者のうち送付を希望された方なので、これからも多くのリピーターの来場を期待できる。
- (2) その他の媒体については傾向的にはあまり例年と変わりはないが、少しずつ効果が減少している。しかし、友人等から誘われての来場が約 4 割を占め、案内状の送付による新規来場者の増加には効果があると思われることから、引続き案内状の送付を行うとともに、新たな P R 方法を考え、一層の集客に努めたい。

8. 展示の評価（資料 8）

- (1) 今回の展示の評価は、「良い」が圧倒的に多いが、前回に比べると多少評価が下がっている。これは、今回 O-157 の影響で来場者が楽しみにしていた試食コーナーが縮小したことと、刺身などなまものの試食が行なかったこと等から、このような印象を与えたのではないと思われる。

9. 興味のあったもの、なかったもの（資料 9）

- (1) 圧倒的に展示魚等に人気があった。なかでも展示する魚種が豊富なこと、実際に魚に触れることなど、普段見れないもの、体験できないことが身近にできるということに来場者が興味をひかれていることがうかがわれた。
また、試食も相変わらず人気が高かった。
- (2) 興味のなかったものについては、資料 9 の表のとおりとなっている。

10. 来場者からの意見要望事項（資料 10）

- (1) 全体的には良い評価を受けているものの、

まだ P R が足りないという意見が多かった。これは開発センターのみならずおさかなフェア全体の課題であろう。

- (2) また、O-157 の関係で刺身等がなかったことが残念だったようであり、次回は来場者の要望に応えられるように行いたい。

○試食について

1. 試食のメニュー（資料 11）

試食品リスト参照

2. 試食品の評価（資料 12）

資料 12 参照

以上のように、今回の展示会は悪天候、全国で発生した食中毒の影響等で難しい状況ではありましたが、センター職員一同のがんばりで成功に終わったと思います。ただ、次回に向けての課題も残り、また、開発センターの事業が遠洋から沖合へシフトしつつあり、従来の展示方法ではセンターの事業内容を紹介するのに充分ではなくなっていると考えられますので、みなさんのご意見等をうかがいながら、もっとすばらしい展示会にしていきたいと考えております。

今回は加工品の提供を全国水産加工業協同組合連合会及び全国いか加工業協同組合に、イカ釣り針の提供を協漁具にお願いし、快く引き受けていただきました。

また、魚料理のパンフレットを日本水産株式会社、イカのサンプルを南西海区水産研究所にお願いする等、各方面のご協力のもとに展示会が開催されたことをご報告するとともに、ご協力をいただいた皆様に紙面を借りましてお礼申し上げます。

（ I . K . ）

第25回海洋水産資源開発魚種展示会（おさかなフェア'96）アンケート結果

資料1 入場者数の推移

	平成8年10月1日（火）					平成7年9月30日（土）			
	男 性		女 性		合 計	大 人		子 供	合 計
	大 人	子 供	大 人	子 供		男 性	女 性		
～11:00	127	2	103	14	246	163	149	10	322
～12:00	113	12	80	9	214	151	170	18	339
～13:00	92	0	66	1	159	111	133	7	251
～14:00	113	8	49	7	177	150	124	26	300
～15:00	123	3	32	2	160	157	118	43	318
～16:00	52	2	18	2	74	70	70	12	152
計	620	27	348	35		802	764	116	1,682
合 計	647		383		1,030				
前年比(%)	77.3		45.5		61.2				

（注）入口からの入場者分のみ

資料2	公式、入場者数	1, 2 0 0 名（前年度 2,000名）
	アンケート回答者数	3 6 1 名
	再送付希望者数	2 3 6 名
	アンケートの複数回答等分	0 名
	有効回答者数	3 6 1 名

資料3 来場者の年齢

年 齢	男 性			女 性			計		
		比 率	前年度		比 率	前年度		比 率	前年度
	人	%	%	人	%	%	人	%	%
10代以下	2	1.1	6.1	10	5.8	1.2	12	3.3	3.1
20代	20	10.6	7.1	27	15.7	7.4	47	13.0	7.3
30代	17	9.0	12.2	22	12.8	10.5	39	10.8	11.2
40代	37	19.6	23.5	27	15.7	13.6	64	17.7	17.3
50代	56	29.6	20.4	37	21.5	24.7	93	25.8	23.1
60代以上	56	29.6	29.6	48	27.9	28.4	104	28.8	28.8
不 明	1	0.5	1.0	1	0.6	14.2	2	0.6	9.2
合 計	189	100.0	100.0	172	100.0	100.0	361	100.0	100.0

資料４ 来場者の職業

職 業	男 性			女 性			計		
	人	比 率	前年度	人	比 率	前年度	人	比 率	前年度
学 生 等	10	5.3	4.1	16	9.3	3.1	26	7.2	3.5
専 業 主 婦	1	0.5	0	87	50.6	56.2	88	24.4	35.0
水 産 団 体	30	15.9	6.1	8	4.7	1.2	38	10.5	3.1
水 産 関 係	42	22.2	19.4	6	3.5	2.5	48	13.3	8.8
会 社 員	29	15.3	38.8	7	4.1	8.6	36	10.0	20.0
公 務 員	40	21.2	7.1	20	11.6	2.5	60	16.6	4.2
無 職	17	9.0	7.1	7	4.1	4.9	24	6.7	5.8
そ の 他	17	9.0	9.2	17	9.9	2.5	34	9.4	5.0
不 明	3	1.6	8.2	4	2.3	18.5	7	1.9	14.6
合 計	189	100.0	100.0	172	100.0	100.0	361	100.0	100.0

(注) 学生等には、児童・生徒を含む。

資料５ 来場者住所（都道府県別）

都道府県名	今 年 度 来 場 者		前 年 度 来 場 者	
	人	比 率	人	比 率
宮 城 県		%	1	0.4
茨 城 県	12	3.3		
栃 木 県	2	0.6		
埼 玉 県	30	8.3	19	7.3
千 葉 県	32	8.9	27	10.4
東 京 都	217	60.1	191	73.5
神 奈 川 県	41	11.4	15	5.8
静 岡 県	4	1.1	1	0.4
三 重 県			1	0.4
大 阪 府			1	0.4
愛 媛 県	1	0.3		
不 明	22	6.0	4	1.5
合 計	361	100.0	260	100.0

(東京近郊の都県からの来場者内訳)

東京都 23 区及び 3 名以上の来場者があった市のみ

都道府県							
区、市名		'96	'95	区、市名		'96	'95
埼玉県	計	人	人	東京都 (続き)	新宿区	6	7
	うち 所沢市	4			港区	37	30
	鴻巣市		6		渋谷区	3	7
千葉県	計	32	27		品川区	17	6
	うち 市川市	3	7		目黒区	3	8
	松戸市	6	7		大田区	18	22
	千葉市	9	5		世田谷区	13	9
	船橋市		3		豊島区	4	2
東京都	計	217	191		板橋区	3	3
	うち 足立区	10	4		中野区	12	7
	葛飾区	3	7		杉並区	9	10
	江戸川区	7	4		練馬区	3	6
	江東区	6	7	神奈川県	計	41	15
	墨田区	1	6		うち 横浜市	18	6
	台東区	3	2		川崎市	9	
	荒川区	1	1				
	北区	10	11				
	中央区	12	5				
	千代田区	6	2				
	文京区	6	5				

資料 6 過去の来場者数 (回答者のみ)

	'96	'95	'94	'93
	人	人	人	人
男 性	189	98	275	338
女 性	172	162	319	416
合 計	361	260	594	785

注：'93の合計は、不明（未記入）31名を含む。

過去の来場の状況 (回答者のみ)

今 回	うち 過去の来場状況				
来場者数	'95	'94	'93	'91	無回答
人	人	人	人	人	人
361	105	76	51	42	206

過去の来場回数（回答者のみ）

回 数	2 回 目	3 回 目	4 回 目	5 回 目	計
	9 2	2 9	1 0	2 3	1 5 4

資料 7 来場の動機

来場の理由	人 数		比 率	
	人 数	比 率	人 数	比 率
1.案内状の送付	157	41.5	64	24.6
2.ポスター	13	3.4	23	8.8
3.新聞等	16	4.2	26	10.0
4.テレビで見た	1	0.3	5	1.9
5.貿易センターの掲示	35	9.3	27	10.4
6.友人等から	96	25.4	84	32.3
7.その他	55	14.6	5	1.9
無回答	5	1.3	26	10.0
回答者総計	378	100.0	260	100.0

資料 8 展示の評価

今回の展示の評価			'95の展示の評価	
		回答者338 名中の比率		回答者222 名中の比率
良かった	203	60.1	168	75.7
概ね良かった	101	29.9	39	17.6
普 通	33	9.8	15	6.8
概ね悪かった	1	0.3	0	
悪かった	0	0	0	
無回答	23		38	
合 計	361	100.0	260	100.0

資料 9 展示等の中で興味があったもの、なかったもの

興味があったもの

回答者数246人(複数回答あり)

項 目	計	
	内 訳	
開発センター関係	人 人	2 7 1
展示コーナー等	1 4	
・新魚種、漁法	7	
・沖合コーナー	2	
・はく製	2	
・その他	3	
展示魚等	1 8 8	
・魚種別	5 9	
・種類が多い	3 9	
・展示魚全般	1 7	
・触れた	1 5	
・生の魚	1 5	
・見たことのない魚	1 3	
・深海魚	9	
・大型の魚	7	
・珍しい魚	6	
・活魚水槽	3	
・その他	6	
試 食	6 4	
・料理全般	3 4	
・ガストロ	1 3	
・調理法	3	
・その他	1	
フェアー全体	5	
すべて面白かった	4	
クイズ	1	

興味がなかったもの

回答者数24人(複数回答あり)

項 目	計
魚の展示	9 人
まき網の模型	5
販売品等	4
試 食	3
その他	4

資料10 来場者からの意見・要望事項

回答者数 96人（複数回答あり）

意見・要望		意見・要望	
	内訳		内訳
日数・曜日に関するもの	5	展示について	30
複数日開催（回数を）	4	説明（パネル等）が少ない	8
休日開催	1	展示方法の改善・充実を	5
PRが足りない	10	生臭い	4
アクセスに工夫を	2	加工業者に使える情報を	2
良かった	12	展示がさみしくなった	1
全 体	8	その他	10
説明が丁寧	2	試食について	24
スペースが広い	2	試食は良かった・続けて	3
即売について	12	暖かくして	6
刺身がなくて残念	10	一切れを小さくして	2
種類を多くして欲しい	2	試食コーナーを充実して	1
質問・意見	3	その他	12

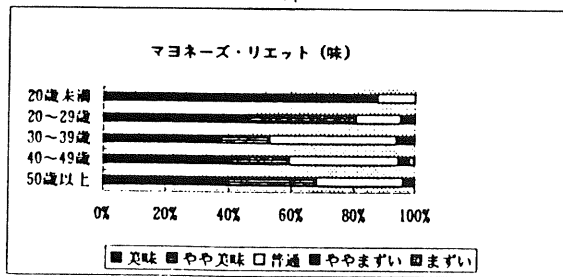
海洋水産資源開発センターコーナー

試食品リスト

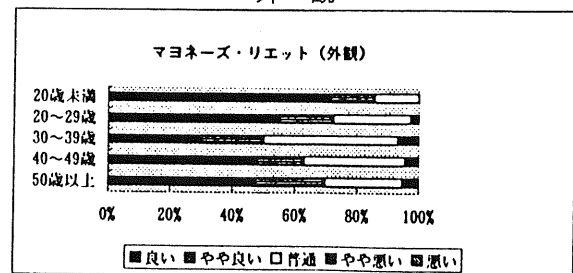
- ① ガストロのマヨネーズ・リエット
- ② ガストロのカレー煮
- ③ ガストロの甘酢あんかけ
- ④ ガストロのステーキ
- ⑤ ガストロの衣揚げ梅肉ソース
- ⑥ アメリカオオアカイカのバーベキュー焼き
- ⑦ アメリカオオアカイカと椎茸の塩炒め
- ⑧ アメリカオオアカイカのコーンフレークス揚げ
- ⑨ アカスルメイカのごまみそ和え
- ⑩ アカスルメイカの甘辛いため

ガストロ

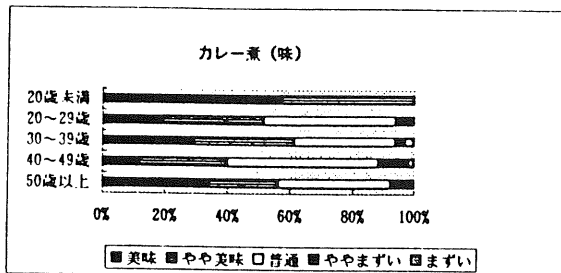
味



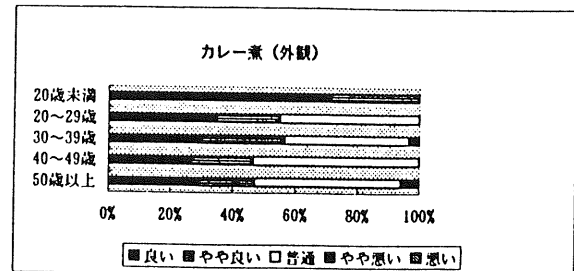
外観



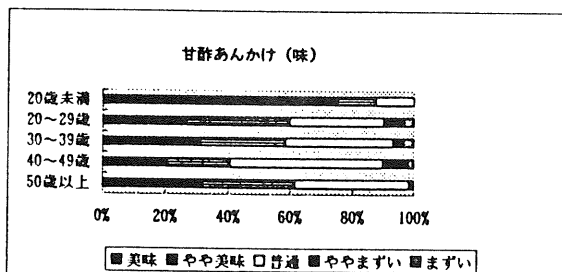
カレー煮 (味)



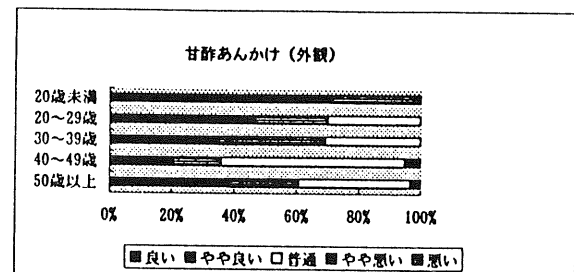
カレー煮 (外観)



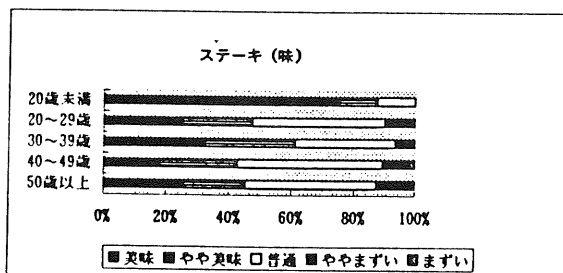
甘酢あんかけ (味)



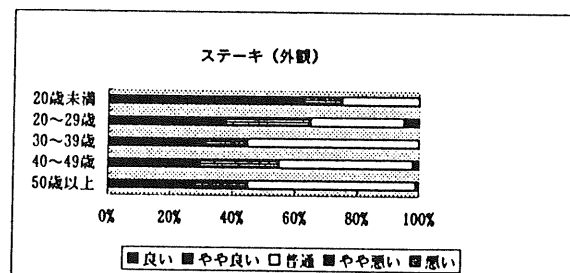
甘酢あんかけ (外観)



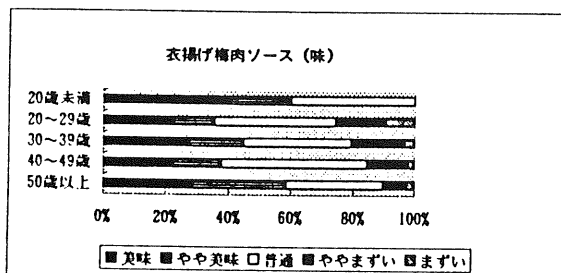
ステーキ (味)



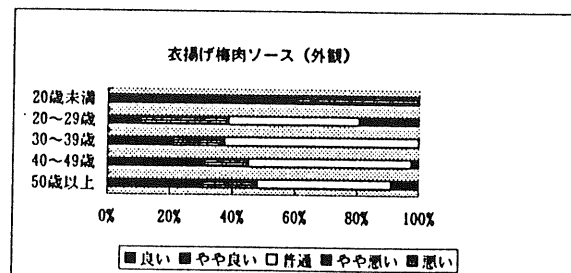
ステーキ (外観)



衣揚げ梅肉ソース (味)

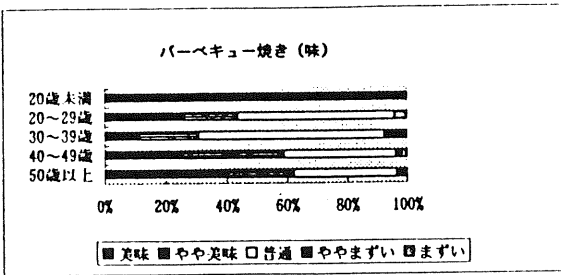


衣揚げ梅肉ソース (外観)

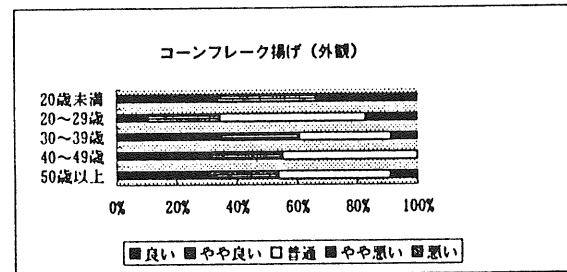
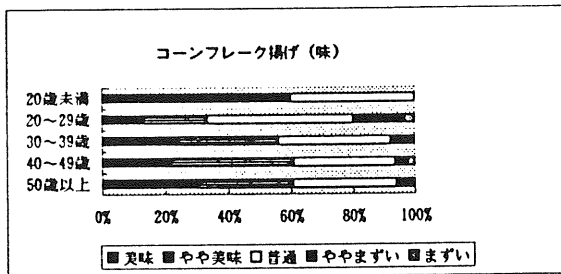
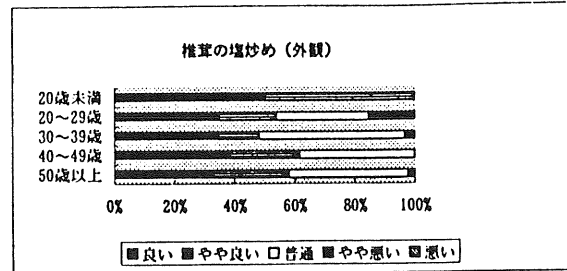
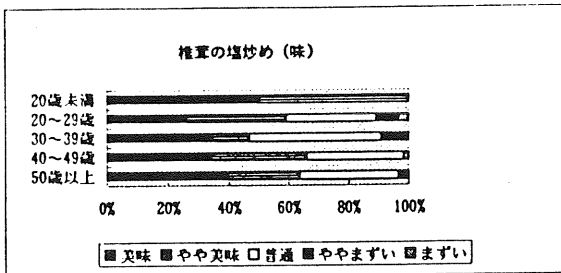
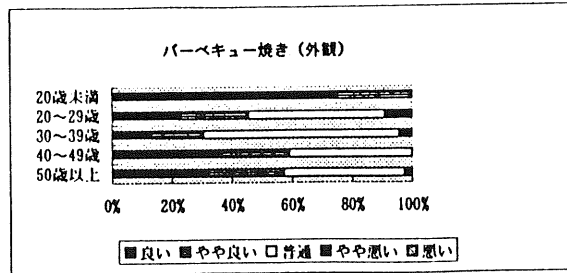


アメリカオオカイカ

味

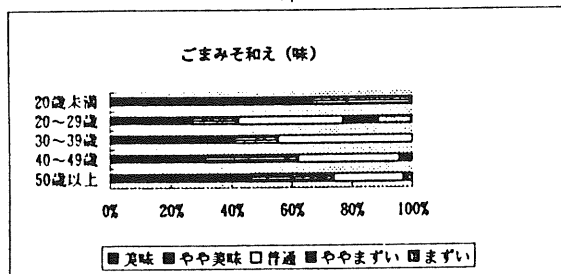


外 観

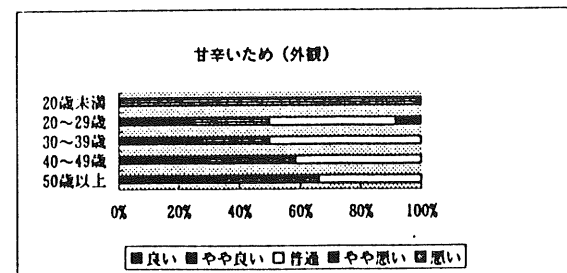
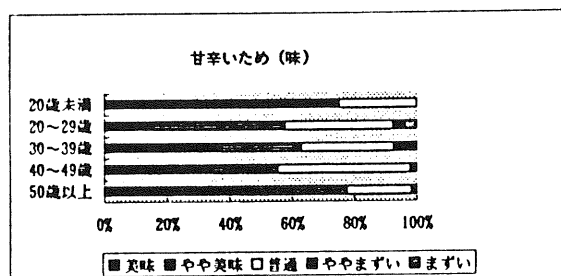
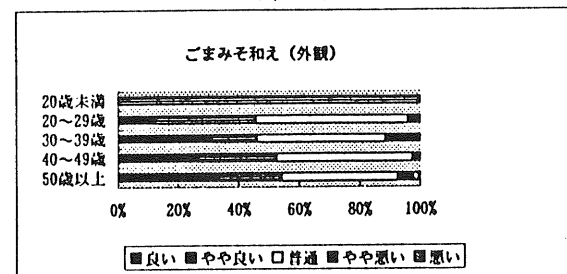


アカスルメ

味



外 観



25 年 の 動 き

役員 の 推 移

旧役員	現役員
氏 名 (在任期間)	氏 名 (就任年月日)
理事長 久宗 高 (S46. 7. 5～S49. 7. 31) 安福 数夫 (S49. 8. 1～S52. 3. 22) 藤村 弘毅 (S52. 3. 23～S59. 7. 26) 尾島 雄一 (S59. 7. 27～H 4. 7. 29)	理事長 中村 晃次 (H 4. 7. 30)
専務理事 油井 恭 (S46. 7. 5～S51. 5. 24) 江原 博茂 (S51. 6. 17～S56. 5. 12) 大鶴 典生 (S56. 5. 14～S59. 7. 10) 三村 皓哉 (S59. 7. 11～S62. 8. 31) 岩崎 寿男 (S62. 9. 1～H 4. 5. 29) 細田 忠雄 (H 4. 5. 30～H 8. 7. 31)	専務理事 水谷 宏 (H 8. 8. 1)
理 事 牧 重昂 (S46. 7. 1～S52. 2. 28) 菅野 進 (S46. 7. 1～S50. 3. 31) 滝口佐佐エ門(S46. 7. 1～S59. 3. 31) 和田 光太 (S50. 4. 1～S53. 3. 31) 中村 清一 (S52. 3. 1～S56. 1. 31) 高井 義助 (S53. 4. 1～S56. 3. 31) 仲村 宏 (S56. 2. 18～S61. 3. 12) 安藤理三郎 (S56. 4. 1～S60. 5. 16) 井村 幸二 (S60. 5. 17～H 元. 7. 31) 竹内 晃 (S61. 3. 13～S63. 7. 31) 四宮 秀雄 (S59. 4. 1～H 5. 3. 31) 渡辺 智 (S63. 8. 1～H 3. 9. 30) 武内 信能 (H元. 8. 1～H 3. 9. 30)	理 事 寺本 紀久 (H 8. 8. 1) 和田卓一郎 (H 3. 10. 1) 吉崎 清 (H 7. 4. 1)
監 事 喜多山 巖 (S46. 7. 1～S50. 3. 31) 川口 方一 (S50. 4. 1～S53. 3. 31) 大鶴 典生 (S53. 4. 7～S56. 5. 13) 三村 皓哉 (S56. 5. 14～S59. 7. 10) 西川 俊幸 (S59. 7. 27～S63. 9. 30) 廣重 和夫 (S63. 10. 16～H 4. 4. 22)	監 事 大城 裕行 (H 4. 4. 23)

評議員の推移

旧評議員

現評議員

氏 名 (在任期間)	氏 名 (就任年月日)
天辰祐之郎 (S62. 3. 20～H 2. 8. 22)	上田 大和 (S60. 11. 11)
荒勝 巖 (S49. 8. 2～S63. 3. 17)	大鶴 典生 (H 2. 1. 17)
岩下 光男 (S46. 8. 2～S60. 11. 11)	加倉井 弘 (H 元. 8. 2)
及川 孝平 (S46. 8. 2～S55. 6. 25)	金子原二郎 (S62. 6. 22)
大口 駿一 (S55. 8. 2～S62. 10. 1)	中部慶次郎 (H 2. 8. 23)
大場 敏彦 (S54. 9. 20～S63. 3. 17)	井村 幸二 (H 7. 8. 2)
岡井 正男 (S46. 8. 2～S51. 6. 15)	海野 研一 (H 4. 8. 2)
金子 岩三 (S50. 11. 7～S61. 12. 27)	国井 康夫 (H 7. 8. 2)
亀長 友義 (S50. 6. 17～S62. 6. 22)	佐野 宏哉 (H 5. 8. 3)
小副川十郎 (S51. 3. 2～S55. 8. 1)	中野 義秋 (H 4. 8. 2)
佐野 宏哉 (S63. 3. 17～H 2. 8. 22)	日高 寛治 (H 7. 8. 2)
鈴木 正長 (S49. 8. 2～S51. 3. 31)	平野 敏行 (H 4. 2. 7)
高橋長次郎 (S55. 8. 2～S59. 11. 12)	藤原 和人 (H 8. 12. 6)
竹林勝三郎 (S59. 11. 12～H 元. 8. 1)	眞鍋 武紀 (H 8. 12. 6)
富永 弘 (S51. 6. 15～S57. 6. 21)	森川 貫 (H 7. 8. 2)
中井 春雄 (S46. 8. 2～S49. 8. 1)	米沢 邦男 (H 7. 8. 2)
中部 謙吉 (S46. 8. 2～S52. 1. 14)	
中部藤次郎 (S52. 3. 1～S62. 1. 29)	
畠山 司 (S46. 8. 2～S55. 8. 1)	
浜田 正 (S46. 8. 2～S46. 12. 10)	
藤田 巖 (S46. 8. 2～S50. 6. 17)	
藤村 弘毅 (S48. 3. 3～S50. 11. 7)	
増田 正一 (S46. 8. 2～S60. 11. 11)	
宮原 九一 (S55. 6. 25～S63. 8. 15)	
森 有義 (S46. 8. 2～H 元. 8. 1)	
山本 草二 (S46. 8. 2～S52. 8. 1)	
青山 恒雄 (S60. 11. 11～H 3. 9. 12)	
池尻 文二 (S63. 8. 15～H 7. 8. 1)	
伊東 正義 (S46. 8. 2～H 6. 5. 20)	
今永 文男 (S62. 10. 1～H 3. 9. 12)	
内村 良英 (S62. 6. 22～H 5. 8. 2)	
遠藤 信二 (S46. 8. 2～H 7. 8. 1)	
佐竹 五六 (S63. 3. 17～H 4. 8. 1)	
塩谷 政徳 (S49. 8. 2～H 4. 8. 1)	
高井 義助 (S57. 6. 21～H 3. 9. 12)	
田中 昌一 (S46. 8. 2～H 4. 2. 6)	
徳島喜太郎 (S46. 8. 2～H 4. 8. 1)	
眞木 秀郎 (H 2. 8. 23～H 8. 12. 5)	
天辰祐之郎 (H 4. 8. 2～H 8. 11. 8)	
佐々木輝夫 (H 3. 9. 13～H 7. 8. 1)	
蓑田 勝亮 (H 3. 9. 13～H 7. 8. 1)	
三村 皓哉 (H 3. 9. 13～H 7. 8. 1)	
千野 忠男 (H 7. 8. 2～H 8. 12. 5)	
佐々木輝夫 (H 3. 9. 13～H 7. 8. 1)	

職 員 の 推 移

氏 名	在 任 期 間	所 属 部 課
白 石 三 郎	S46. 7. 1 ~ S50. 1. 31	総務部長
千 原 到	S46. 7. 1 ~ S49. 3. 31	開発部長
野 口 猛	S46. 7. 1 ~ S48. 6. 30	総務課長
小野登喜雄	S46. 7. 1 ~ S49. 8. 15	企画課長
中 村 悟	S46. 7. 1 ~ S56. 8. 31	開発調査第二課長
高 網 武 之	S46. 7. 1 ~ S50. 10. 15	総務課
田 村 信 雄	S46. 7. 1 ~ S49. 6. 15	総務課
下 条 宏 之	S46. 7. 1 ~ S49. 7. 15	企画課
井 口 健 一	S46. 7. 1 ~ S49. 5. 31	開発調査第一課
橋 萬 蔵	S46. 7. 1 ~ S49. 6. 15	開発調査第二課
田 中 一 男	S46. 7. 1 ~ S52. 3. 31	開発調査第二課
市 川 渡	S46. 7. 1 ~ S63. 1. 20	開発部次長
佐 藤 敏 郎	S46. 7. 1 ~ S59. 4. 30	開発調査第二課
斉 藤 良 司	S46. 7. 1 ~ S53. 8. 31	開発調査第一課
中 野 莊 次	S46. 7. 4 ~ S54. 5. 31	開発調査第一課
谷 野 保 夫	S46. 7. 6 ~ S56. 6. 15	開発調査第一課長
鈴 木 春 彦	S46. 8. 1 ~ S54. 6. 15	開発調査第一課
木 谷 浩 三	S47. 5. 1 ~ S47. 11. 30	企画課
稲 田 伊 史	S47. 12. 1 ~ S61. 9. 30	開発調査第一課調査役
橋 本 昭	S48. 4. 16 ~ S56. 9. 5	開発調査第一課
桶 田 俊 郎	S48. 4. 16 ~ S56. 10. 31	開発調査第二課
町 田 末 広	S48. 6. 10 ~ S51. 3. 31	開発調査第一課
佐々木幸男	S48. 7. 1 ~ S53. 4. 30	総務課長
藤 田 穰 一	S49. 4. 1 ~ S51. 11. 23	開発部長
森 脇 哲 二	S49. 6. 15 ~ S52. 11. 15	総務課
奈 須 敬 二	S49. 7. 16 ~ S53. 12. 31	開発部調査役
好 井 義 明	S49. 7. 16 ~ S53. 10. 15	開発調査第一課
石 田 周 而	S49. 7. 16 ~ S52. 8. 14	企画課
飯 田 実	S49. 9. 1 ~ S53. 3. 30	企画課長
山 崎 三 男	S50. 2. 1 ~ S51. 1. 31	総務部長
町 田 三 郎	S50. 7. 1 ~ S62. 2. 28	開発調査第二課調査役
渡 部 義 広	S50. 10. 16 ~ S54. 2. 15	総務課
山 本 金 雄	S51. 2. 1 ~ S53. 4. 5	総務部長
井 上 和 夫	S52. 1. 11 ~ S53. 6. 9	開発部長
長 谷 川 峰 清	S52. 4. 1 ~ S56. 1. 9	開発調査第二課
岩 佐 賢 太 郎	S52. 5. 1 ~ S59. 2. 15	開発調査第二課
今 田 順 彦	S52. 6. 1 ~ S54. 6. 30	総務課
岩 沢 龍 彦	S52. 8. 16 ~ S56. 3. 31	企画課長
小 山 田 光 雄	S52. 11. 25 ~ S56. 1. 31	総務課
五十嵐 廣	S53. 4. 6 ~ S56. 2. 28	総務部長
西 片 義 人	S53. 5. 1 ~ S55. 7. 7	総務課長
陣 野 哲 郎	S53. 7. 5 ~ S54. 5. 15	開発部長
平 井 勇	S53. 7. 5 ~ S56. 9. 30	総務課
小野田 勝	S53. 7. 11 ~ S57. 9. 30	開発調査第二課

船戸健次	S53. 9.19 ~ S58. 7. 4	開発調査第一課
阪口彰英	S54. 3. 1 ~ S57. 3.31	総務課
古屋広一	S54. 4. 1 ~ S59. 7.31	企画課
大矢敏弘	S54. 4. 9 ~ S56. 4. 6	総務課
河野秀雄	S54. 5. 1 ~ S58. 9.30	開発部調査役
谷沢義朗	S54. 5.16 ~ S57. 6. 1	開発部長
渡辺洋	S54. 7.16 ~ S62. 9.30	開発調査第二課長
水戸啓一	S54.10.15 ~ S58. 3.31	開発調査第一課
高橋喬	S55. 7. 8 ~ S58. 7. 4	総務課長
山口洋典	S56. 2. 1 ~ S58. 5.19	総務課
平林平治	S56. 3. 1 ~ S57. 4. 7	総務部長
中村逸	S56. 4. 1 ~ S59. 3.31	企画課長
谷津明彦	S56. 4. 1 ~ H 元. 3.31	開発調査第一課
保田康一	S56. 4. 7 ~ S59. 4. 6	総務課
篠崎益司	S56.10. 1 ~ S59. 2.29	総務課
大塚敏行	S57. 4. 1 ~ S59. 8.15	総務課
橋本隆夫	S57. 4. 8 ~ S59. 4.30	総務部長
細田忠雄	S57. 6. 2 ~ S60. 9.30	開発部長
菅原敬	S57.10. 1 ~ S61. 6.25	開発調査第一課
立花明久	S58. 5. 1 ~ S60. 5.31	総務課
舛富雄二	S58. 7. 1 ~ S63. 3.31	開発調査第二課
服部高明	S58. 7. 5 ~ S61. 7. 3	総務課長
森慶一郎	S58.10. 1 ~ S60.12.31	開発部調査役
水戸啓一	S58.10. 2 ~ S60. 5.31	開発調査第一課
池田善博	S59. 3. 1 ~ S60.12.31	総務課
石部善也	S59. 4. 1 ~ S62. 6. 4	企画課長
福田雅美	S59. 4. 7 ~ S62. 4. 2	総務課
佐野揆一郎	S59. 5. 1 ~ S62. 1.15	総務部長
恒川知行	S59. 5. 1 ~ S63. 3.31	開発調査第二課
盛高明	S59. 8.16 ~ S62.10.31	企画課業務係長
小斉平誠	S59. 9. 1 ~ S62. 3.31	総務課課長補佐
梅川武	S60. 6. 1 ~ S63. 3.31	総務課課長補佐
勝山潔志	S60. 6. 1 ~ S63. 3.31	企画課企画係長
堀川昭夫	S60.10. 1 ~ H 2. 8.31	開発部長
岡田啓介	S61. 1. 1 ~ H 元. 3.31	開発部調査役
高本實	S61. 1.16 ~ S62. 7.31	総務課総務係長
澤田石城	S61. 6.26 ~ H 元. 3.31	開発調査第二課
服部幸憲	S61. 7. 4 ~ H 元. 6.29	総務課長
岩見隆夫	S61.10. 1 ~ S62. 3. 5	開発調査第一課
増田敏弘	S61.10. 1 ~ H 3. 8.31	開発調査第二課
矢野和成	S62. 1. 1 ~ H 4. 3.31	開発調査第一課
林寿一	S62. 1.16 ~ S63. 7.15	総務部長
滋賀三樹	S62. 3.26 ~ H 2. 3.31	開発調査第一課専門調査員
伊藤正木	S62. 3.26 ~ H 4. 3.31	開発調査第二課
中野莊次	S62. 4. 1 ~ S63. 4.30	企画課課長補佐
渡辺祐二	S62. 4. 1 ~ H 元. 7.15	総務課課長補佐
湯川 誼	S62. 4. 3 ~ H 2. 3. 8	総務課課長補佐

森 正 雄	S62. 6. 5 ~ H 2.12.31	企画課長
永 延 幹 男	S62. 7. 6 ~ H 2. 3.31	開発調査第一課
小田島康弘	S63. 1. 1 ~ H 3. 3.31	総務課課長補佐
宮野與志郎	S63. 3. 1 ~ H 4. 3.31	企画課長
市 橋 和 彦	S63. 4. 1 ~ H元. 12.4	企画課課長補佐
白 勢 隼 人	S63. 4. 1 ~ H 3. 3.31	企画課
奏 一 浩	S63. 4. 1 ~ H 3. 3.31	開発調査第二課
畑 中 隆 司	S63. 6. 1 ~ H 2. 9.30	開発調査第二課
塚 原 貢	S63. 7.16 ~ H 2. 1.15	総務部長
和泉鉄太郎	S63.10.17 ~ H 3. 3.31	総務課課長補佐
廣 川 浩	H 元. 4. 1 ~ H 5. 3.31	開発調査第一課課長補佐
千 國 史 郎	H 元. 5. 1 ~ H 5.12.19	開発部次長
遠 藤 節 夫	H 元. 6. 3 ~ H 4. 7. 9	総務課長
秋 山 則 行	H 元. 7.16 ~ H 4. 1. 1	総務課総務係長
太 田 常 稔	H 元.12. 1 ~ H 4. 3.29	総務課課長補佐
吉 田 隆 一	H 2. 1.16 ~ H 3.12.31	総務部長
中 奥 龍 也	H 2. 1.16 ~ H 5. 3.31	企画課企画係長
山 田 陽 巳	H 2. 4. 1 ~ H 4. 3.31	開発調査第二課
田 中 哲 彦	H 2. 9.16 ~ H 4. 3.31	開発部長
坂 内 裕	H 3. 4. 1 ~ H 5. 5.14	企画課調査係長
湯 田 俊 行	H 3. 4. 1 ~ H 6. 3.14	総務課課長補佐
吉 竹 正 明	H 3. 4. 1 ~ H 6. 3.31	総務課課長補佐
佐々木 明	H 3. 4. 1 ~ H 6. 3.31	開発調査第一課
松 本 諭 史	H 4. 1. 1 ~ H 5. 3.31	開発調査第一課
木 下 道 雄	H 4. 1. 1 ~ H 5. 9.30	総務部長
池 上 清 治	H 4. 4. 1 ~ H 5. 4.21	開発調査第二課
木 下 貴 裕	H 4. 4. 1 ~ H 6. 3.31	開発調査第二課専門調査員
岩 澤 龍 彦	H 4. 4. 1 ~ H 6. 7.15	開発部長
森 田 正 博	H 4. 4. 1 ~ H 7. 3.31	企画課長
下 間 義 弘	H 4. 4. 1 ~ H 7. 3.31	開発調査第二課調査役
石 山 靖 幸	H 4. 4. 1 ~ H 7. 3.31	総務課課長補佐
高 橋 敏 夫	H 4. 4.16 ~ H 4. 5.15	総務課課長補佐
室 井 恒	H 4. 7.10 ~ H 7. 6.27	総務課長
馬 場 幸 男	H 5. 5.15 ~ H 8. 5.19	企画課調査係長
阪 口 彰 英	H 5.10. 1 ~ H 7. 3.31	総務部長
清 水 弘 文	H 6. 4. 1 ~ H 8. 3.31	開発調査第二課
竹 濱 秀 一	H 6. 7.16 ~ H 8. 1.21	開発部長
小 林 規 男	H 7. 6.28 ~ H 7.11. 2	総務課長

現職員の構成(平成8年12月現在)

職 名	氏 名	採用年月日
〔総務部〕		
総務部長	大塚 祐一郎	H 7. 4. 1
(総務課)		
課 長	根 本 義 一	H 7.12. 4
課長補佐(販売総括)	浦 源二郎	S62.10. 1
課 長 補 佐	上 野 光 浩	H 6. 4. 1
課 長 補 佐	日 景 郁 雄	H 7. 4. 1
総括係長	和 田 憲 明	H 6. 4. 1
	松 澤 克 敏	H 6. 3.15
(企画課)		
課 長	川 田 忠 宏	H 7. 4. 1
	古 賀 一 郎	H 8. 5.20
〔開発部〕		
開 発 部 長	長 尾 一 彦	H 8. 4. 1
開 発 部 次 長	村 井 武 四	H 6. 4. 1
(開発調査第一課)		
課 長	黒 岩 道 徳	S48. 4.16
調 査 役	大 野 昭 憲	H 2.10. 1
調 長 補 佐	澤田石 城	H 5. 4. 1
	小 河 道 生	S59. 1. 1
	古 賀 淳 司	H 6. 4. 1
	佐々木 雅 也	H 6. 4. 1
(開発調査第二課)		
課 長	高 橋 正 憲	S53. 6. 2
課 長 補 佐	佐 谷 守 朗	S63. 6. 1
開発専門調査員	甲 谷 伊佐雄	H 7. 4. 1
	原 田 誠一郎	H 5. 4. 1
	越 智 洋 介	H元. 5. 1
	伏 島 一 平	H 3.11. 1
	岩 澤 昭 文	H 5. 4. 1
調 査 役	田 渕 誠	S51. 4. 1
調 査 役	武 智 博	H 2. 7. 1
開発専門調査員	山 下 秀 幸	H 5. 4. 1
	大 門 智	H 8. 4. 1

J A M A R C 総目次

注) ■■■ は在庫なし

第 1 号 1972. 9

- ◇創刊号発刊に当たって思うこと
- ◇創刊号によせて
- ◇世界のためのセンターへの発展を
- ◇新『閉鎖海論』に対処するために
- ◇アネラ号調査報告書
- ◇南太平洋かけある記
- ◇米国巾着船隊の飛行機による魚群探索の現状について
- ◇試食会雑感

久 宗 高
太 田 康 二
藤 田 巖
山 本 草 二
(訳) 石 田 周 而
千 原 到
田 実 瑞 郎
板 持 淳 子
松 田 靖 子
石 川 郁 子

◇開発センターだより

第 2 号 1973. 1

- ◇国際協力問題の大勢
- ◇南極洋のヒゲ鯨とオキアミ
- ◇海洋水産資源開発と管理の未来像
- ◇海洋法と漁業資源開発調査 座談会
- ◇F A O の水産資源開発調査事業
- ◇新しい漁具漁法
- ◇底はえなわと東南アジアの魚市場
- ◇料理の窓 クサカリツボダイ
- ◇開発センターだより

久 宗 高
大 村 秀 雄
辻 田 時 美

小 島 仲 治
葉 室 親 正
谷 野 保 夫

第 3 号 1973. 6

- ◇新しい漁業資源及び水産資源加工品の開発について
- ◇食料資源としてのプランクトン
- ◇マグロ類の国際資源管理についての一私見
- ◇南極海のオキアミ調査を終って
- ◇ある調査員からの手紙
- ◇料理の窓 ニギス及びヒメダイの料理法
- ◇開発センターだより

久 宗 高
(訳) 宇 田 道 隆
三 宅 真
下 城 宏 之

第 4 号 1973. 12

- ◇第 3 次海洋法会議の足音

田 辺 隆 一

◇深海生物資源雑感

◇資源と海洋 ― 稚魚を運ぶ海流の話によせて ―

◇にしん、ケプリン、さばの利用について

◇世界の海洋におけるオキアミ及び他の未利用資源の開発の展望

◇料理の窓 オキアミの料理法

◇開発センターだより

池 田 郁 夫

平 野 敏 行

(訳) 今 村 弘 二

(訳) 稲 田 伊 史

第 5 号 1974. 4

◇オキアミ、特に日本近海におけるツメナシオキアミについて

◇アジア、アフリカ法律諮問委員会と海洋法会議

◇バイテレ随想 魚の行動調査に寄せて

◇まぐろ資源をめぐる2つの国際会議について

◇かつお新漁場企業化調査雑記

◇料理の窓 メルルーサ及びボラックの料理法

◇開発センターだより

小 牧 勇 蔵

海老沢 志 朗

市 原 忠 義

今 村 弘 二

橘 万 蔵

第 6 号 1974. 10

◇就任にあたって

◇深海漁場開発の現状と将来について

◇世界銀行の水産関係融資の現状

◇ミクロネシアの水産事情

◇魚探による資源量推定

◇未利用深海魚の加工について

◇料理の窓 ブルーリング及びタチウオの料理

◇開発センターだより

安 福 数 夫

伊 藤 英 世

賀 田 不二雄

小 野 登喜雄

斎 藤 良 司

青 山 恒 雄

掛 端 甲 一

第 7 号 1975. 1

◇年頭の祝辞

◇座談会 これからの漁業資源開発調査

◇F A O オキアミ会議に出席して

◇開発途上国に対する我が国の技術協力について

◇南洋諸島 見たまま聞いたまま

◇海外トロール調査の雑感

◇海に思う

◇料理の窓 サクラダイとバラクータの料理法

◇開発センターだより

内 村 良 英

奈 須 敬 二

正 井 三 郎

近 藤 俊 郎

鈴 木 春 彦

佐 藤 俊 郎

第8号 1975. 6

- ◇深海丸の竣工に当たって
- ◇深海漁場の開発に期待する
- ◇世界の魚類資源利用状況についてのレビュー
- ◇海外における漁業情報
 - 1. イカ アメリカの食糧資源としての潜在性と現況
 - 2. タスマニアにおけるアロツナスの大漁漁獲
- ◇いか釣調査余聞
- ◇料理の窓 ホキとハツメの料理法
- ◇開発センターだより

安 福 数 夫
日比谷 京
中 村 晃 二

市 川 渡

第9号 1975. 10

- ◇第2次開発基本方針について
- ◇海洋開発と水産資源開発
- ◇第4次南氷洋オキアミ企業化調査出航に想う
- ◇F A O イカ、タコ専門家会議を終って
- ◇海外漁業情報 ソ連の漁業（その1）
- ◇南方底はえなわ漁業あれこれ
- ◇新顔登場
- ◇料理の窓 シルバーとカツオの料理法
- ◇開発センターだより

小 野 登喜雄
牧 村 信 之
川 島 和 幸
杉 浦 正 悟
(訳) 森 安 良
橋 本 昭

第10号 1976. 2

- ◇ナンキョクオキアミ (*Euphausia superba*)開発をめぐる国際動向
- ◇大詰めを迎える国連第3次海洋法会議
- ◇北西大西洋国際漁業委員会について
- ◇フィリピン水産資源開発調査団に参加して
- ◇まき網新漁場企業化調査雑感
- ◇海外情報 ソ連の漁業（その2）
- ◇新顔登場
- ◇料理の窓 シロマトウダイとリングの料理法
- ◇開発センターだより

根 本 敬 久
鷺 見 一 夫
島 一 雄
宮 本 成 夫
町 田 末 広
森 安 良
稲 田 伊 史

第11号 1976. 11

- ◇就任にあたって
- ◇油井 恭氏逝く
- ◇弔 辞
 - 見事な生と死
 - 思い出すまま

江 原 博 茂

安 福 数 夫
久 宗 高
白 石 三 郎

- 水産物の有効利用について
- ◇第3次国連海洋法会議について
- ◇オキアミ調査から
- ◇海外情報 バハ・カリフォルニアにおける浮遊性アカガニ漁業の開発
- ◇新顔登場
- ◇料理の窓 オキメダイとミナミダラの料理法
- ◇開発センターだより

横 関 源 延
森 本 稔
奈 須 敬 二
橋 爪 政 男
稲 田 伊 史

第12号 1977. 3

- ◇“さかな”の合理的利用
- ◇漁業専管水域をめぐって
- ◇ナンキョクオキアミの飼料化における諸問題
- ◇海外情報
1. 米国のまき網漁場開発調査
 2. ナンキョクオキアミの漁獲と利用に関する問題点
- ◇ギルバート諸島の漁業調査団に参加して
- ◇新顔登場
- ◇料理の窓 アカイカとギンブカの料理法
- ◇開発センターだより

西 丸 震 哉
長 崎 福 三
新 澤 信 男
開 発 セ ン タ ー

斎 藤 良 司
稲 田 伊 史

第13号 1977. 11

- ◇新理事長就任挨拶
- ◇中南米諸国の水産資源開発政策について
- ◇海洋新時代における開発センターの役割
- ◇海外情報
1. イカの開発現況
 2. ブルーホワイティングの増産
 3. 台湾におけるオキアミ資源開発調査
 4. N Z 沖のカツオ資源開発
- ◇ヌメア 日本丸に乗船して
- ◇新顔登場
- ◇料理の窓 オオクチとメルルーサの料理法
- ◇開発センターだより

藤 村 弘 毅
藤 波 徳 雄

開 発 セ ン タ ー

槇 原 誠
稲 田 伊 史

第14号 1978. 6

- ◇南極海洋生物資源保存条約特別準備会議について
- 南極条約協議会議特別会合 —
- ◇昭和53年度海洋水産資源開発費補助金の概要
- ◇南米メルルーサ利用加工についてのF A O技術会議

島 一 雄
橋 本 道 家
岡 田 稔

- ◇オーストラリアの海洋漁業開発
- ◇タヒチ 第1加喜丸に乗船して
- ◇新顔登場 NZの底魚類
- ◇料理の窓 コオリカマスとミナミズキの料理法
- ◇開発センターだより

井 上 和 夫
岩 佐 賢太郎
稲 田 伊 史

第15号 1978. 11

- ◇南太平洋海域のかつお資源調査と資源管理について
- ◇アラスカ便り 北太平洋漁業管理委員会
- ◇1978年極地域海洋生物資源保存法
— 米国議会下院海運漁業委員会 —
- ◇鯨とその利用 人間との関係
- ◇北西大西洋潜る ムラサキイカ水中撮影記
- ◇いか釣調査余聞(その2) 日豪共同調査
- ◇新顔登場
- ◇料理の窓 モウカザメとエチオピアの料理法
- ◇開発センターだより

今 村 弘 二
村 上 光 由
(訳) 三 宅 康 松

(訳) 鈴 木 博 次
山 田 浩 哉
市 川 渡
稲 田 伊 史

第16号 1979. 3

- ◇水産技術協力の現状と問題点
- ◇水産物の需要、供給及び貿易計画 1985年
- ◇オキアミの量的診断作業部会(SCAR)の会合に参加して
- ◇BIOMASS計画について
- ◇新顔登場
- ◇料理の窓 オキアミの料理法(その2)
- ◇開発センターだより
- ◇JAMARC総目次 1~15号

真 板 道 夫
(訳) 今 村 弘 二
川 上 武 彦
根 本 敬 久
稲 田 伊 史
間 野 百合子

第17号 1979. 8

- ◇昭和54年度海洋水産資源開発費補助金の概要
- ◇中国を訪ねて
- ◇エンダービーランド沖のオキアミ漁場における水温構造

- ◇北太平洋のネズミザメ 新資源開発調査
- ◇新顔登場
- ◇料理の窓 ミナミアイナメ、ミナミムツの料理法
- ◇開発センターだより
- ◇海洋水産資源開発センター所蔵逐次刊行物目録

関 静 郎
阿 部 宗 明
奈 須 敬 二
永 延 幹 男
槇 原 誠
稲 田 伊 史
間 野 百合子

第18号 1980. 2

- ◇海洋開発審議会第1次答申について
- ◇世界の漁業資源の現状
- ◇まぐろの話
- ◇新しいエビを求めて 新資源開発調査
- ◇新顔登場
- ◇料理の窓 オキサワラ、アカダラの料理法
- ◇開発センターだより
- ◇海洋水産資源開発センター所蔵図書目録

嶋 建 男
(訳) 今 村 弘 二
花 本 栄 二
長谷川 峰 清
稲 田 伊 史
間 野 百合子

第19号 1980. 6

- ◇昭和55年度海洋水産資源開発費補助金の概要
- ◇沖合底びき網漁業
- ◇南極海の漁業
- ◇『今後の漁業生産のあり方』に関する研究座談会、講演要旨
 1. 今後の食生活における魚の位置づけ
 2. 資源確保の問題
 3. 漁業生産の見通し
- ◇ソ連漁業の現状と将来の動向
- ◇調査こぼれ話
 - はえなわによるアラスカ湾におけるギンダラ、マダラ資源調査
- ◇新顔登場
- ◇料理の窓、スリナム沖のエビ2種
- ◇開発センターだより

関 静 郎
吉 崎 清
(訳) 奈 須 敬 二

西 丸 震 哉
長谷川 彰
長 崎 福 三
(訳) 高 木 善之助

佐々木 喬
稲 田 伊 史
間 野 百合子

第20号 1980. 12

- ◇水産物の開発輸入
- ◇マグロ資源管理について雑感
- ◇おきあみ企業化調査日記から
- ◇黒海漁業コンビナート
- ◇新顔登場 南アメリカ南部の底魚類
- ◇料理の窓 ミナミダラ、ホキのすり身
- ◇調査余聞
- ◇開発センターだより

真 板 道 夫
三 宅 真
奈 須 敬 二
(訳) 木 原 興 平
稲 田 伊 史
間 野 百合子

第21号 1981. 6

- ◇御挨拶
- ◇昭和56年度海洋水産資源開発費補助金の概要
- ◇頭足類の生物学及び潜在資源に関する研究集会 経過(速報)

藤 村 弘 毅
和 田 穆
奥 谷 喬 司

- ◇最近における西イリアンのエビ漁業について
- ◇新顔登場 スリナム沖の有用エビ類
- ◇遠洋海域における人口浮魚礁（パヤオ）の効果について（経過報告）
- ◇開発センターだより

山 本 忠
武 田 正 倫
岩 佐 賢太郎

第22号 1982. 2

- ◇第三次海洋水産資源開発基本方針 解説
- ◇漁業って何だろう
- ◇フィジー国の水産事情
- ◇講演会 シマガツオの分布と生態
- ◇講演会 シマガツオの漁場形成と漁獲方法及び加工処理
- ◇塩カルマグロ好評
- ◇新顔登場 スリナム沖の有用カニ類
- ◇開発センターだより
- ◇コラム
 - 10年の歩み
 - オオカバマダラ蝶
 - 世界のスリーケープ
- ◇編集後記

渋 川 弘
佐 伯 靖 彦
岩 澤 龍 彦
島 崎 健 二
中 村 悟
一 編 集 子
武 田 正 倫

第23号 1982. 7

- ◇昭和57年度海洋水産資源開発費補助金の概要
- ◇漁業技術等の再開発
- ◇南米ロケーション記
- ◇世界の漁業生産と欧州の漁業
- ◇スペインにおけるシマガツオ漁業
- ◇講演会 ニュージーランド海域における漁業の現状
- ◇講演会 かつお釣り漁業における低温活餌装置試験の結果
- ◇展示資料室の利用方法解説
- ◇新顔登場 スリナム沖の魚類
- ◇開発センターだより
- ◇コラム
 - トビウオのこと
 - クジラの歓迎を受ける
 - エビ、新資源に挑む
- ◇編集後記

大 橋 孝 治
池 田 工
永 田 雅 一
中 村 健
(著) GILES W. MEAD
(抄訳) 槇 原 誠
富 永 弘
市 川 渡
企 画 課
上 野 輝 彌
松 浦 啓 一
三 宅 力

第24号 1983. 1

- ◇海洋法条約について
- ◇日本で開催されたバイオマス計画 (BIOMASS)関連会議
- ◇ホンジュラスの漁業
- ◇西独漁業調査船 Walther Herwing号の中層トロール試験航海に参加して
- ◇21世紀初頭にいたる全世界の漁業の展望

- ◇講演会 混獲防止トロール漁具について2、3の構想
- ◇新顔登場 スナリム、フレンチギアナ沖の底魚類

弓 削 志 郎
根 本 敬 久
江 口 良 策
市 川 渡
(著) M. A. Robinson
(訳) 近 江 彦 栄
小 山 武 夫
稲 田 伊 史
松 浦 啓 一
佐 藤 陽 一
藤 井 英 一

- ◇第11回展示試食会のアンケート調査まとまる
- ◇開発センターだより
- ◇コラム
図鑑 南シナ海の魚類
或るハプニング
外地の治安
サメの利用とマーケティング
海外漁業ニュース
お知らせ
Walther HerWing 号のサロン
- ◇編集後記

第25号 1983. 6

- ◇昭和58年度海洋水産資源開発費補助金の概要
- ◇チリの海況と水産資源
- ◇スリナムの漁業

- ◇200海里時代における水産物の生産と利用
- ◇パタゴニア陸棚の漁業資源に関するFAO特別作業部会に出席して
- ◇ダルマザメの胃内容物にみられた鯨類の皮膚
- ◇アロツナス 頭に窓のあるマグロ
- ◇講演会 近海かつお、まぐろ漁業の現状と問題点
- ◇新顔登場 イカ編
- ◇開発センターだより
- ◇コラム
映画 新しい竿釣り漁場を求めて
海底にみる富士山の生物

斎 藤 良 司
山 田 誼
(著) M. S. Engel
(訳) 白 井 弘 美
(訳) 花 房 克 磨
稲 田 伊 史
町 田 三 郎
楨 原 誠
川 本 省 自
奥 谷 喬 司

◇編集後記

第26号 1983. 12

◇海からの生物生産の見積り

青 山 恒 雄

◇東カナダの水産事情

松 本 清

◇鯨類資源の管理と評価

池 田 郁 夫

◇クリルとその利用：解説

(著) ケイラー, J. D

ラーソン, R. J

(訳) 河 村 章 人

◇F A O世界漁業管理開発会議に向けて

— 第15回F A O水産委員会報告の概要 —

杉 浦 正 悟

◇エル、ニーニョ異変

山 田 誼

◇講演会 いか釣用省エネルギー集魚灯開発研究

赤 羽 光 秋

◇アロツナス 見て、食べて

企 画 課

◇新顔登場 イカ編(Ⅱ) 北太平洋

奥 谷 喬 司

◇開発センターだより

◇コラム

図鑑 『スリナム・ギアナ沖の魚類』『スリナム・ギアナの甲殻類及び軟体類』

ほん 南米北岸海域の漁業資源

お知らせ

◇編集後記

第27号 1984. 6

◇昭和59年度海洋水産資源開発費補助金の概要

斎 藤 良 司

◇南極海洋生物資源保存条約の解説及び国内体制について

石 田 周 而

◇アラビヤ海における中層性魚類資源の考察

(著) J. Gj saeter

(訳) 三 宅 康 松

◇チリ沖合の中層トロール漁獲試験 1

黒 岩 道 徳

◇新顔登場 イカ編(Ⅲ) 南太平洋

奥 谷 喬 司

◇開発センターだより

◇コラム

モスクワみてあるき

藤 村 弘 毅

アロツナス展示試食会を開催

小説にみる船長像

市 川 渡

日本丸 インド洋で外国まき網船と遭遇

楨 原 誠

映画 アロツナス その開発と利用

ほん 米国海洋漁業局による資源評価活動

ほん 世界の中層トロール漁法

塩カルマグロ展示試食会を開催

◇編集後記

第28号 1985. 1

- ◇新理事長 就任挨拶
- ◇F A O世界漁業管理開発会議の開催
- ◇世界の漁業資源の現状
- ◇西部インド洋における表層カツオ、マグロ漁業開発について

- ◇北太平洋のギンダラ資源
- ◇ビルマの水産事情
- ◇ナミビア沖合のマツイカについて
- ◇試食会によせて
- ◇オレンジラフィーとは何か
- ◇新顔登場 外洋表層性魚類 I
- ◇開発センターだより
- ◇コラム

調査余聞 Cape Farewell

報告会開催

ほん 水中観測による底びき網漁法の研究

第13回海洋水産資源開発魚種展示試食会を開催

◇編集後記

尾 島 雄 一
中 前 明
(訳) 三 宅 康 松
(著) F. Mar'sac
B. Stequert
(訳) 赤 井 正 夫
佐々木 喬
藤 田 純 一
佐 藤 俊 郎
間 野 百合子
谷 津 明 彦
中 村 泉

W . I 生

第29号 1985. 7

- ◇昭和60年度海洋水産資源開発費補助金の概要
- ◇水産物の需給について
- ◇ニュージーランド周辺海域のホキ資源
- ◇チリ沖合の漁海況の特徴及び200マイル内外に分布する水産資源
- ◇スルメイカ釣漁業の変遷と資源の動向
- ◇魚との出会い
- ◇海洋水産資源開発センターの今後のあり方について
- ◇オッターグラフ（オッターボード間隔測定装置）について
- ◇新顔登場 外洋表層性魚類 II
- ◇開発センターだより
- ◇コラム

調査余聞 アオテアロア

ほん ニュージーランドの鱈魚資源と漁業管理

ほん 世界の頭足類の資源評価（抄訳）

齊 藤 良 司
長 崎 福 三
郭 慶 老
座 間 彰
新 谷 久 男
矢 治 長 子

黒 岩 道 徳
中 村 泉

W . I 生

映画 沖合にサバ漁場を拓く
◇編集後記

第30号 1986. 2

- ◇創立15周年にあたり
- ◇世界のマアジ資源について
- ◇狭くなり始めたインド洋（マグロ類管理への動き）
- ◇私の200海里前夜（その1）
- ◇中国の漁業
- ◇トロールで漁獲されたニュージーランドスルメイカ（マツイカ）の習性
- ◇新顔登場 外洋表層性魚類Ⅲ
- ◇フォークランド諸島近海で漁獲されたニセスルメイカ
- ◇第14回海洋水産資源開発魚類展示試食会のアンケート調査結果
- ◇開発センターだより
- ◇コラム

調査余聞 アオテアロア

ほん 水中音響学—水産資源量推定の理論と実際

新刊紹介 新顔のさかな

チリの魚料理

ベネズエラ、コロンビア紀行

調査余聞 ナイフとフォーク

マリノバージョンとグスコープドリ

◇編集後記

尾 島 雄 一
川 原 重 幸
竹 濱 秀 一
飯 田 寶
赤 井 正 夫
谷 津 明 彦
中 村 泉

企 画 課

Y . I 生
福 田 雅 美
W . I 生

第31号 1986. 11

- ◇第四次海洋水産資源開発基本方針 解説
- ◇スルメイカ類の生活史について
- ◇中層トロール操業中の水中撮影（チリマアジ）
- ◇水中映像による遊泳行動の解析

◇私の200海里前夜（その2）

◇ソ連文献紹介 世界の大洋の生物資源（その1）

◇新顔登場 マアジ類

◇第15回海洋水産資源開発魚類展示試食会開催される

◇チリの水産物の食用消費は低水準にとどまっている

橋 本 明 彦
畑 中 寛
黒 岩 道 徳
有 元 貴 文
徐 剛
黒 岩 道 徳
恒 川 知 行
飯 田 寶

（著）ベ.ア.モイセーエフ

（訳）高 昭 宏

中 村 泉

（著）Manuel Aohurra, L

（訳）赤 井 正 夫

- ◇マサバ太平洋系群の標識魚、日本海で再捕
- ◇海洋水産資源開発センター15周年記念シンポジウム開催される
- ◇開発センターだより
- ◇コラム

宇佐美 修 造
企 画 課

資料 漁獲努力量（漁獲死亡）規制に関する専門家協議会への提出論文集
映画 新漁場開発への挑戦 チリ沖のマアジと中層トロール
図鑑 パタゴニア海域の重要水族
調査余聞
企画課より読者の方々へ

◇編集後記

第32号 1988. 3

- ◇昭和62年度海洋水産資源開発費補助金の概要
- ◇開発センター事業について一言
- ◇私の200海里前夜（その3）
- ◇知られざる海 南太平洋
- ◇南極の海洋生物資源の保存に関する条約について 行政から見た現状と問題点
- ◇ホキの産卵場をめぐって
- ◇第16回海洋水産資源開発魚種展示試食会
- ◇アルゼンチン沖マツイカ漁場探索についての考察
- ◇夏季ベーリング海におけるスケトウダラ資源調査
- ◇200海里内の漁業管理と底魚類資源量調査
- ◇開発センターだより
- ◇コラム

田 所 康 穂
岩 崎 壽 雄
飯 田 寶
松 村 皐 月
奥 野 勝
魚 住 雄 二

原 田 誠一郎
永 延 幹 男
稲 田 伊 史

映画 インド洋にマグロを追う
隠れた水産先進国 オランダ
企画課から読者の皆様へ

梅 川 武

◇編集後記

第33号 1988. 10

- ◇昭和63年度海洋水産資源開発費補助金の概要
- ◇おきあみ資源
- ◇かつお・まぐろ資源
- ◇スルメイカ類の漁獲の現状と開発可能性について
- ◇新顔登場 シマガツオ類
- ◇南半球ミンククジラの捕鯨調査
- ◇開発センターを思う
- ◇茨城県新魚種展示試食会

岩 田 英 助
奈 須 敬 二
塩 浜 利 夫
畑 中 寛
谷 津 明 彦
中 村 泉
廣 山 久 志
市 川 渡

- ◇開発センターだより
- ◇コラム
- 映画 21世紀の漁業をめざして
- 調査余聞 モンテビデオ港
- ◇編集後記

第34号 1989. 3

- ◇ソ連文献紹介 世界の大洋の生物資源（その2） (著) ベ. ア. モイセーエフ
(訳) 高 昭 宏
- ◇インド洋西部における表層カツオ・マグロ類の漁業と環境条件 (著) F. MARSAC
J. P. HALLIER
(訳) 赤 井 正 夫
- ◇インド洋における系留された標識物周囲のまぐろ量 (著) F. MARSAC
B. STEQUERT
(訳) 小 松 輝 久
- ◇第17回海洋水産資源開発魚種展示試食会開催
- ◇新刊紹介 『パタゴニアの漁業資源と南西大西洋の沖合漁業』
- ◇外国船情報
- ◇開発センターだより
- ◇編集後記

第35号 1989. 12

- ◇流し網漁業と最近の国際関係 — 公海分割論への導火線か? — 中 村 逸
- ◇新しき潮流の沖合漁場総合基礎調査 — 日本海大和堆水域 — 永 延 幹 男
- ◇グリーンランド東側200海里内水域における中層性アカウオ調査の中間報告 秋 本 和 彦
- ◇第18回海洋水産資源開発魚種展示会 企 画 課
- ◇フランス深海潜水艇ノチールによる駿河湾深海生物調査 矢 野 和 成
- ◇ラテンアメリカ賛歌 — 海外出張をふりかえって — 湯 川 誼
- ◇＜調査余聞＞ いか釣調査から 市 川 渡
- ◇開発センターだより
- ◇コラム

ほん 水産関係図書目録及び逐次刊行物目録
資料室から 意見と新しいサービスについて

第36号 1990. 8

- ◇海洋水産資源開発促進法の改正の概要 水産庁漁政部企画課 太 田 豊 彦
- ◇平成2年度海洋水産資源開発費補助金の概要 水産庁研究部資源課 石 部 善 也
- ◇まき網漁業の諸問題について 尾 島 雄 一
- ◇南太平洋ぶらぶら見聞録 遠洋水産研究所 辻 祥 子

- ◇<調査余聞> 世界周航
- ◇開発センターだより
- ◇コラム

市 川 渡

第37号 1990. 12

◎特 集◎

- ◇公海資源の状態〔F A O資料〕

S. M. Garcia
(著) J. Majkowski

◎調査から◎

- ◇安くて、うまくて、手軽なさんま
- ◇NEAFC水域における中層性アカウオを対象とした

世 古 隆 也

中層トロール網について

西牟田力雄 他

- ◇2年間のグリーンランド調査を振り返って

秋 本 和 彦

◎話 題◎

- ◇第19回海洋水産資源開発魚種展示会及び函館市新魚種展示会試食会
- ◇調査余聞 “まぐろの食い逃げ”

市 川 渡

◎センターだより◎

- ◇主な活動状況、出来事
- ◇役職員の異動
- 〔編集後記〕

第38号 1991. 8

◎特 集◎

- ◇海洋水産資源の開発及び利用の合理化を図るための基本方針について

水産庁漁政部企画課 森 田 正 博

- ◇平成3年度海洋水産資源開発費補助金の概要

水産庁研究部資源課 森 正 雄

◎話 題◎

- ◇21世紀を展望した水産資源開発・漁場開発とわが国水産業の話題

尾 島 雄 一

- ◇大目流し網乗船記

元水産庁漁船科学調査員 久 野 操

- ◇アオリイカの産卵礁について

東京製鋼(株) 静 省 二

- ◇開発センター20周年記念記録映画『20歳の航跡』

◎センターだより◎

- ◇主な活動状況、出来事
- ◇平成2年度調査実施概要
- ◇外国船情報
- ◇役・職員の異動

<資料室から> 来訪者カード(その2)

〔編集後記〕

第39号 1991. 12

◎特集◎

- ◇創立20周年記念特別講演「国際化の中の日本の水産業」 NHK解説委員 加倉井 弘
- ◇創立20周年記念レセプション
- ◇創立20周年記念座談会

◎寄稿◎

◎センターだより◎

- ◇資料紹介 — セイシエル周辺のまき網漁業 —
- ◇機関誌 “JAMARC” 20年の歴史
- ◇主な活動状況、出来事
- ◇役・職員の異動
- 〔編集後記〕

第40号 1992. 7

- ◇平成4年度海洋水産資源開発センターの予算と事業について◇

水産庁研究部資源課 森 正 雄

◎特集◎（漁業と環境問題）

- ◇「漁業白書」にみる環境問題 水産庁漁政部企画課 本 田 直 久
- ◇海洋・水産分野に関する国連環境開発会議（UNCED）の結果について
水産庁地球環境問題検討会議事務局 伊 佐 広 巳
- ◇指定漁業の許可一斉更新 水産庁漁政部企画課 成 子 隆 英
- ◇流し網代替漁法開発緊急調査について 水産庁振興部沖合課 太 田 慎 吾
- ◇漁船活用型地球環境モニタリング事業について 水産庁研究部漁場保全課 村 上 邦 宏

◎話題◎

- ◇フェロー諸島紀行 海洋水産資源開発センター理事長 尾 島 雄 一
- ◇開発センターの5年間を振り返って (社)漁業情報サービスセンター専務理事 岩 崎 壽 男
- ◇OB会新入生 (財)食品流通構造改善促進機構専務理事 廣 重 和 夫
- ◇JAMARC－OB会の発足 JAMARC－OB会会長 大 鶴 典 生
- ◇JAMARC－OB会に思う JAMARC－OB会事務局長 市 川 渡

<外国船情報>

◎センターだより◎

- ◇主な活動状況、出来事
- ◇役・職員の異動
- ◇平成3年度調査実施概要
- ◇資料シリーズNo.32の紹介
- ◇来訪者カード

〔編集後記〕

第41号 1993. 1

理事長年頭挨拶

中 村 晃 次

◎特集◎（沖合漁場の再開発）

◇南西諸島周辺水域に設置した浮漁礁における魚類蝸集効果

越 智 洋 介

◇沖合有用魚種相（浮魚）調査事業中間報告

武 智 博

◇沖合漁場等再開発基礎調査（北見大和堆）中間報告

木 下 貴 裕

◎話題◎

◇特別講演 「世界の水産資源の情勢・将来展望」

細 田 忠 雄

◇香辛料並びに植物性生薬の水産動物飼餌料への応用の可能性

原 田 勝 彦

◇撮影にあたって（ガストロ調査船体験記）

馬 場 良 秀

◇第21回海洋水産資源開発魚種展示会の概要

企 画 課

◎調査から◎

◇「しんかい2000」乗船記

池 上 清 治

◎<センターの思い出>◎

尾 島 雄 一

◎センターだより◎

◇平成4事業年度調査実施概要（中間報告）

◇評議員、専門委員の紹介

◇刊行物案内

◇調査余聞

◇主な活動状況や出来事

◇役・職員の異動

〔編集後記〕

第42号 1993. 8

◇平成5年海洋水産資源開発センターの予算と事業について

水産庁研究部資源課 森 正 雄

◇海洋水産資源開発センターのあり方検討会の開催について

海洋水産資源開発センター 企 画 課

◆調査の現場から◆

◇ノルウェー式単船まき網操業視察報告（主としてニシン及びシシャモを対象として）

海洋水産資源開発センター 開発部開発調査第2課調査員 伏 島 一 平

◇トロール船の曳網時の廻頭（操縦性）について

海洋水産資源開発センター 開発部嘱託調査員 西牟田 力 雄

◇漁撈情報処理システムについて

海洋水産資源開発センター 開発部嘱託調査員 中 野 國 光

◆話題◆

◇エクアドルと日本と何故

海洋水産資源開発センター 監 事 大 城 裕 行

◇マダガスカルにおける水産事情

水産庁振興部沿岸課 盛 高 明

◇マダガスカル閑和

海洋水産資源開発センター 開発部開発調査第2課調査役 下 間 義 弘

◆センターだより◆

◇平成4事業年度調査実施概要

◇外国船情報

◇資料室利用状況及び移転について

◇新作映画紹介、刊行物紹介

◇OB会だより

◇主な活動状況や出来事

◇役職員の異動

〔編集後記〕

第43号 1994. 1

理事長年頭あいさつ

海洋水産資源開発センター理事長 中 村 晃 次

◇資源の管理について

水産庁沿岸課 大 石 修 宗

◇ストラドリングストック及び高度回遊性魚種の保存・管理に関する世界的な動きについて

水産庁国際課 香 川 謙 二

◇平成5年度アカイカ好漁場探索調査の概要

遠洋水産研究所 谷 津 明 彦

◇イカ肝臓の高度利用

水産大学校 幡 手 英 雄

◇第22回海洋水産資源開発魚種展示会の概要

海洋水産資源開発センター企画課

◇展示会での試食品開発への道

(株)つかだ 石 井 正 男

◆センターだより◆

◇平成5事業年度調査事業概要（中間報告）

◇調査船紹介 平成丸

◇外国船情報

◇調査員からの手紙

◇主な活動状況や出来事

◇役職員の異動

〔編集後記〕

第44号 1994. 8

◇平成6年度海洋水産資源開発センターの予算と事業について

水産庁研究部資源課 長 谷 成 人

◇海洋水産資源開発センターのあり方検討会報告書について

海洋水産資源開発センター 企 画 課

◇ガット・ウルグアイ・ラウンド交渉と水産物貿易について

水産庁漁政部水産流通課 久保寺 聡 之

◇最新の探魚システム“L I D A R”（ライダー）

日テク工業株式会社 下 崎 吉 矩

◇東海・黄海漁場における大中型旋網の単船操業化過程「平成丸」事業の背景と途上所感

海洋水産資源開発センター開発部開発調査第2課 伏 島 一 平
東京水産大学漁具設計学研究室 稲 田 博 史

◇ナミビア200海里水域の漁場開発と資源調査

海洋水産資源開発センター開発部開発調査第1課調査役 大 野 昭 憲

◇出番を待つ北東大西洋の子鱈・ブルーホワイティング

前海洋水産資源開発センター嘱託調査員 西牟田 力 雄

◇沖合漁場造成開発事業に関わって

外浦漁業協同組合総務課長 原 泰 弘

◇中層型浮漁礁の調査

第18紘成丸漁労長 澤 田 由 也

◆センターだより◆

◇平成5事業年度調査事業概要

◇調査船紹介

◇外国船情報

◇資料室から、新作映画紹介

◇資料室利用状況

◇OB会だより

◇主な活動状況や出来事

◇役職員の異動

〔編集後記〕

第45号 1995. 3

◇平成7年度海洋水産資源開発センターの予算と事業について

水産庁研究部資源課 長 谷 成 人

◇漁船漁業技術の現状と課題

水産庁漁船課課長補佐 長 島 徳 雄

◇水産資源量評価と漁業管理の問題点 — 第82回ICES年次研究者会議から —

海洋水産資源開発センター開発部次長 村 井 武 四

◇おさかなフェア'94への開発センターの参加について

— 第23回海洋水産資源開発魚種展示会の概要 — 海洋水産資源開発センター 企 画 課

◆センターだより◆

◇平成6事業年度調査事業概要

◇調査船紹介

◇外国船情報

◇主な活動状況や出来事

◇役職員の異動

〔編集後記〕

第46号 1995. 9

◇新しい技術開発の動き 水産庁研究部ハイテクノロジー開発室 室 長 桜 井 謙 一

◇漁船漁業技術の現状と課題(続) 水産庁水産流通課 課長補佐 長 島 徳 雄

◇第18太幸丸便乗記 海洋水産資源開発センター開発部 次 長 村 井 武 四

◇－海を見張る漁船－

海洋水産資源開発センター総務部

漁船活用型地球環境モニタリング事業

企画課 鈴木 秀 弥

調査の推移とこれから

橋 本 隆 夫

◆センターだより◆

◇お知らせ

- ・図鑑「グリーンランド海域の水族」
- ・95教育展への出展報告
- ・おさかなフェア '95開催案内

◇平成6事業年度調査実施概要

◇平成7事業年度調査実施概要（中間報告）

◇評議員の紹介

◇外国船情報

◇主な活動状況や出来事

◇役職員の異動

〔編集後記〕

第47号 1996. 2

◇沖合域の管理と開発センターが果たすべき役割

水産庁振興部沿岸課 課長補佐 長 谷 成 人

◇大西洋クロマグロ卵稚仔調査航海記

水産庁漁業調査船 昭洋丸船長 山 中 完 一

◇情報源としてのパソコン・ネットワークの活用

水産庁研究部資源課 課長補佐 取 香 諭 司

◇おさかなフェア '95への参加 — 第24回海洋水産資源開発魚種展示会の概要 —

海洋水産資源開発センター 企 画 課

◇「食糧安全保障のための漁業の持続的貢献に関する国際会議」への出展及び歓迎昼食会開催報告

海洋水産資源開発センター 企 画 課

◆センターだより◆

◇平成7事業年度調査概要（中間報告）

◇主な活動状況や出来事

◇外国船情報

◇役職員の異動

〔編集後記〕

調査事業一覧（S46年度～H7年度）

I. 新漁場開発調査事業、深海漁場開発調査事業

1. まぐろはえなわ

年度	海 域	調 査 期 間	船 名 (トン数)	調 査 員
46	北西大西洋高緯度	46. 7. 27～47. 3. 31	第 28 東 丸 (313.98)	田中一男、市川 渡
47	〃	47. 4. 20～48. 3. 31	第 12 加 喜 丸 (392.89)	佐藤敏郎、市川 渡
48	南大西洋高緯度	48. 4. 9～49. 5. 26	第 1 加 喜 丸 (344.19)	中野荘次、町田末宏
49	〃	49. 7. 1～50. 3. 31	〃 (〃)	中野荘次
50	北東太平洋	50. 6. 4～51. 3. 31	〃 (〃)	黒岩道徳、桶田俊郎
51	〃	51. 4. 21～52. 2. 5	第 12 加 喜 丸 (392.82)	黒岩道徳、田中一男
52	南太平洋西部高緯度	52. 6. 1～53. 3. 31	第 1 加 喜 丸 (344.19)	岩佐賢太郎、楨原 誠
53	〃	53. 5. 19～54. 3. 31	〃 (〃)	小原 亨、山藤康直
54	南太平洋東部高緯度	54. 4. 1～55. 3. 31	〃 (〃)	市川 渡、白沢壽昭
55	〃	55. 4. 1～56. 3. 31	〃 (〃)	白沢壽昭、漆畑信昭
56	インド洋東部	56. 4. 20～57. 3. 31	〃 (〃)	片倉玄司、白沢壽昭
57	〃	57. 4. 1～58. 3. 31	〃 (〃)	江川泰彦、村田武雄
58	〃	58. 4. 1～59. 3. 31	〃 (〃)	佐原満雄、水戸啓一
59	インド洋西部	59. 4. 1～60. 3. 31	第 2 加 喜 丸 (299.83)	竹田喜彦、水戸啓一
60	〃	60. 4. 1～61. 3. 31	〃 (〃)	竹田喜彦、小林雄二
61	〃	61. 4. 1～62. 3. 31	〃 (〃)	舩富雄二、佐谷守朗
62	南太平洋中部	62. 4. 1～63. 3. 31	〃 (〃)	末兼信行、伊藤正木、浅羽 昇
63	〃	63. 4. 1～平元. 3. 31	〃 (324.56)	中野国光、佐谷守朗
平元	〃	平元. 4. 1～2. 3. 31	開 発 丸 (489.00)	中野国光、佐谷守朗
2	〃	2. 4. 1～3. 3. 31	〃 (〃)	中野国光、佐谷守朗
3	南太平洋中部海域	3. 4. 1～4. 3. 31	〃 (〃)	松本論史、中野国光
4	〃	4. 4. 1～5. 3. 31	〃 (〃)	會田晴英、三橋延史、中野国光
5	〃	5. 4. 1～6. 3. 31	〃 (〃)	宮川震一、中野国光
6	熱帯太平洋東部海域	6. 4. 1～7. 3. 31	〃 (〃)	宮川震一、中野国光
7	〃	7. 4. 1～8. 3. 31	〃 (〃)	細萱安彦、中野国光

2. 遠洋底びき網

年度	海 域	調 査 期 間	船 名 (トン数)	調 査 員
46	ニュージーランド沖合周辺	46. 8. 13～47. 3. 31	第 61 大 洋 丸(1,497.17)	鈴木春彦
〃	アフリカ東岸沖合	46. 7. 7～47. 3. 31	第51あけぼの丸(1,454.57)	井口健一、田中一男
47	中部太平洋（海山）	47. 5. 1～48. 1. 31	第 61 大 洋 丸(1,497.17)	黒岩道徳、木谷浩三、井口健一
〃	北東大西洋	47. 4. 25～48. 3. 15	天 塩 丸(2,500.94)	井口健一、鈴木春彦
48	中部太平洋（海山）	48. 4. 2～48.12.28	第 61 大 洋 丸(1,497.17)	田中一男、井口健一
〃	北東大西洋	48. 4. 12～48.12.23	天 塩 丸(2,500.94)	鈴木春彦
49	ニュージーランド南方沖合	49. 8. 19～50. 3. 17	開 開 丸(2,518.13)	黒岩道徳
〃	アフリカ西岸（北部）沖合	49. 4. 24～50. 3. 31	第 3 新 生 丸(1,497.56)	鈴木春彦、稲田伊史
50	〃	50. 4. 26～50.11.24	〃 (〃)	佐藤敏郎
51	アフリカ西岸（南部）沖合	51. 4. 2～51.10.15	第 1 ちりえんと丸(2,201.80)	佐藤敏郎
〃	アルゼンチン沖合	51.10.16～52. 2. 17	〃 (〃)	鈴木春彦
52	アフリカ西岸（南部）沖合	52. 4. 18～53. 3. 31	英 彦 丸(2,524.85)	黒岩道徳、長谷川峰清
〃	インド洋南西部及び北部中央太平洋	52. 9. 7～53. 3. 31	第 2 隆 洋 丸(2,961.07)	座間 彰、新美 豊
〃	チリ沖合	52. 8. 1～53. 3. 31	第72あけぼの丸(3,222.61)	佐藤敏郎
53	〃	53. 4. 1～54. 3. 31	〃 (〃)	好井義明、鈴木春彦

年度	海 域	調 査 期 間	船 名 (トン数)	調 査 員
53	インド洋南西部	53. 11. 1～54. 3. 31	第 2 隆 洋 丸 (2,961.07)	長谷川峰清
"	北太平洋東部海山	53. 6. 30～54. 3. 31	第 51 富 丸 (349.47)	黒岩道徳、船戸健次
54	チリ沖合	54. 4. 1～54. 11. 19	第72あけぼの丸 (3,222.61)	稲田伊史
"	北太平洋東部海山	54. 5. 1～54. 8. 14	第 51 富 丸 (349.97)	滋野三樹
"	ニュージーランド南方沖合	54. 9. 1～55. 3. 31	" (")	滋野三樹
55	アフリカ西岸 (南部) 沖合	55. 1. 1～56. 3. 31	第 3 播 州 丸 (1,858.52)	水戸啓一、渡辺光則
"	ニュージーランド南方沖合	55. 11. 3～56. 3. 31	第 16 興 北 丸 (349.82)	滋野三樹
"	ニュージーランド北島西岸沖合	55. 11. 3～56. 3. 31	第 55 富丸 (349.98)	水戸啓一、河野秀雄
56	アフリカ西岸 (南部) 沖合	56. 4. 1～57. 3. 31	第 3 播 州 丸 (1,858.52)	黒岩道徳、空井 隆
"	南太平洋西部温帯	56. 8. 13～57. 1. 11	第 16 興 北 丸 (349.82)	船戸健次
57	南アフリカ沖合	57. 4. 1～58. 3. 31	第 3 播 州 丸 (1,858.52)	中田博政、佐藤敏郎
58	南米太平洋岸沖合 (チリ沖合)	58. 5. 22～59. 3. 31	伊 吹 丸 (2,577.02)	黒岩道徳、佐藤敏郎
59	"	59. 4. 1～60. 3. 31	" (")	舩富雄二、塩津 稔、黒岩道徳
"	パタゴニア沖合	59. 8. 16～60. 3. 31	播 州 丸 (2,123.91)	稲田伊史、渡辺 量
60	南米太平洋岸沖合 (チリ沖合)	60. 5. 10～61. 3. 31	越 前 丸 (2,802)	恒川知行、黒岩道徳
"	パタゴニア沖合	60. 8. 1～61. 3. 31	播 州 丸 (2,123.91)	槇原 誠
61	南太平洋東部 (チリ沖合)	61. 5. 15～62. 3. 31	越 前 丸 (2,802)	岡田啓介、黒岩道徳
"	南大西洋西部 (大陸棚斜面)	61. 9. 15～62. 3. 31	第31あけぼの丸 (1,205.20)	町田三郎、原田誠一郎
62	南太平洋東部 (チリ沖合)	62. 4. 1～63. 3. 31	越 前 丸 (2,802)	小河道生、畔田 隆
"	南大西洋西部 (大陸棚斜面)	62. 8. 1～63. 3. 31	第31あけぼの丸 (1,205.20)	濱砂博昭、矢野和成
63	南太平洋東部 (チリ沖合)	63. 4. 1～平元. 3. 10	越 前 丸 (2,802)	小林文典、小河道生
"	南大西洋西部 (大陸棚斜面)	63. 10. 1～平元. 3. 31	第 7 播 州 丸 (1,598.28)	竹田喜彦
平元	南太平洋東部 (チリ沖合)	平元. 4. 5～平元. 8. 23	第 6 恵 久 丸 (379)	小林文典
"	南太平洋西部	平元. 5. 1～平元. 9. 30	第 8 恵 久 丸 (379)	小河道生
2	"	2. 4. 15～2. 8. 21	" (379)	小河道生

3. ま き 網

年度	海 域	調 査 期 間	船 名 (トン数)	調 査 員
46	西アフリカ沖合及び東部太平洋	46. 7. 16～46. 11. 24 47. 1. 7～47. 5. 29	日 本 丸 (990.09)	中野荘次
47	西アフリカ沖合	47. 6. 6～47. 11. 10	" (")	田中一男
"	東部太平洋	48. 1. 1～48. 6. 4	" (")	稲田伊史
48	西アフリカ沖合	48. 6. 7～48. 11. 29	" (")	橋本 昭
"	東部太平洋	49. 1. 10～49. 7. 9	" (")	稲田伊史
"	オーストラリア北西沖合	48. 9. 28～49. 3. 30	白 竜 丸 (498.06)	斎藤良司、黒岩道徳
49	アフリカ中部西岸沖合	49. 8. 2～49. 10. 28	日 本 丸 (990.09)	田中一男
"	東部中央太平洋	49. 12. 5～50. 3. 31	" (")	好井義明
"	カロリン諸島周辺	49. 6. 18～49. 11. 30	福 一 丸 (499.57)	町田末宏
50	"	50. 4. 8～50. 9. 23	" (")	田中一男
"	オセアニア東部諸島周辺	50. 4. 1～51. 3. 31	日 本 丸 (999.09)	町田末宏、町田三郎
51	カロリン諸島西部周辺	51. 4. 25～51. 10. 9	福 一 丸 (499.57)	好井義明
"	オセアニア東部諸島周辺	51. 4. 1～52. 3. 21	日 本 丸 (999.09)	中村 悟、槇原 誠
52	オセアニア西部諸島周辺	52. 4. 1～53. 3. 31	" (")	槇原 誠、橋本 昭、桶田俊郎
"	カロリン諸島東部周辺	52. 5. 1～52. 10. 31	第 82 源 福 丸 (499.66)	好井義明
53	オセアニア西部諸島周辺	53. 4. 1～54. 3. 31	日 本 丸 (999.09)	水谷淳二、中野荘次
"	カロリン諸島東部周辺	53. 4. 10～54. 3. 31	第 82 源 福 丸 (499.66)	中野荘次、桶田俊郎
54	"	54. 4. 23～55. 1. 4	" (")	岩佐健太郎、桶田俊郎
"	東部インド洋及び南太平洋西部	54. 4. 1～55. 3. 31	日 本 丸 (999.09)	渡辺 洋、河野秀雄、渡辺 量

年度	海 域	調 査 期 間	船 名 (トン数)	調 査 員
55	"	55. 4. 1～56. 3. 31	日 本 丸 (990.09)	八巻憲治、岩佐賢太郎
"	南太平洋西部	55. 6. 20～56. 3. 31	福 一 丸 (499.57)	佐山哲郎
56	東部インド洋及び南太平洋西部	56. 4. 1～57. 3. 31	日 本 丸 (999.09)	岩見隆夫、久保田育夫
"	南太平洋西部	56. 4. 1～57. 3. 31	福 一 丸 (499.57)	渡辺 洋、杉浦 修、 渡辺 量、栗田尚武
57	"	57. 7. 1～58. 3. 31	は や ぶ さ 丸 (499.96)	仲道三明、松本論史、高山充雄
"	インド洋西部、南太平洋西部	57. 4. 1～58. 3. 31	日 本 丸 (999.09)	飯塚光江、栗田尚武
58	インド洋西部、北太平洋中央部	58. 4. 1～59. 3. 31	" (")	佐藤 傳、植原 誠
59	"	59. 4. 1～60. 3. 31	" (")	佐原満雄、植原 誠
60	"	60. 4. 1～61. 3. 31	" (")	小河道生、菅原 敬
61	熱帯太平洋（中央部）東部、インド洋西部低緯度	61. 4. 1～62. 3. 31	新 船 " 日本丸 (760)	福井 襄、恒川知行
62	熱帯太平洋中央部（東部）、インド洋西部低緯度	62. 4. 1～63. 3. 31	日 本 丸 (760)	滋野三樹、浦川十三夫
63	熱帯インド洋、熱帯太平洋中部	63. 4. 1～元. 3. 31	" (")	伊藤正木、浦川十三夫
平元	"	元. 4. 1～2. 3. 31	" (")	"
2	熱帯インド洋	2. 4. 1～3. 3. 31	" (")	安東孝也、秦 一浩
"	熱帯太平洋中部（西部）	2. 4. 1～3. 3. 31	大 清 丸 (499.73)	田中 昭、竹田喜彦
3	熱帯インド洋海域	3. 4. 1～4. 3. 31	日 本 丸 (760.00)	大平 勇、三船弘昭
	熱帯太平洋中部海域	3. 4. 1～3. 11. 30	大 清 丸 (499.73)	田中 昭、竹田喜彦
	北太平洋中部（西部）海域	3. 4. 1～4. 3. 31	北 勝 丸 (286.00)	楠 竹二、福迫利明
4	熱帯インド洋海域	4. 4. 1～5. 3. 31	日 本 丸 (760.00)	大平 勇、松本論史、下間義弘
	熱帯太平洋中部海域	4. 8. 1～5. 3. 31	第 8 天 王 丸 (349.00)	廣川純夫、田中 昭
	北太平洋中部（西部）海域	4. 4. 1～5. 3. 31	北 勝 丸 (286.00)	小野寺朝雄、福迫利明
5	熱帯インド洋海域	5. 4. 1～5. 3. 31	日 本 丸 (760.00)	下間義弘、大平 勇、會田晴英
	熱帯太平洋中部海域	5. 4. 1～6. 6. 9 5. 10. 10～6. 3. 31	第 8 天 王 丸 (349.00)	廣川純夫
	北太平洋中部（西部）海域	5. 4. 1～6. 3. 31	北 勝 丸 (286.00)	福迫利明、澤田石城、田中 昭
6	熱帯インド洋海域	6. 4. 1～7. 3. 31	日 本 丸 (760.00)	會田晴英、田中 昭
	熱帯太平洋中部海域	6. 4. 1～6. 11. 31	第 8 天 王 丸 (349.00)	直 良治
	北太平洋中部（西部）海域	6. 4. 1～7. 3. 31	北 勝 丸 (286.00)	田中昭、松浦満晴、佐々木雅也
7	熱帯インド洋東部海域	7. 4. 1～8. 3. 31	日 本 丸 (760.00)	會田晴英、片山雅嗣、古賀淳司、松浦満晴
	熱帯太平洋中部海域	7. 8. 1～8. 3. 31	第 8 天 王 丸 (349.00)	廣川純夫、宮川震一
	北太平洋中部（西部）海域	7. 4. 1～8. 3. 31	北 勝 丸 (286.00)	松浦満晴、佐々木雅也

4. ま き 網 (さば)

年度	海 域	調 査 期 間	船 名 (トン数)	調 査 員
58	北太平洋西部	58. 6. 1～58. 9. 30	第28寿丸他3隻 (111.34)	渡辺 洋、白沢壽昭
59	"	59. 4. 23～59. 9. 15	第8勝栄丸他3隻 (116.78)	白沢壽昭
60	"	60. 4. 18～60. 9. 15	" (")	舩富雄二
61	北太平洋中部（西部）	61. 7. 3～61. 10. 20	第11魚生丸他3隻 (116.51)	末兼信行
62	"	62. 8. 28～63. 3. 31	第2はやぶさ丸 (498.71)	浅羽 昇、高宮勝弘
63	"	63. 4. 8～元. 3. 31	北 勝 丸 (286)	滋野三樹、澤田石 城
平元	"	元. 4. 1～2. 3. 31	" (")	滋野三樹、植田喜好
2	"	2. 4. 1～3. 3. 31	" (")	浜田義男、福迫利明

5. さんま棒受網等

年度	海 域	調 査 期 間	船 名 (トン数)	調 査 員
46	北部中央太平洋、北東太平洋	46. 7. 2～46.12. 7	第21はばまい丸 (285.01)	市川 渡、中村 悟
47	北部中央太平洋	47. 6. 1～47. 9.30	宝 洋 丸 (499.80)	市川 渡、若林 皎
"	北東太平洋	47. 8. 1～47.12. 2	第 3 龍 昇 丸 (409.71)	中村 悟
48	北部中央太平洋	48. 6.11～48.10.10	" (")	市川 渡
49	北東太平洋	49. 6. 2～49. 9.16	第 6 龍 昇 丸 (399.94)	佐藤敏郎
50	北太平洋	50. 6. 4～50. 9.18	第 7 龍 昇 丸 (459.10)	中野荘次、荒谷重市
51	千島列島東岸沖合 (北部)	51. 6. 3～51. 9.17	" (")	桶田俊郎
52	"	52. 5.15～52. 9.14	第 67 宝 洋 丸 (460.65)	江口秀伸、佐々木 洋
53	"	53. 6. 3～53. 9.21	" (")	梅山敏行
54	千島列島東岸沖合 (南部)	54. 7. 5～54.11. 3	第 68 宝 洋 丸 (299.11)	五味克治
55	"	55. 7.10～55.11. 9	" (")	高橋正憲、河野秀雄
56	"	56. 6.15～56.11. 4	" (")	家長典史
57	三陸東方沖合	57. 7.13～57.11.12	第 53 宝 洋 丸 (224.76)	安井敬一
58	"	58. 7. 5～58.12. 4	" (")	安井敬一
59	"	59. 7. 1～59.11.30	" (")	西岡 忍
60	天皇海山西部	60. 7. 1～60.10.31	第 20 宝 洋 丸 (96.86)	末兼信行
61	"	61. 6.10～61. 9.30	" (122)	坂井伸司
62	"	62. 6. 1～62. 9.30	第 23 宝 洋 丸 (199)	伊藤正木
63	天皇海山周辺 (東部)	63. 6. 1～63. 9.30	" (")	世古隆也
平元	"	平元. 6. 1～平元. 9.30	" (")	世古隆也
2	"	2. 6. 1～2. 9.30	" (")	世古隆也
3	天皇海山周辺 (東部) 海区	3. 6. 1～3. 8.31	第 23 宝 洋 丸 (119.00)	世古隆也
4	"	4. 6. 1～4. 8.31	" (")	末兼信行
5	"	5. 6. 1～5. 9.30	" (")	末兼信行
6	"	6. 6. 1～6. 9.30	" (")	末兼信行

6. い か 釣

年度	海 域	調 査 期 間	船 名 (トン数)	調 査 員
46	ニュージーランド沖合	46. 7.11～47. 1.31	第 51 宝 洋 丸 (496.69)	斎藤良司
"	カリフォルニア	46. 8.10～47. 1.18	第 3 漁 運 丸 (299.98)	佐藤敏郎
47	ニュージーランド沖合	47. 4. 4～48. 5.15	第 51 宝 洋 丸 (496.69) 宝 洋 丸 (499.80)	斎藤良司
48	ニューファンドランド	48. 5. 1～48.12.17	第 51 宝 洋 丸 (496.69)	佐藤敏郎
49	"	49. 4.17～49.11.25	第 63 宝 洋 丸 (422.40)	市川 渡
50	"	50. 4.18～50.12. 5	" (")	市川 渡
51	"	51. 4.18～51.11.18	" (")	市川 渡
"	北西太平洋 (西部)	51. 6.22～51.10.28	第 12 正 徳 丸 (344.57) 第 22 広 栄 丸 (344.67)	岩佐賢太郎、本田真寿、 鈴木史紀
52	"	52. 5.15～52. 9.14	" (") (")	長谷川峰清、八田和文
"	南太平洋西部 (温帯)	52. 9. 1～53. 4.30	第 63 宝 洋 丸 (422.40)	市川 渡
53	北西太平洋 (西部)	53. 6. 5～53.10.31	第 12 正 徳 丸 (344.57) 第 1 広 栄 丸 (403.10)	安部素之、安井敬一
"	南太平洋西部 (温帯)	53.10. 2～54. 4.30	第 67 宝 洋 丸 (390.90)	市川 渡
54	北西太平洋 (東部)	54. 6. 5～55. 3. 4	第 1 漁 運 丸 (314.87)	安井敬一
"	南太平洋西部 (温帯)	54.10. 6～55. 5.15	第 67 宝 洋 丸 (390.90)	町田三郎
55	東部インド洋 (オーストラリア南方)、 北西太平洋 (東部)	55.10. 1～56. 5.20	第 81 宝 洋 丸 (314.77)	町田三郎
"	北西太平洋 (東部)	55. 5. 1～56. 3.11	第 1 漁 運 丸 (314.87)	市川 渡、安井敬一

年度	海 域	調 査 期 間	船 名 (トン数)	調 査 員
56	北太平洋東部、南太平洋西部	56. 4. 20～57. 3. 31	第 1 漁 運 丸 (314.87)	江川泰彦、町田三郎
57	北太平洋中西部、南太平洋西部	57. 6. 8～58. 3. 31	新 興 丸 (299.73)	岩見隆夫、町田三郎、菅原 敬
58	〃	58. 4. 1～59. 3. 31	〃 (〃)	小原 亨、菅原 敬
59	中央太平洋東部、ニューギランド周辺	59. 4. 1～60. 3. 31	〃 (〃)	町田三郎、甲藤幸一
60	〃	60. 4. 1～61. 3. 31	〃 (〃)	岩見隆夫、甲藤幸一
61	〃	61. 4. 1～62. 3. 31	第 2 新 興 丸 (346.57)	岩見隆夫、園 稔
62	南大西洋西部、熱帯太平洋東部	62. 4. 1 63. 3. 31	〃 (〃)	舩富雄二、畑中隆司
63	〃	63. 4. 1～平成 3. 31	〃 (〃)	佐藤祥之介、宮川震一
平成	〃	平成 4. 1～2. 3. 31	〃 (〃)	廣川 浩、小林文典
2	〃	2. 4. 1～3. 3. 31	〃 (〃)	小林文典、廣川 浩
3	南大西洋西部海域、南大西洋東部海域、北太平洋中部海域、熱帯太平洋東部海域	3. 4. 1～4. 3. 31	第 2 新 興 丸 (346.57)	小林文典、小河道生、廣川 浩
4	南大西洋西部海域、熱帯太平洋東部海域	4. 4. 1～5. 3. 31	〃 (361.60)	伏島一平、甲藤幸一
5	〃	5. 4. 1～6. 3. 31	〃 (〃)	甲藤幸一、佐々木明
6	〃	6. 4. 1～7. 3. 31	〃 (〃)	甲藤幸一、佐谷守朗
7	熱帯太平洋東部及び南大西洋西部海域	6. 4. 1～7. 3. 31	〃 (〃) 第 3 新 興 丸 (478.10)	甲藤幸一、末兼信行

7. かつお釣

年度	海 域	調 査 期 間	船 名 (トン数)	調 査 員
46	メラネシア	46. 10. 21～47. 3. 4	第 72 黒 潮 丸 (239.86)	橘 萬蔵
47	〃	47. 8. 1～47. 12. 12	〃 (〃)	橘 萬蔵
48	〃	47. 10. 17～49. 2. 22	第 20 秋 津 丸 (192.94)	橘 萬蔵、中野莊次
49	ミクロネシア	49. 7. 1～49. 10. 15	〃 (〃)	斎藤良司
50	〃	50. 5. 21～50. 9. 20	〃 (〃)	斎藤良司
51	〃	51. 5. 22～51. 10. 21	第 3 初 鳥 丸 (79.37)	斎藤良司
52	北太平洋西部低緯度	52. 7. 11～52. 12. 10	〃 (〃)	斎藤良司
53	〃	53. 8. 1～53. 12. 10	第 5 初 鳥 丸 (254.41)	岩佐賢太郎
54	〃	54. 6. 20～54. 10. 19	〃 (〃)	守田 隆、杉浦 修
55	北太平洋中部低緯度	55. 6. 2～56. 3. 14	第 1 振 興 丸 (298.06)	桶田俊郎、渡辺 量
〃	南太平洋西部	55. 10. 1～56. 3. 31	第 52 海 王 丸 (434.60)	市川 渡
56	〃	56. 4. 1～57. 3. 31	〃 (〃)	大森光男、栗田尚武、岩佐賢太郎
〃	北太平洋中部	56. 4. 13～57. 3. 31	第 1 振 興 丸 (298.06)	渡辺 量、安井敬一
57	南太平洋西部	57. 4. 1～58. 3. 31	第 52 海 王 丸 (434.60)	片倉玄司、白沢壽昭
〃	北太平洋中部	57. 6. 20～58. 3. 31	第 1 振 興 丸 (298.06)	秦 敏男、小原 亨
〃	南シナ海	57. 8. 17～58. 2. 14	第 21 新 福 丸 (69.68)	岩佐賢太郎
58	中央太平洋東部 (南太平洋西部を含む)	58. 4. 1～59. 3. 31	第 52 海 王 丸 (434.60)	岩見隆夫、園 稔
〃	南シナ海	58. 6. 1～58. 10. 31	第 21 新 福 丸 (69.68)	稲田伊史、町田三郎
〃	北太平洋東部	58. 10. 1～59. 3. 31	第 1 振 興 丸 (299.86)	舩富雄二、甲藤幸一
59	中央太平洋東部	59. 4. 1～60. 3. 31	第 52 海 王 丸 (434.60)	小河道生、園 稔
〃	南シナ海	59. 6. 1～59. 10. 31	第 21 新 福 丸 (69.68)	恒川知行
60	中央太平洋東部	60. 4. 1～61. 3. 31	第 52 海 王 丸 (434.60)	浜田義男、宮川震一
〃	熱帯太平洋西部 (東南アジア)	60. 10. 21～61. 3. 20	第 8 栄 漁 丸 (99.84)	町田三郎、勝山潔志
61	北太平洋西部	61. 4. 1～62. 3. 21	第 52 海 王 丸 (434.60)	滋野三樹、楨原 誠
〃	熱帯太平洋西部 (東南アジア)	61. 8. 19～61. 12. 28	第 8 栄 漁 丸 (99.84)	増田敏弘
62	北太平洋西部	62. 4. 1～63. 3. 31	第 52 海 王 丸 (434.60) 第 58 海 王 丸 (499.45)	盛 高明、中野莊次、 高柳久雄
63	〃	63. 4. 1～平成 3. 31	第 58 海 王 丸 (499.45)	中野誠一、秦 一浩
平成	〃	平成 4. 1～2. 3. 31	〃 (〃)	浜田義男、澤田早苗、白勢隼人

年度	海 域	調 査 期 間	船 名 (トン数)	調 査 員
2	北太平洋中部	2. 4. 1～3. 3. 31	" (")	白勢隼人、澤田早苗
3	太平洋西部海域	3. 4. 1～4. 3. 31	第 58 海 王 丸 (499.45)	甲藤幸一、會田晴英
4	"	4. 4. 1～5. 3. 31	第 87 海 王 丸 (499.00)	白澤壽昭、小林文典
5	"	5. 4. 1～6. 3. 31	" (")	白澤壽昭、小林文典
6	"	6. 4. 1～7. 3. 31	第 18 日 之 出 丸 (359.00)	白澤壽昭、小林文典
7	"	7. 4. 1～8. 3. 31	" (")	白澤壽昭、田中 昭

8. 流 し 網

年度	海 域	調 査 期 間	船 名 (トン数)	調 査 員
62	南太平洋中部	62. 10. 1～63. 3. 31	鷹 山 丸 (420.67)	佐谷守朗
63	"	63. 10. 1～平元. 3. 31	" (")	畑中隆司
平元	"	平元. 10. 20～2. 3. 31	新 宝 洋 丸 (495.54)	畑中隆司

9. 沖合底びき網

年度	海 域	調 査 期 間	船 名 (トン数)	調 査 員
46	太平洋南区 (四国、九州沖)	46. 7. 7～46. 9. 30	第 11 栄 和 丸 (64.89) 第 12 栄 和 丸 (64.49) 第 25 海 幸 丸 (63.22) 第 26 海 幸 丸 (63.32)	橋 萬蔵、市川 渡
47	"	47. 5. 8～47. 8. 16	第 25 金 光 丸 (64.33) 第 26 金 光 丸 (64.48)	橋 萬蔵
"	太平洋北区 (岩手、青森県沖)	47. 5. 10～47. 9. 9	第 8 親 潮 丸 (58.98)	鈴木晴彦、斎藤良司、田中一男
48	"	48. 5. 8～48. 8. 31	第 12 稲 荷 丸 (58.42)	橋 萬蔵、黒岩道德
"	中南部千島列島沖合	48. 5. 15～49. 9. 14	第 85 千代喜丸 (124.13)	谷野保夫、町田末宏、稲田伊史
49	"	49. 5. 26～49. 9. 25	" (")	谷野保夫、橋本 昭、好井義明
"	武蔵堆沖合	50. 1. 25～50. 3. 31	第 26 寅 丸 (124.56)	谷野保夫、佐藤敏郎、田中一男
50	"	50. 10. 30～51. 1. 25	第 17 北 光 丸 (124.54)	谷野保夫、田中一男、好井義明
"	大和堆及び北大和堆周辺	50. 5. 11～50. 8. 10	第 2 明 信 丸 (53.64)	谷野保夫、稲田伊史
51	"	51. 5. 15～51. 8. 14	開 進 丸 (42.07)	谷野保夫
"	オホーツク海	51. 8. 3～51. 11. 2	第 1 大 成 丸 (124.48)	谷野保夫
52	"	52. 9. 1～52. 10. 31	第 36 宝 栄 丸 (124.11)	谷野保夫
"	能登半島沖合	52. 5. 15～52. 8. 14	開 進 丸 (42.07)	谷野保夫
53	襟裳岬南西沖合	53. 8. 20～53. 10. 31	第 58 晶 栄 丸 (124.48)	高橋正憲、船戸健次
54	"	54. 7. 10～54. 10. 9	" (")	高橋正憲、船戸健次、小山田光雄
55	東シナ海 (九州南方)	55. 6. 10～55. 9. 20	第 35 海 幸 丸 (75.50) 第 36 海 幸 丸 (75.55)	渡辺 洋
56	"	56. 5. 16～56. 8. 25	" (") " (")	桶田俊郎
57	日本海南西部	57. 5. 15～57. 8. 22	第 8 明 徳 丸 (53.99)	小野田 勝
58	"	58. 5. 1～58. 8. 31	" (")	船戸健次、谷津明彦、舩富雄二
59	日本海南西部 (大陸棚斜面)	59. 4. 14～59. 8. 31	第 8 正 進 丸 (124.46)	原田誠一郎、森慶一郎
60	"	60. 4. 16～60. 8. 13	第 68 正 進 丸 (124.52)	池田伸一
61	日本海中部 (能登西方)	61. 4. 10～61. 8. 9	" (")	原田誠一郎
62	"	62. 7. 18～62. 10. 10	第 38 新 生 丸 (125)	恒川知行、浅羽 昇
63	"	63. 8. 3～63. 9. 26	第 27 幸 生 丸 (125)	畔田 隆

10. 以西底びき網

年度	海 域	調 査 期 間	船 名 (トン数)	調 査 員
平元	熱帯太平洋西部	平元. 12. 1～平元. 3. 31	第 32 鹿 島 丸 (127)	竹田喜彦
2	"	2. 4. 18～2. 8. 7	" (")	宮川震一
3	熱帯太平洋西部 (陸棚斜面) 海域	3. 4. 16～3. 8. 10	" (")	末兼信行

11. おきあみひき網等

年度	海 域	調 査 期 間	船 名 (トン数)	調 査 員
47	南極海 (ウェッデル海)	47. 10. 25～48. 2. 13	千 代 田 丸 (2, 180. 34)	下城宏之
48	〃	48. 10. 21～49. 3. 28	第 11 大 進 丸 (1, 493. 80)	中村 悟
49	〃	49. 10. 31～50. 3. 31	〃 (〃)	中村 悟、桶田俊郎
50	南極海 (クィーンモードランド沖合)	50. 11. 15～51. 3. 31	第 82 大 洋 丸 (2, 406. 53)	奈須敬二
51	〃	51. 10. 11～52. 3. 14	第 2 播 州 丸 (2, 406. 53)	奈須敬二
52	南極海 (ウィムズランド沖合、ロス海)	52. 10. 13～53. 3. 31	〃 (〃)	奈須敬二
53	南極海 (〃)	53. 10. 23～54. 3. 30	〃 (〃)	高橋正憲
54	南極海 (マリーバードランド沖合)	54. 11. 1～55. 4. 10	吉 野 丸 (3, 264. 71)	高橋正憲
55	〃	55. 10. 21～56. 3. 20	〃 (〃)	高橋正憲
56	〃	56. 10. 1～57. 3. 26	〃 (〃)	高橋正憲
57	南極半島周辺	57. 9. 15～58. 2. 28	〃 (〃)	高橋正憲
58	〃	58. 11. 7～59. 3. 31	第 2 瑞 洋 丸 (3, 023. 02)	安永徳勝

12. 母船式おきあみ

年度	海 域	調 査 期 間	船 名 (トン数)	調 査 員
52	南 極 海	52. 11. 15～53. 3. 31	大 津 丸 他 10 隻 (8, 032. 96)	中村 悟 他
53	〃	53. 10. 18～54. 3. 31	信 濃 丸 他 10 隻 (8, 852. 49)	橋本 昭、浜崎 学
54	〃	54. 11. 10～55. 3. 28	〃 (〃)	橋本 昭、大和田 厚

13. 底はえなわ

年度	海 域	調 査 期 間	船 名 (トン数)	調 査 員
46	ベンガル湾東部	46. 10. 18～47. 3. 31 46. 12. 1～47. 3. 31	第 18 広 栄 丸 (276. 31) 第 1 幸 丸 (98. 95)	谷野保夫、桑岡亦好
47	〃	47. 8. 1～48. 2. 7	第 51 宝 洋 丸 (496. 69)	谷野保夫
48	中部インド洋	48. 9. 30～49. 3. 31	宝 洋 丸 (499. 90)	谷野保夫、田中一男
49	〃	49. 10. 16～50. 3. 31	〃 (〃)	橋本 昭
50	南シナ海	50. 5. 1～50. 10. 15	〃 (〃)	橋本 昭
51	〃	51. 4. 1～51. 9. 18	〃 (〃)	中野荘次
52	ハワイ海嶺	52. 6. 1～52. 11. 6	第 7 竜 昇 丸 (459. 10)	中野荘次
53	〃	53. 5. 15～54. 3. 3	〃 (〃)	宅間教雄
54	ハワイ海嶺 (東部)	54. 4. 13～55. 2. 12	〃 (〃)	黒田修史
55	〃	55. 4. 25～56. 3. 25	〃 (〃)	家長典史
56	九州・パラオ海嶺	56. 6. 1～56. 12. 23	第 25 竜 昇 丸 (434. 51)	佐藤敏郎、稲田伊史
平成	南太平洋西部	平成 11. 15～平成 12. 3. 14	第 26 福 吉 丸 (349)	矢野和成
2	〃	2. 11. 19～3. 3. 18	第 22 安 洋 丸 (499. 22)	植田喜好
3	北太平洋西部海域	4. 1. 10～4. 3. 24	〃 (〃)	田中 昭
4	〃	5. 1. 15～5. 3. 30	〃 (〃)	佐々木 明
5	〃	6. 1. 16～7. 3. 31	〃 (〃)	末兼信行

14. 遠洋底びき網

年度	海 域	調 査 期 間	船 名 (トン数)	調 査 員
50	ニュージーランド南方沖合	50. 4. 8～51. 3. 9	深 海 丸 (3, 393. 23)	鈴木春彦
51	〃	51. 4. 1～52. 3. 31	〃 (〃)	稲田伊史
52	インド洋南西部 (西部)	52. 4. 1～53. 3. 31	〃 (〃)	鈴木春彦、稲田伊史
53	パタゴニア沖合	53. 4. 1～54. 3. 31	〃 (〃)	稲田伊史、佐藤敏郎
54	スコシア海、アフリカ西岸 (南部) 沖合、南大西洋海山	54. 4. 1～	〃 (〃)	徳佐克博
〃	ニュージーランド南部	～55. 3. 31	〃 (〃)	徳佐克博
55	ニュージーランド南部 (高緯度)	55. 4. 1～56. 3. 31	〃 (3, 395. 12)	黒岩道徳、徳佐克博

年度	海 域	調 査 期 間	船 名 (トン数)	調 査 員
56	ニュージーランド南部 (高緯度)	56. 4. 1～57. 3. 31	深 海 丸 (3,395.12)	植田喜好、河野秀雄、徳佐克博
57	南太平洋西部 (海山)	57. 4. 1～58. 3. 31	〃 (〃)	徳佐克博、黒岩道徳、谷津明彦
58	〃	58. 4. 1～59. 3. 31	〃 (〃)	福井 襄、谷津明彦
59	〃	59. 4. 1～60. 3. 31	〃 (〃)	福井 襄、谷津明彦
60	南太平洋西部 (大陸棚斜面)	60. 4. 1～61. 3. 31	〃 (〃)	高橋正憲、保延良一
61	〃	61. 4. 1～62. 3. 31	〃 (〃)	小河道生、高橋正憲
62	北大西洋西部及び熱帯大西洋東部	62. 4. 1～63. 3. 31	〃 (〃)	岡田啓介、谷津明彦 矢野和成、田中 昭
63	〃	63. 4. 1～平元. 3. 31	〃 (〃)	岡田啓介、谷津明彦、田中 昭
平元	〃	平元. 4. 1～2. 3. 31	〃 (〃)	秋本和彦、田中 昭
2	北大西洋西部	2. 4. 1～3. 3. 31	〃 (〃)	秋本和彦、西牟田力雄
3	北大西洋西部海域 グリーンランド水域 カナダ沖水域及びフェロー諸島水域	3. 6. 1～4. 4. 28	〃 (〃)	西牟田力雄、矢野和成
4	北大西洋西部海域 カナダ水域、フェロー諸島水域及び NEAFC公海域、グリーンランド水域	4. 5. 11～5. 3. 2	〃 (〃)	西牟田力雄、佐谷守朗
5	北大西洋西部海域 フェロー諸島水域、ノルウェー水域及び NEAFC公海域、グリーンランド水域	5. 4. 1～6. 3. 31	〃 (〃)	小河道生、西牟田力雄
6	北大西洋西部海域 フェロー諸島水域、ノルウェー水域 グリーンランド水域	6. 4. 1～7. 3. 31	〃 (〃)	小河道生、清水弘文
7	北大西洋西部海域 (グリーンランド漁 業水域、フェロー諸島水域、ノルウェー 水域、NAFO公海域、NEAFC公海域)	7. 4. 1～8. 3. 31	〃 (〃)	古賀淳司、甲谷伊佐雄、 金丸信一

Ⅱ．新資源開発調査事業

15. しまがつお資源

年度	海 域	調 査 期 間	船 名 (トン数)	調 査 員
53	北西太平洋	53. 6. 1～54. 1. 15	新 洋 丸 (293.51)	加藤幸雄
54	〃	54. 4. 12～55. 2. 10	〃 (〃)	加藤幸雄、佐藤敏郎
55	〃	55. 4. 10～56. 3. 13	〃 (〃)	佐藤敏郎、榎原 誠
56	北太平洋東部	56. 4. 13～57. 2. 28	〃 (〃)	飯塚光江、榎原 誠
57	〃	57. 4. 19～58. 2. 28	〃 (〃)	田中満人、菅原 敬、水戸啓一
58	〃	58. 4. 26～59. 3. 31	〃 (〃)	西岡 忍、高橋正憲
59	南太平洋西部	59. 7. 4～60. 3. 31	茨 城 丸 (374.07)	高橋正憲、大久保裕人
60	〃	60. 8. 1～61. 3. 31	〃 (〃)	白沢壽昭、園 稔
61	〃	61. 10. 1～62. 3. 31	〃 (〃)	澤田石 城

16. ぎんだら・まだら資源

年度	海 域	調 査 期 間	船 名 (トン数)	調 査 員
54	アメリカ・アラスカ湾沖合	54. 5. 13～54. 10. 31	第 15 竜 昇 丸 (495.38)	黒岩道徳
55	〃	55. 5. 26～55. 10. 17	第 8 福 吉 丸 (499.70)	稲田伊史
56	北米太平洋岸沖合 (バーリング・ナガ沖)	56. 6. 1～56. 10. 15	第 22 安 洋 丸 (499.22)	小野田 勝
57	〃	57. 5. 14～57. 9. 15	第 15 竜 昇 丸 (495.38)	船戸健次
58	北米太平洋岸沖合 (アリュージェン)	58. 5. 31～58. 10. 10	第 21 安 洋 丸 (499.26)	溝越 均
59	〃	59. 5. 6～59. 9. 12	第 15 竜 昇 丸 (495.38)	岩見隆夫
60	北米太平洋岸沖合 (大陸棚斜面)	60. 5. 8～60. 10. 7	第 8 福 吉 丸 (499.70)	福井 襄
61	〃	61. 5. 9～61. 10. 8	〃 (〃)	竹田喜彦
62	北太平洋東部	62. 5. 10～62. 10. 9	第 22 安 洋 丸 (499.20)	竹田喜彦
63	〃	63. 5. 17～63. 10. 16	第 88 富 丸 (499.40)	矢野和成

17. あろつなす資源

年度	海 域	調 査 期 間	船 名 (トン数)	調 査 員
57	南太平洋東部高緯度	57.10.1～58.3.31	第12宝洋丸 (299.16)	楨原 誠
58	〃	58.9.16～59.3.25	新宝洋丸 (499.54)	徳佐克博
59	〃	59.9.1～60.3.31	〃 (〃)	菅原 敬
60	南太平洋西部	60.10.1～61.3.31	〃 (〃)	谷津明彦
61	〃	61.10.1～62.3.31	〃 (〃)	谷津明彦

18. あろつなす・しまがつお資源

年度	海 域	調 査 期 間	船 名 (トン数)	調 査 員
62	南太平洋西部	62.8.27～63.3.31	茨城丸 (374.07)	黒瀬尚義
63	〃	63.8.22～平元.3.31	〃 (〃)	三船弘昭
平元	〃	平元.9.9～2.3.21	〃 (〃)	三船弘昭
2	〃	2.10.10～3.3.31	〃 (399.62)	三船弘昭

19. がすとり資源

年度	海 域	調 査 期 間	船 名 (トン数)	調 査 員
62	南太平洋中部 (東部)	62.9.16～63.3.31	第18住吉丸 (408)	澤田石 城
63	〃	63.4.1～63.10.31	〃 (〃)	大野昭憲
平元	〃	平元.9.11～平2.3.31	第8住吉丸 (469)	大野昭憲
2	〃	2.4.1～2.10.20	〃 (〃)	滋野三樹
3	南太平洋中部 (東部) 海域	3.10.1～4.3.31	第71住吉丸 (498)	植田喜好
4	〃	4.4.1～4.9.30	〃 (〃)	宮川震一
5	〃	5.10.1～6.3.31	第18住吉丸 (498)	佐谷守朗
6	〃	6.4.1～6.10.31	〃 (〃)	澤田石城
7	〃	7.10.1～8.3.31	第52住吉丸 (379)	澤田石城

20. さめ資源

年度	海 域	調 査 期 間	船 名 (トン数)	調 査 員
53	北太平洋	53.6.1～54.2.28	第77宝洋丸 (425.97)	斎藤良司、楨原 誠
54	〃	54.4.12～54.8.11 54.11.1～55.3.31	第53宝洋丸 (224.76)	楨原 誠、中野 徹
55	〃	55.4.10～55.12.20	〃 (〃)	円山恒民、八巻憲治
56	北太平洋東部	56.4.20～56.12.19 57.1.5～57.3.31	〃 (〃)	八巻憲治、大森光男、谷津明彦

21. 深海性えび等資源

年度	海 域	調 査 期 間	船 名 (トン数)	調 査 員
54	南米北岸 (スリナム) 沖合	54.6.1～55.3.31	第201日進丸 (98.71)	長谷川峰清、船戸健次
55	〃	55.4.1～56.3.31	〃 (〃)	長谷川峰清、船戸健次
56	南米北岸 (仏領ギアナ) 沖合	56.4.1～57.3.31	〃 (〃)	稲田伊史、水戸啓一、村田武雄
57	〃	57.4.8～58.3.31	〃 (〃)	稲田伊史、同道政則、徳佐克博

Ⅲ. 新操業形態開発実証化事業

22. 新操業形態開発実証化事業 (まき網)

年度	海 域	調 査 期 間	船 名 (トン数)	調 査 員
平2	東シナ海、黄海、南シナ海	平3.2.20～平3.3.	第15光洋丸4隻 (135)	橋津 寛
3	東シナ海、南シナ海、黄海、西部日本海海域	3.4.1～4.2.5	第15光洋丸 (〃)	橋津 寛、村上正春
4	〃	4.4.1～5.2.5	〃 (〃)	沖山武史、植田喜好
5	東シナ海、黄海、南シナ海海域	5.7.10～6.3.31	平成丸 (965)	伏島一平、植田喜好
6	〃	6.4.1～7.3.31	〃 (〃)	伏島一平、植田喜好
7	〃	7.4.1～8.3.31	〃 (〃)	伏島一平、植田喜好

23. 新操業形態開発実証化事業（沖合底びき網）

年度	海 域	調 査 期 間	船 名（トン数）	調 査 員
平 7	077水域及び北海道道東太平洋側水域	〒7. 6. 11～〒8. 3. 31	第 2 星 德 丸 （124.30）	小河道生、越智洋介、佐谷守朗

IV. 沖合漁場等総合開発調査事業

24. 沖合漁業造成開発事業

年度	海 域	調 査 期 間	船 名（トン数）	調 査 員
62	北太平洋西部（日本沖合）	62. 9. 15～63. 3. 31	第 1 8 春 丸 （49.67）	田 淵 誠、沼沢政則
63	〃	63. 4. 1～〒元. 3. 31	第 1 康 丸 （47.12）	沼沢政則、増田敏弘、黒瀬尚義 田 淵 誠、澤田早苗
平元	〃	〒元. 4. 1～2. 3. 31	〃 （ 〃 ）	田 淵 誠、秦 一浩、越智洋介 増田敏弘
2	〃	2. 4. 1～3. 3. 31	第 3 泰 唱 丸 （59.88）	武智 博、越智洋介、増田敏弘 白勢隼人
3	北太平洋西部（日本沖合）海域	3. 4. 1～4. 3. 31	〃 （ 〃 ）	越智洋介、佐谷守朗、佐々木明
4	〃	4. 8. 17～5. 3. 31	第 1 8 紘 成 丸 （69.65）	越智洋介、原田誠一郎
5	〃	5. 4. 1～6. 3. 31	〃 （ 〃 ）	原田誠一郎、會田晴英、直良治 越智洋介
6	〃	6. 4. 1～7. 3. 31	〃 （ 〃 ）	越智洋介、古賀淳司、小河道生 佐谷守朗、宮川震一
7	〃	7. 4. 1～8. 3. 31	第 1 8 太 幸 丸 （69.69）	宮川震一、岩澤昭文、 原田誠一郎、越智洋介

25. 沖合漁場等再開発基礎調査

年度	海 域	調 査 期 間	船 名（トン数）	調 査 員
63	日本海大和堆	63. 8. 10～63. 9. 28	第 1 0 海 工 丸 （241.16）	永延幹男
平元	〃	〒元. 8. 25～〒元. 9. 28	蒼 玄 丸（3,200.45）	永延幹男
2	〃	2. 8. 6～2. 9. 9	若 潮 丸 （493.59）	山田陽巳
3	北見大和堆周辺海域	3. 8. 27～4. 1. 14	第 1 漁 運 丸 （124.94）	伊藤正木、山田陽巳
4	〃	4. 4. 1～4. 12. 31	若 潮 丸 （493.59）	木下貴裕
	三陸沖大陸棚斜面海域	4. 10. 1～5. 3. 31	第 5 8 幸 勝 丸 （65）	木下貴裕、池上清治
5	北見大和堆周辺海域	5. 4. 1～6. 3. 31	若 潮 丸 （320）	木立 孝、山下秀幸
	三陸沖大陸棚斜面海域	5. 6. 25～5. 7. 24	第 3 0 丸 定 丸 （125）	山下秀幸、田 淵 誠
6	〃	6. 4. 1～7. 3. 31	若 潮 丸 （320）	木立 孝、田 淵 誠
	沖縄舟状海盆周辺海域	6. 5. 21～6. 6. 30	若 潮 丸 （320）	諏訪英博、清水弘文
	日本海中北部	7. 8. 18～7. 11. 17	た い け い （117）	武智 博
7	〃	7. 6. 1～7. 7. 31	春 日 丸 （19.99）	山下秀幸
	沖縄舟状海盆周辺海域	7. 11. 1～7. 12. 22	第 1 翔 久 丸 （8.98）	清水弘文
	〃	7. 11. 13～7. 11. 22	さ つ な ん （287.71）	鈴木智之
	〃	7. 11. 14～7. 11. 26	図 南 丸 （176）	木立 孝

26. 沖合有用魚種相（浮魚）調査

年度	海 域	調 査 期 間	船 名（トン数）	調 査 員
平 2	日本沖合	〒2. 12. 8～〒3. 3. 31	第 1 5 観 音 丸 （107）	武智 博
3	日本沖合海域	3. 8. 19～3. 12. 6	開 洋 丸 （217.71）	武智 博
4	〃	4. 6. 1～4. 9. 18	第 3 開 洋 丸 （473.65）	武智 博
5	〃	5. 4. 13～5. 8. 9	〃 （ 〃 ）	武智 博、岩澤昭文
6	〃	6. 5. 18～6. 10. 3	第 6 1 い ち 丸 （149）	武智 博

センターだより

平成8事業年度調査実施概要（中間報告）

（平成8年11月30日現在）
（月、製品量は平成8年12月31日現在）

漁業種類	使用船舶（総トン数）	調査海域	主要漁獲魚種	製品量	概要
（新漁場開発調査事業） まぐろはえなわ	開発丸 （489トン）	太平洋東部海域	メバチ キハダ クロマグロ		メバチを主対象としタヒチ東方水域の3°S, 135°W付近の水域を中心に北緯水域にかけて10月末まで調査を行い、11月中旬からはクロマグロを主対象として天皇海山水域で調査を行っている。11月末までの間に合計111回の操業で101.5トン（うち、メバチ51.8トン、キハダ18.5トン）の漁獲を得た。6月下旬から7月上旬の3°4'N, 140°14'Wと9月下旬の4°6'S, 135°13'W付近で、メバチ主体の漁場形成を確認した。これら2水域の当該時期における釣針1,000本当たりの漁獲量は、それぞれ728kg（うちメバチ527kg）、550kg（同321kg）であった。 クロマグロを主対象とした調査に関しては、11月下旬に天皇海山水域の36°N, 171°E付近で1尾（38kg）の漁獲があった。現在この付近の海域を中心にクロマグロの分布状況の把握を行うべく鋭意調査中である。 上記調査と並行して、昨年度に引き続き6月中旬～8月中旬の間にタヒチ東方・北緯水域で100細網の各枝網の釣針の設置水深範囲とメバチの釣獲率の調査を合計26回の操業時に行い、両素材とも中間の水深帯の枝網の釣獲率が相対的に多かった。 幹網の素材を変えることによる釣獲率向上の可能性を検討するため、1～2次航で細網とナワカ*1を用いて両者の釣獲率の比較調査を行った。その結果、細網とナワカ幹網のメバチ、キハダの1,000針当たりの漁獲尾数は、それぞれ4.4尾と3.4尾、2.2尾と1.9尾で両素材の釣獲率に明瞭な差は認められなかった。
まき網	日本丸 （760トン）	熱帯インド洋東部海域	カツオ キハダ	96.0トン	5月上旬までは、4°～6°S, 94°～96°Eの水域において、人工流木、5月中旬から下旬にかけては、5°7'S, 85°Eの水域で、流れ物付き群を対象に操業を行い、カツオ主体に485トン漁獲。漁獲は低調。 9月上旬からの調査では、赤道より5°S, 83°～93°Eで人工流木主体に20日間の操業でカツオ主体に455トン漁獲。10月は9月と同じ水域で操業し、海況やや悪く漁獲は280トンで低調。 11月は3°～6°S, 85°～95°E周辺の水域でカツオ主体キハダ混じりで550トンを漁獲。
まき網	第8天王丸 （349トン）	熱帯太平洋中部海域	カツオ キハダ	2,375.0トン	4月～5月の間はミクロネシア200海里水域内の東方海域においてカツオの脂質含有量調査に供するサンプリング調査を実施。6月1～19日はミクロネシア200海里水域の0°～5°N, 152°～160°Eの水域で素群及び流れ物付き群を対象に操業し、カツオ主体に410トン漁獲。8月17～26日に5°S, 170°E付近に漁場が形成され米船と競合して操業し、カツオ主体に250トン漁獲。8月～9月にかけては全体に流れ物が少なく、潮流が強いところが多く、また、魚群も少なく群も小さかった。11月はナウル200海里水域内の0°～2°S, 164°～168°E付近で漁場が形成され、船付き、人口筏付き群を操業し、カツオ主体に590トンを漁獲。
まき網	北勝丸 （286トン）	北太平洋中部（西部）海域	カツオ マグロ類 サバ イワシ類	2,272.5トン 2,265.4トン	カツオ、マグロ類を対象とした調査では、5月中旬までの小笠原～八丈島水域で操業を行ったが、表水温が低く漁場形成は見られなかった。7月上旬～8月中旬にかけてサメ付き群、流木付き群を中心に操業を行い、安定した漁獲を得た。4月3日～9月30日の間、64回の操業でカツオ主体に768.7トン漁獲。 10月中旬よりサバ、イワシ類を対象として八戸沖から常磐沖にかけてマイワシ主体の漁場形成が確認された。マイワシ主体に1,214トンを漁獲した。
いか釣	第3新興丸 （478.1トン）	南大西洋西部海域及び 北太平洋中部海域	アカイカ マツイカ アカスルメイカ	171.6トン	6月11日～8月25日まで北太平洋中部海域において第31宝来丸、第11茨城丸及び本船からなる船団で、アカイカ調査を行った。8月26日～11月20日までの間は本船単独調査を実施。 8月26日～9月20日の単独調査の間は43°46'5"N, 172.5°～178°Eの東経漁場で操業を行い、55.1トン（1実操業日当たり2.9トン）の漁獲を得た。10月4日～11月20日までの調査では、30°46'5"N, 172.5°E～151.5°Wの広い範囲で操業を行ったが、低気圧の来襲で時々休漁が多く、漁獲量は67.9トン（1実操業日当たり2.1トン）と低調に終わった。45°46'N, 175°～162°Wの漁場において17日間操業し、3.6トン/日の好漁獲を揚げた。また、この時期に広範域に亘りイカ釣漁業の対象となる大型イカ群（モード46～48cm）の分布が確認された。

漁業種類	使用船舶(総トン数)	調査海域	主要漁獲魚種	製品量	概 要
いか釣	第31宝来丸 (276トン) 第11茨城丸 (337トン)	北太平洋中部海域	アカイカ	265.8トン	6月4日～9月3日の3ヶ月間、37°47'N, 170°E～133°Wにかけて広範囲に亘りアカイカの釣操業を実施した。暖水の張り出し先端部を中心として操業を行った。延べ操業日数107日間でアカイカ265.5トン漁獲した。1隻1日当たりの漁獲量は2.5トン、1時間当たりの漁獲量は163kgであった。水中灯を用い朝、昼釣操業も実施し、8月中旬以降は1隻1日当たり平均1.3トンの漁獲があった。西経漁場42°N, 154°W付近において1隻1日24トンの漁獲が得られたポイントもあった。また、付加価値向上を目指して製品化したアカイカの量は、1kg当たり1,050円の比較的高値で販売できた。
かつお釣	第18日之出丸 (359トン)	太平洋西部海域	カツオ ビンナガ		4月にはマージナルとミクロネシア水域及びその北側公海水域の調査を行い、4月上旬に14°15'N, 170°E付近でカツオを109.6トン(CPUE, 10.0トン/日)漁獲し、漁場形成を確認した。 5月から10月中旬までは沖合ビンナガとトロカツオを対象に天皇海山から西経海域にかけて調査を行った。 この間沖合ビンナガについては、6月中旬に37°N, 155°E付近で58.3トン(CPUE, 14.6トン)並びに7月下旬に40°N, 160°30'E付近で84.5トン(CPUE, 10.6トン)漁獲した。両漁場は、各々当業船の本年度の主漁場となり各々の漁場から約4,000トンの漁獲が得られた。前述の2漁場はいずれも表面水温18-20℃の暖水の張り出しの縁辺部に形成された。カツオについては単発的な漁獲はあったが持続せず、漁場形成の確認には至らなかった。
(新資源開発調査事業) がすところ資源	第52住吉丸 (379トン)	南太平洋中部(東部)海域	ガストロ メバチ	85.0トン	7月19日までの間、チリ沖の25°35'S, 85°102°Wで84回の操業調査と153回のSTD観測を行い、ガストロ主体に145トン(ガストロ32.1トン、メバチ19.7トン)の漁獲を得た。9月2日三崎港入港、同港魚市場において、85トン(ガストロ22.2トン、15.6トン)の製品を販売した。 産卵期による漁場形成に関しては、亜熱帯東域からその北側水域を調査し、CPUEは平均2.7尾、最高15.8尾と低く、漁場形成の確認には至らなかった。一方、産卵期に関しては、7月中旬には大半の個体が放卵状態となった。このことから、産卵期は少なくとも2月下旬には始まり7月中旬頃まで継続することが示唆された。また、生殖腺の観察結果から本種は多回性産卵を行うことが確認された。産卵は海洋観測の結果から主として亜熱帯系水と亜南極系水との混合域で行われることが示唆された。 ガストロ製品の付加価値向上に関しては、ガストロの一部をスキャンレスブロックで販売した。当該製品販売単価は690円/kg。これからはドレスからチャックへの加工歩留まり(75%)を考慮しても水揚げ金額がドレスで販売する場合の1.8倍になることが明らかとなった。

漁業種類	使用船舶(総トン数)	調査海域	主要漁獲魚種	製品量	概 要
(深海漁場開発調査事業) 通洋底びき網	深 海 丸 (3,395.12ト)	北大西洋西部海域	カラスガレイ アカウオ		NEAFC公海水域 5月23日から7月22日にかけて中層性アカウオを対象に中層トロール操業を行い、415.0トンの漁獲を得た。このうち5、6月は、62°64'N, 30°32'Wの周辺の水深600~1,000mで操業を行い、漁獲量は337.7ト(1操業日当たり8.9ト)であった。 なお、当該水域の中層性アカウオは、寄生虫が多く漁獲物の約50%がドレス製品にできずミール向け原料となった。 NAFO 3区水域 7月下旬はフレミッシュキャップの西側漁場でカラスガレイを対象に操業を行い、13.7ト(カラスガレイ11.3ト)の漁獲を得た。9月下旬から10月中旬にかけて46°N, 46°W及び46°N, 44°W周辺水域の水深410~1,380mでアカウオを主対象とした操業を行い、アカウオを216.3ト漁獲した。 10月下旬からは48°N, 46°W (フレミッシュキャップの北西漁場) 周辺の主として水深770~1,440mで操業を行い、カラスガレイを253.9ト漁獲した。 カナダ 30区水域 9月2日から16日まで、30区の西斜面の水深500~800mで操業を行い、アカウオを417.2ト(総漁獲量の98%)を漁獲した。500m以深で操業を行ったところ漁獲物の大半は、24cm以上のアカウオであった。 カナダ水域 8月4日から29日にかけては、水産庁及び業界からの要望により、NAFO2G, 2H区水域でカナダとの共同調査(科学調査)を実施した。
				710.8ト	

漁業種類	使用船舶(総トン数)	調査海域	主要漁獲魚種	製品量	概 要
(新操業形態開発実証化事業) まき網	平成丸 (965トン) 平成1号 (60トン) 第53漁生丸 (239トン) (1ヶ統3隻)	東シナ海 黄 海 南シナ海	アジ サバ サワラ イワシ類		灯船兼運搬船を導入し、11月末まで合計110回の操業を行い、サバ類とアジ類を主体に1,890トンの漁獲を得た。この間、集魚灯操業を行ったのが66回で1,345トンの漁獲を得た。その内、灯船兼運搬船も集魚灯を抜いて集魚操業を行ったのが32回で、灯船兼運搬船が集魚作業に参与しなかったのが34回、漁獲はそれぞれ704ト、641トであった。その1操業当たり平均漁獲量は前者が22.0トで、後者が18.8トであった。このことより、灯船兼運搬船の集魚装置が漁獲能力の向上に有効であることが示唆された。 さらに、灯船兼運搬船の導入により、鮮魚製品運搬の際の漁場離脱や大量漁獲時の凍結製品製造に伴う操業ロスが少なくなったこと等により操業回数、漁獲量共に増加した。 なお、漁具漁法の改良については11月末まで合計51回の製品水揚げを行ったが、灯船兼運搬船が鮮魚製品として水揚げすることにより単価向上が図られたことが示唆された。
沖合底びき網	第2星徳丸 (124トン)	北海道周辺海域	イトヒキダラ スケトウダラ キチジメ メヌケ	2,387.5ト	4月1日から5月31日まで、北海道東水域で調査を実施した。選択的漁獲を図るコッドエンドを作成するため、漁獲された各魚種について体長、胴周長を測定する等基礎資料を収集した。 9月より魚類とゴミ類を分離することを目的とした選択性コッドエンド作成及び今後の漁具改良のための基礎資料を得るため、水中カメラを網口、コッドエンド内等に取付け、曳網中に入網する魚類の遊泳行動及びゴミ類の状態を観察し、選択性コッドエンド作成に必要な参考資料を収集した。
(沖合漁場等総合開発調査事業) 沖合漁場造成開発事業	第18太幸丸 (69.69トン)	北太平洋西部(日本沖合) 海域	カツオ キハダ メバチ シイラ	945.0ト	浮魚礁群の設置形態と魚類集果効果との関係、特に本年度の最重要調査事項である適切な設置間隔について検討するため、8年1月に設置を完了したG、H魚礁群を主対象に竿釣り等による調査を実施中。 また、船舶、船型、乗組員数などに応じた中層型浮魚礁漁場の適正な利用方法を確立するため、資料として、当業船の中層型浮魚礁の利用状況の現状についての資料の収集も進行中である。
沖合漁場等総合開発調査事業 沖合漁場等再開発基礎調査	たいけい (119トン)	日本沖合海域 (日本海中北部)	メダイ ブリ類 クロマグロ類	0.46ト	秋田県男鹿半島沖合に新たに浮魚礁を2基設置し、回遊経路の沖合への広がりの程度を6月~11月に調査した。また、鰯集魚を漁獲するための適切な漁具・漁法の検討を行った。
	第8興洋丸 (118トン)	日本沖合海域 (日本海沖合部)	ベニズワイ	20.3ト	7、8月に漁場として利用されていない深部海域のうち大和堆東の水深1,500~2,700mの水域のベニズワイの資源状況を調査するとともに、各種目合の漁具によるベニズワイ漁獲特性に関する予備的調査を行った。
	第5栄福丸 (9.7トン) 常丸 (7.3トン)	日本沖合海域 (沖縄県沖合部)	ソデイカ	2.6ト	瀬付魚調査のうち、名瀬・那覇事務所に駐在する現地調査員による各市場での体長測定、漁獲量調査、聞き取り調査等の陸上調査を4月より実施中。 11月からのソデイカ調査のうち、移動・回遊経路把握のための標識放流及びバイテレ調査、漁獲実態把握のための試験操業、漁場環境を解明するための環境調査を実施中。系群判別調査、年齢査定調査、市場調査及び流通経済調査を実施中。

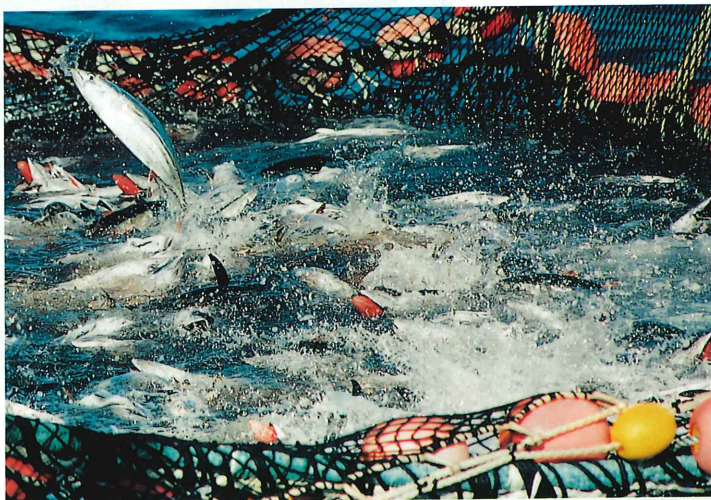
漁業種類	使用船舶(総トン数)	調査海域	主要漁獲魚種	製品量	概	要
沖合漁場等総合再開発調査事業 資源管理型沖合漁業推進総合 調査	第1勢力丸 (19トン) 第3大漁丸 (57トン)	東シナ海海域	アマダイ	15.9ト	11月まで採集調査によるアマダイ生物情報収集、漁業の効率化を図るための各種漁具の比較試験等を実施した。また、漁業者による関係国との民間交流支援事業については(社)大日本水産会と協力し、8月には中国を訪問し、11月には我が国に中国側代表団を招致して民間協議を行った。	

調査風景紹介（H 8 年度事業）



＜揚縄作業中＞

まぐろはえなわ新漁場開発調査：開発丸



＜網に入った魚たち＞

まき網新漁場開発調査（熱帯インド洋東部）：日本丸



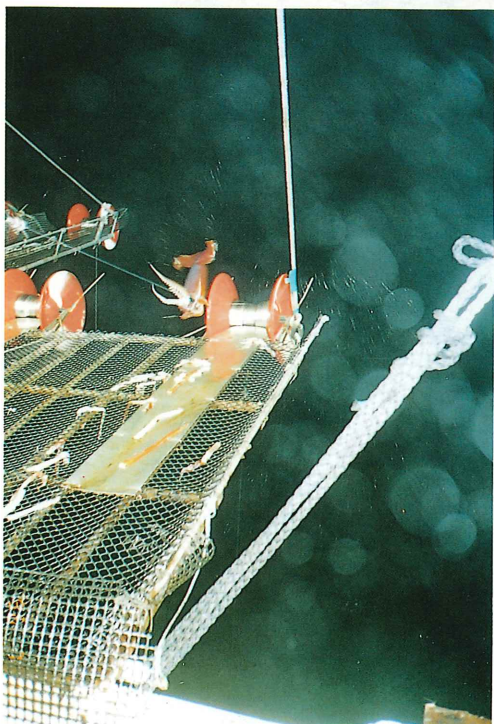
＜揚網作業中＞

まき網新漁場開発調査（熱帯太平洋中部）：第8天王丸



＜揚網作業中＞
まき網新漁場開発調査（北部太平洋）
：北勝丸

＜操 業 中＞
いか釣新漁場開発調査：第3 新興丸



＜自動いか釣機に釣り上げられるアカイカ＞
いか釣新漁場開発調査（アカイカ）：第31宝来丸



＜餌積み込み風景＞

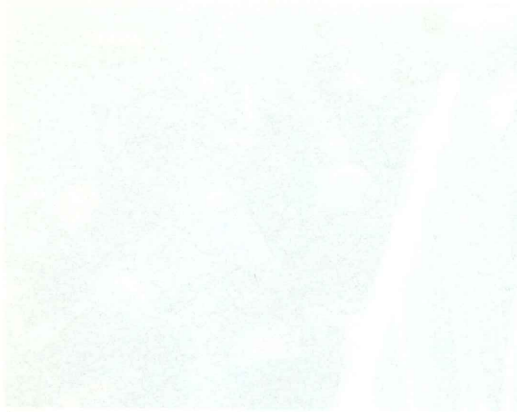
かつお（びんなが）釣新漁場開発調査：第18日之出丸



＜がすとろと調査員＞
がすとろ新資源開発調査：第52住吉丸



＜操 業 中＞
遠洋底びき網（深海）新漁場開発調査
：深海丸



＜漁場向け航走中＞
新操業形態開発実証化事業：平成丸



＜釧路港入港中の調査船＞
新操業形態開発実証化事業：第2星徳丸



＜操 業 中＞
沖合漁場造成開発事業：第18太幸丸



＜ソデイカの体重測定＞
 沖合漁場等再開発基礎調査
 （沖縄舟状海盆）：常 丸



＜甲幅測定作業中＞
 沖合漁場等再開発基礎調査（日本海中北部）
 ：第8 興洋丸

＜長崎港を出港する調査船＞
 資源管理型沖合漁業推進総合調査
 ：第1 勢力丸



< 外国船情報 >

開発センターの調査船により視認された外国船である（平成8年1月1日～平成8年12月30日）

第18日之出丸（調査海域：太平洋西部海域）

月日	発見位置	風向－風力－海況	水温℃	国籍及び船名	t数別隻数	操業状態等報告事項
'96 2.16	03° 45' N 175° 57' E	NNE－4	29.7	アメリカ	1,000 t 2	米式まき網船2隻1,000 t級 国籍アメリカ内1隻はヘリ搭載、いずれもCO ₂ SWで調査しながら航走中、行き先ソロモン水域
2.22	02° 52' S 164° 18' E	NE－3	29.9	不明 まき網船	4	
8.13	41° -30' N 152° -40' E	ESE－2	21.5	イカ釣船	20	
8.14	40° -25' N 153° -08' E	ESE－2	21.3	トロール、まき網、 イカ釣船	3,000~5,000t 1	3,000~5,000t級の大型船1隻を含み船団操業をしている模様、キャッチャー船型は小型のトロール、まき網、イカ釣船等多彩、中には、巻き上げ機を持たない船もみえる。船名は中国語と思われる飾り文字である。

新3新興丸（調査海域：南大西洋西部海域、熱帯太平洋東部海域及び北太平洋中部海域）

月日	発見位置	風向－風力－海況	水温℃	国籍及び船名	t数別隻数	操業状態等報告事項
'96 1.27	45° 28' S 59° 56' W	SW－4	10.7	スペイン トロール船 韓国、台湾 イカ釣船	2,000~4,000t 10 300~500t 70~80	45°~46°Sのアルゼンチン200海里沿いにスペイン船と思われる2,000~4,000t型のスタントロール10隻以上、韓国または台湾と思われる300~500t型のイカ釣り船70~80隻操業中、仲積船3隻、タンカー1隻を視認
2.7	46° 30' S 63° 30' W	E－2	12.9	不明 トロール船	300t 1 100t 1	トロール船300t型、100t型（wリガー）各1隻操業中
2.10	47° 30' S 63° 30' W	S－4	12.1	韓国 イカ釣船	300~500t 3	韓国か合弁のイカ釣船3隻操業中
2.11	47° 30' S 62° 30' W	N－3	11.8	”	” 3	操業中
2.12	47° -30' S 61° -30' W	N－3	12.0	台湾 イカ釣船	” 3	操業中
3.10	44° 57' S 60° 07' W	SSW－2	12.2	不明 トロール船 不明 イカ釣船	1,000~3,000t 20 300t 1	1,000~3,000tの船尾トロール約20隻着底トロール操業中
3.11	46° 23' S 60° 30' W	N－5	12.3	トロール船	80	24マイル以内に着底トロール20~30隻を含む80隻以上が操業中

北勝丸（調査海域：北太平洋中部（西部）海域）

月日	発見位置	風向－風力－海況	水温℃	国 籍 及 び 船 名	t 数別隻数	操業状態等報告事項
'96 4.13	26° 10' N 142° 14' W	N－4		台 湾	30 t 25	マグロ延縄操業中

開発丸（調査海域：太平洋東部海域）

月日	発見位置	風向－風力－海況	水温℃	国 籍 及 び 船 名	t 数別隻数	操業状態等報告事項
'96 6.21	02° 31' S 135° 54' W	E S E－4	26.4	韓 国 オ－リヤン335号	500t 1	昨日揚縄中19：00頃02-37S、132-12W 附近で韓国船延縄船（オ－リヤン335号500t型）の延縄と本船の延縄が交差し、本船の延縄が切断された。同船は適水しながら昨日日本船の操業付近にきて投縄した。他にも1隻この付近に接近してきている。
6.23	01° 18' S 135° 17' W	E S E－4	26.4	韓 国		3-135W付近(外礁方域)で、10日間操業調査してきたが、韓国船の参入、シャチの食害等で漁獲が低調となってきたので、北緯水域漁場に移動する。
7. 4	03° -30' N 143° -52' W	S E－3	28.0	韓 国		1 本船の隣に入ってきた。
7. 5	03° -01' N 142° -56' W	S E－3	27.8	”	2	
7. 6	03° -40' N 143° -06' W	S E－3	28.0	”	5	韓国船5隻に囲まれた。この付近日本船は本船を含め2隻のみ
7. 7	03° -40' N 143° -12' W	S E－3	27.8	”	9	
7.25	05° -09' N 134° -00' W	S E S－3	27.0	”	1 2	(船名符号DTAB13) (6NSK, HLJG)
9.18	3° -4-5' S 140° -145' W	S E－4	25.3	”	6	

深海丸（調査海域：北大西洋西部海域）

月日	発見位置	風向－風力－海況	水温℃	国 籍 及 び 船 名	t 数別隻数	操業状態等報告事項
'96 1.29	48° 11' N 45° 50' W		3.3		12	12隻位が本船より南部で操業中
1.31	48° 11' N 46° 45' W	W－7／6	1.2	ロシア	2	操業中
2. 2	48° 07' N 47° 18' W	W－8／6	1.6	スペイン		”
2. 3	48° 03' N 47° 08' W	WNW－6／4	1.0		3	
2.11	48° 09' N 47° 11' W	S W－7／5	0.3		3～4	当該漁場での外国船7～8隻が3～4隻に減る
5.23	62° 38' N 31° 27' W			ロシア、EU	50	操業中
6. 7	62° 41' N 31° 44' W	N－6	7.9	ロシア、バルト3国 スペイン、ポルトガル ドイツ、イギリス、フェロー フランス、ノルウェー アイスランド、カナダ	80	約80隻程度操業中 ロシア、バルト3国の船が主体

月日	発見位置	風向-風力-海況	水温℃	国 籍 及 び 船 名	t 数別隻数	操業状態等報告事項
9. 7	43° -46' N 52° -28' W	NNW- 7	18.3	カナダ	2	カジキの縄船
9. 8	43° -30' N 52° -02' W	NW- 1	18.3	カナダ	10	カジキの縄船
10.22	48° -39' N 44° -43' W	NW- 6	7.9		7	
10.25	48° -12' N 47° -12' W	NW- 3	7.5		9	
10.26	48° -15' N 46° -44' W	SSW- 3	7.7		11	付近操業船更に増えた
10.27	48° -11' N 47° -07' W	ENE- 5	6.9	スペイン、ホルトガル	7	その他、第7安洋丸及びNAFO監視船付近に2隻（コンデマリ、レナルド）
11.25	48° -11' N 46° -51' W	W- 8	3.4	スペイン	6	48-10Nを中心に西はカナダ 200マイルライン付近から46-45W付近までを東西に曳網操業
12. 9	48° -05' N 47° -21' W	ESE- 4	2.7	スペイン	12	

第8天王丸（調査海域：熱帯太平洋中部海域）

月日	発見位置	風向-風力-海況	水温℃	国 籍 及 び 船 名	t 数別隻数	操業状態等報告事項
'96 1. 4	00° 18' N 156° 38' E	NNW- 1	30.0	米 国 KASSANDRA Z	1,500t 1	海まき船（ヘリ搭載） 揚網中
1. 5	00° 00' N 156° 59' E	c a l m	30.1	”	” 1	”
1. 5	”	”	”	米 国 DON JUAN Z	” 1	”
1. 5	”	”	”	米 国 MARGARET Z	” 1	”
1.13	02° 10' N 158° 48' E	c a l m	29.6	不 明	125t 1	マグロ船適水中
2.28	01° 17' N 161° 32' E	E- 3	30.3	台 湾	350t 1	台湾旋網船探索中
3.15	02° 07' N 142° 146' E	E- 4	29.7	台湾、韓国	11	
5.26	04° 52' N 153° 10' E	ENE- 2	29.5	パナマ 旋網船	600t 1	パナマのQUEEN MARY旋網船（600t型）が流木を抱いて4-55N、153-11Eで流し中
5.28	03° 15' N 154° 51' E	E- 2	29.9	旋網船	700t	
6.15	05° 08' N 157° 51' E	ENE- 2	29.6	キリバス	3	
8.19	05° -02' S 170° -25' E	ENE- 4	29.2	米 船 TIFAIMOANA (WUY5850) KOORALE (WCP2565) GOLDEN GLOW (WAC6760) SEA ENCOUNTER (WTF4069) JEANETTE (旧BOLD FLEET, KUS648724) ELIZA M (WYZ5131) 不明 (旧CAPT. FRANK MEDINA, WQZ9784)	1,434t 15~16 1,072t 983t 1,049t 1,007t 1,110t 1,092t	(新たに確認した米船)

月日	発見位置	風向－風力－海況	水温℃	国 籍 及 び 船 名	t 数別隻数	操業状態等報告事項
8. 20	05° -11' S 170° -26' E	E S E－3	29. 2	米 船		
8. 21	05° -22' S 170° -33' E	E－3	29. 1	”	20	
8. 22	05° -26' S 170° -27' E	E－1	29. 4	”	20	
8. 23	05° -26' S 170° -24' E	E－3	29. 3	”	20	朝 5～6 隻だった米船 も揚げ後にはNE方面か ら又大挙集合
8. 24	05° -32' S 170° -13' E	E N E－2	29. 1	”	21	米船付近に大挙来襲
8. 25	05° -44' S 170° -02' E	E－4	29. 2	”	5～6	
8. 26	05° -52' S 169° -55' E	E S E－3	29. 0	”	7～8	
10. 20	02° -24' S 174° -38' W	E N E－4	28. 5	SEA ENCOUNTER	1, 049t	まき網船

第 2 星徳丸（調査海域：北海道周辺海域）

月日	発見位置	風向－風力－海況	水温℃	国 籍 及 び 船 名	t 数別隻数	操業状態等報告事項
' 96 5. 8	42° 26' N 144° 08' E	N E－4	3. 0	韓 国		濃霧の中韓国船と入れ 合い操業

第 1 勢力丸（調査海域：東シナ海）

月日	発見位置	風向－風力－海況	水温℃	国 籍 及 び 船 名	t 数別隻数	操業状態等報告事項
' 96 6. 14	28° 57' N 126° 14' S	S W－2		韓 国 中 国	4 10	
6. 15	28° 40' N 126° 17' S	S－3		中 国	30	
6. 17	28° 46' N 126° 18' S	S W－4		韓 国 中 国	3 6	
6. 24	31° 32' N 127° 17' E	S S W－3	22. 9	韓 国 中 国	15 1	
6. 25	31° 08' N 127° 22' E	S S W－1	23. 0	韓 国	4	
6. 26	31° 06' N 127° 22' E	S W－1	23. 1	韓 国 中 国	1 1	
6. 27	30° 40' N 127° 14' E	S S W－3	24. 2	韓 国 中 国	8 2	
7. 1	30° -58' N 127° -18' E	S W－1	24. 5	中 国	1	
7. 2	31° -13' N 127° -23' E	S W－1	24. 8	韓 国	1	
7. 12	29° -48' N 127° -41' E	S W－1	28. 0	中 国	10	
7. 13	29° -50' N 126° -41' E	S W－2	28. 0	中 国 韓 国	12 1	
8. 8	31° -30' N 127° -29' E	S E－1	30. 2	中 国	5	
8. 9	31° -08' N 127° -23' E	E－2	29. 9	”	2	
8. 10	31° -02' N 127° -11' E	E－3	30. 0	”	4	
8. 11	31° -47' N 127° -43' E	E－4	30. 0	”	20	
8. 26	31° -24' N 127° -27' E	N E－4	29. 5	”	10	

月日	発見位置	風向－風力－海況	水温℃	国籍及び船名	t数別隻数	操業状態等報告事項
8.27	31°-20' N 127°-26' E	SW－1	29.3	中国	12	
9. 3	30°-36' N 127°-14' E	NE－2	28.9	〃	7	
9. 4	30°-31' N 127°-15' E	N－2	28.7	〃	2	
9. 9	30°-50' N 127°-16' E	SSW－2	28.8	〃	1	
9.10	31°-12' N 127°-21' E	NE－3	28.1	〃	5	
9.11	32°-22' N 129°-03' E	NE－2	27.0	〃	3	
9.17	32°-26' N 127°-05' E	SE－1	26.8	韓国	3	
9.19	28°-45' N 122°-54' E	NW－1	28.2	中国 韓国	100 20	
9.20	29°-12' N 123°-04' E	E－5	28.0	中国	50	
9.21	28°-51' N 123°-29' E	NE－5	27.3	〃	50	
9.22	29°-34' N 125°-53' E	NNE－2	27.3	〃	50	
9.23	30°-09' N 126°-56' E	NE－2	27.3	〃	20	
9.24	31°-17' N 127°-17' E	ENE－1	27.1	〃	20	
9.25	32°-24' N 129°-09' E	ENE－1	27.1	〃	20	
10. 5	32°-21' N 127°-02' E	N－1	25.8	〃	10	
10. 6	32°-21' N 127°-01' E	SW－1	25.8	〃	10	
10. 8	32°-14' N 126°-58' E	NE－2	25.1	中国 韓国	5 20	
10. 9	32°-11' N 126°-58' E	N－4	24.9	中国 韓国	10 30	
10.10	32°-58' N 128°-27' E	NNE－5	24.9	中国 韓国	10 30	
10.16	32°-22' N 126°-06' E	NNE－3	25.5	中国 韓国	50 70	
10.17	31°-53' N 126°-47' E	NE－1	24.0	中国 韓国	70 20	
10.18	31°-40' N 127°-25' E	SSW－1	24.8	中国 韓国	70	
10.19	31°-35' N 127°-24' E	N－2	24.5	中国	20	

第3大漁丸（調査海域：東シナ海）

月日	発見位置	風向－風力－海況	水温℃	国籍及び船名	t数別隻数	操業状態等報告事項
'96 6.25	29°-50' N 125°-03' E	SW－5	24.1	中国	50	
8. 8	31°-08' N 127°-28' E	E－2	28.9	〃	4	
8. 9	31°-07' N 127°-22' E	ESE－1	28.6	〃	6	
8.10	31°-02' N 127°-10' E	E－2	28.7	〃	3	

月日	発見位置	風向-風力-海況	水温℃	国 籍 及 び 船 名	t 数別隻数	操業状態等報告事項
8. 11	31° -00' N 127° -08' E	E - 4	28.2	中 国 台 湾	4	
8. 19	28° -44' N 122° -54' E	SW - 3	27.9	中 国	100	
8. 21	28° -44' N 122° -54' E	S - 2	27.7	”	10	
8. 22	28° -44' N 122° -54' E	SW - 2	27.9	”	10	
8. 23	29° -15' N 123° -02' E	W - 1	28.2	”	40	
8. 26	29° -54' N 125° -43' E	WNW - 1	28.6	”	30	
9. 3	29° -15' N 123° -02' E	NE - 2	27.1	”	70	
9. 4	29° -14' N 123° -04' E	NE - 3	26.2	”	80	
9. 6	29° -16' N 123° -03' E	S - 1	27.9	”	25	
9. 8	29° -14' N 123° -00' E	S - 2	27.2	”	100	
9. 9	29° -15' N 123° -07' E	S - 1	27.1	”	100	
9. 24	31° -17' N 127° -17' E	NE - 2	26.6	”	2	流し網
10. 5		NNE - 1	25.2	”	50	
10. 7	27° -24' N 122° -08' E	N - 3	25.4	”	80	
10. 8	27° -23' N 122° -08' E	NNE - 4	25.2	”	40	
10. 9	27° -26' N 122° -06' E	NNE - 5	24.9	”	10	
10. 12	27° -50' N 124° -22' E	N - 3	24.9	”	2	
10. 14	30° -09' N 127° -00' E	ENE - 3	25.1	”	4	
10. 23	29° -16' N 123° -04' E	NNE - 3	23.1	”	15	
10. 25	27° -42' N 122° -54' E	ESE - 2	23.7	”	1	
10. 28	27° -37' N 122° -56' E	NNE - 1	23.5	”	14	
11. 5	29° -53' N 125° -43' E	S - 1	22.9	”	20	
11. 6	30° -52' N 127° -12' E	N - 4	23.3	”	25	
11. 21	28° -59' N 125° -28' E	NW - 1	22.2	”	4	
11. 22	28° -58' N 125° -28' E	NW - 2	21.7	”	1	
11. 23	28° -58' N 127° -25' E	NE - 2	21.6	”	1	
11. 24	28° -58' N 127° -25' E	ENE - 2	21.5	”	1	
11. 26	30° -35' N 127° -12' E	SE - 2	21.7	台 湾	1	

主な活動状況や出来事

(平成8年1月～12月)

平成8年

- 1月6～15日 浦総務課課長補佐、日本丸水揚げ立会のためタイ国プーケット出張
- 7～8日 松澤総務課販売係員、第18日之出丸水揚げ立会のため焼津出張
- 9～10日 鈴木調査員、小型魚漁獲実態調査のため枕崎出張
- 10～12日 田淵調査役、小型魚漁獲実態調査のため焼津出張
- 15～17日 鈴木調査員、田中（豊）調査員、地球環境モニタリング事業に係る調査打合せのため下関出張
- 24日 「漁船活用型地球環境モニタリング事業調査専門委員会」（於：センター会議室）
- 25～25日 田淵調査役、小型魚漁獲実態調査のため焼津出張
- 25日 「外洋性大型イカに関する国際シンポジウム実行委員会」（於：センター会議室）
- 25～26日 宮地調査員、漁船科学調査員等育成事業講習会打合せのため清水出張
- 26日 「理事懇親会」（於：センター会議室）
- 26日 「平成丸事業内検討会」（於：センター資料室）
- 29日 「第1回開発部報告会」（於：センター会議室）
- ナミビアODA ヘイク （松山丸）諏訪
- ナミビアODA オレンジラフィ（〃）山下
- 30日 「年頭記者会見」（於：マツヤサロン）
- 31日 「沖合再開発基礎調査（沖縄舟状海盆）事業内検討会」（於：全共連ビル）
- 2月1～2日 高橋開発調査第2課長、ミナミマグロモニタリング調査打合せのため石巻出張
- 5～6日 浦総務課課長補佐、深海丸漁獲物販売立会のため塩釜出張
- 5～6日 鈴木調査員、漁船活用型地球環境モニタリング事業に係る調査打合せのため焼津出張
- 6～8日 高橋開発調査第2課長、「まぐろ資源部会」に出席のため清水出張
- 6～8日 小林調査員、小型魚漁獲実態調査のため枕崎出張
- 6～10日 田淵調査役、小型魚漁獲実態調査のため焼津出張
- 7～9日 大塚総務部長、橋本（隆）調査員、漁船活用型地球環境モニタリング事業に係る調査打合せのため高知出張
- 8～10日 松澤総務課販売係員、第8天王丸水揚げ立会のため焼津出張
- 9日 黒岩開発調査第1課長、小河調査員、「平成7年度遠洋漁業関係研究会議」に出席のため清水出張
- 13～14日 村井開発部次長、武智調査役、資源管理型沖合漁業推進総合調査（東海アマダイ）打合せのため博多出張
- 13～15日 鈴木調査員、和田総務課係長、漁船活用型地球環境モニタリング事業に係る調査打合せのため外浦出張
- 14日 田淵調査役、宮地調査員、漁船科学調査員等育成事業講習会のため清水出張

15日	「サバ・イワシ資源専門委員会」（於：センター会議室）
18～20日	浦総務課課長補佐、第18日之出丸水揚立会のため焼津出張
18～20日	白澤調査員、第18日之出丸サンプル整理等のため焼津出張
19日	「カツオ・マグロ資源専門委員会」（於：センター会議室）
19日	「第2回開発部報告会」
	沖合有用魚種相（いち丸） 武智調査役
	がすとり資源（第52住吉丸） 澤田石調査員
19～21日	田淵調査役、小型魚漁獲実態調査のため焼津出張
19～21日	鈴木調査員、日景総務課課長補佐、漁船活用型地球環境モニタリング事業に係る調査打合せのため長崎出張
20日	「沖合漁場再開発調査専門委員会」（於：センター会議室）
21日	「底魚資源専門委員会」（於：センター会議室）
26日	松浦調査員、日本丸乗船のためプーケット出張
26日	越智調査員、第18太幸丸乗船のため外浦出張
27日	「イカ資源専門委員会」（於：センター会議室）
29日	「企画・評価委員会」（於：センター会議室）
29日	田淵調査役、漁船活用型地球環境モニタリング事業に係る調査打合せのため清水出張
3月4～6日	甲藤調査員、「平成7年度イカ類資源研究会」出席のため新潟出張
5日	大塚総務部長、田淵調査役、小型魚漁獲実態調査のため焼津出張
7日	「小型魚漁獲実態調査検討委員会」（於：センター会議室）
11～13日	浦総務課課長補佐、漁船科学調査員等育成事業の説明のため枕崎出張
12日	佐々木調査員、「第3回中央ブロック長期漁海況予報会議」出席のため横須賀出張
13日	佐々木調査員、北勝丸乗船のため石巻出張
13日	「新操業形態開発実証化事業専門委員会」（於：センター会議室）
13～14日	武智調査役、浮漁礁表層効果体部修理検査のため守山出張
13～23日	高橋開発調査第2課長、和田総務課係長、ミナミマグロモニタリング調査実施状況調査のためオーストラリア出張
14日	「漁船活用型地球環境モニタリング事業専門委員会及び検討委員会」（於：全共連ビル）
14～15日	細田専務、第2星徳丸調査打合せのため釧路出張
14～15日	上野総務課課長補佐、たいけい用船解除のため石巻出張
17～18日	大野調査役、アンゴラ水域内共同調査に関する協議のためアンゴラ出張
18～19日	武智調査役、沖合再開発基礎調査（日本海中北部）打合せのため秋田出張
21～22日	武智調査役、沖合再開発基礎調査（日本海中北部）打合せのため石巻出張
21～23日	浦総務課課長補佐、第18太幸丸水揚立会のため外浦出張
25～27日	鈴木調査員、橋本（純）調査員、漁船活用型地球環境モニタリング事業に係る業務打合せのため下関出張
25～28日	白澤調査員、古賀（淳）調査員、「カツオ・ビンナガ資源漁海況予報会議」出席のため清水出張

26日	「第75回理事会」（於：センター会議室）
26日	「アカイカ好漁場探索調査報告会」（於：センター会議室）
27日	「第60回評議員会」（於：赤坂プリンスホテルサファイヤホール）
29～31日	馬場企画課係長、和田総務課係長、松澤総務課販売係員、第2星徳丸水揚立会及び用船解除・開始のため釧路出張
29～4/5日	日景総務課課長補佐、深海丸用船解除のためリスボン出張
30～4/1日	上野総務課課長補佐、北勝丸用船解除・開始のため石巻出張
30～4/1日	浦総務課課長補佐、平成丸水揚立会のため松浦・長崎出張
30～4/1日	根本総務課長、第18太幸丸用船解除・開始のため外浦出張
31～4/2日	大城監事、第18太幸丸出港見送りのため外浦出張
4月 1日	古賀（淳）調査員、北勝丸乗船のため石巻出張
1～3日	大塚総務部長、北勝丸出港見送りのため石巻出張
1～3日	黒岩開発調査第1課長、北勝丸調査打合せのため石巻出張
3～13日	松澤総務課販売係員日本丸水揚立会のためのプーケット出張
7～9日	黒岩開発調査第1課長、第8天王丸調査打合せのため枕崎出張
8～9日	田淵調査役、小型魚漁獲実態調査のため焼津出張
8～10日	越智調査員、山下調査員、あまだい操業実態調査のため長崎出張
9～11日	浦総務課課長補佐、開発丸水揚立会のため三崎出張
10～11日	鈴木調査員、村松調査員、漁船活用型地球環境モニタリング事業（開発丸）機器撤収のため三崎出張
11～12日	細萱調査員、中野調査員、水揚立会及び調査機材搬出のため三崎出張
12～25日	中村理事長、捕鯨問題事前申し入れのためスウェーデン、デンマーク、フィンランド出張
17～18日	田淵調査役、漁船科学調査員等育成事業講習実施のため清水出張
21～22日	田淵調査役、村松調査員、小型魚漁獲実態調査のため焼津出張
22～23日	大塚総務部長、浦総務課課長補佐、深海丸製品販売会議のため塩釜出張
24～26日	村井開発部次長、山下調査員、資源管理型沖合漁業推進総合調査（東南アマダイ）打合せのため長崎出張
25～26日	佐谷開発調査第2課課長補佐、片山調査員、NAFO水域におけるオブザーバ研修のため清水出張
28～5/1日	末兼調査員、第3新興丸調査器材整理のため八戸出張
30～5/1日	高橋開発調査第2課長、白澤調査員、第18日之出丸調査打合せのため焼津出張
5月 4日	白澤調査員、第18日之出丸乗船のため焼津出張
4～7日	細田専務、平成丸出港見送りのため長崎出張
6～7日	大城監事、第18日之出丸出港見送りのため焼津出張
8～9日	伏島調査員、「西日本漁業の未来を考えるシンポジウム」出席のため長崎出張
13～14日	田淵調査役、小型魚漁獲実態調査のため焼津出張
14日	佐谷開発調査第2課課長補佐、深海丸乗船のためリスボン出張
16～17日	武智調査役、沖合再開発基礎調査（日本海カニカゴ）打合せのため新潟出張
20～21日	武智調査役、資源管理型沖合漁業推進総合調査（東海アマダイ）打合せのため山口、佐賀出張

20～22日	高橋開発調査第2課長、細萱調査員、中野調査員、開発丸調査打合せのため清水出張
21～22日	細田専務、村井開発部次長、越智調査員、山下調査員、「資源管理型沖合漁業推進総合調査（東海アマダイ）事業内検討会」出席のため福岡出張
22日	中村理事長、開発丸出港見送りのため清水出張
27～28日	細田専務、「日本遠洋旋網漁業協同組合通常総会」に出席のため長崎出張
29～30日	大野調査役、ハダカイワシ中層網水槽実験立会のため函館出張
30日	甲藤調査員、甲谷調査員、木村調査員、アカイカ調査研修のため清水出張
30～31日	大塚総務部長、新操業形態開発実証化事業（沖合底びき網）調査打合せのため釧路出張
30～31日	日景総務課課長補佐、第2星徳丸用船開始のため釧路出張
30～31日	和田総務課係長、「農林健保事業推進委員会研修会」出席のため熱海出張
30～6/10日	高橋開発調査第2課長、「JICAベトナム国水産資源調査」（調査船乗船）のためベトナム出張
6月 3日	甲藤調査員、甲谷調査員、木村調査員、高山調査員、第3新興丸、第31宝来丸、第11茨城丸乗船のため八戸出張
3日	細萱調査員、開発丸乗船のためホノルル出張
3～5日	長尾開発部長、いか釣新漁場開発調査（アカイカ）打合せのため青森、八戸出張
3～6日	和田総務課係長、第31宝来丸、第11茨城丸、たいけい用船開始のため八戸、石巻出張
6～7日	伊藤調査員、若竹丸用船開始のため函館出張
7日	山下調査員、第1勢力丸乗船のため長崎出張
18～17日	細田専務、村井開発部次長、アルゼンチンとのイカ資源に関する共同調査実施についての協議のためアルゼンチン出張
9～10日	日景総務課課長補佐、第1勢力丸、第3大漁丸用船開始のため長崎出張
11～14日	越智調査員、沖合再開発基礎調査（沖縄舟状海盆）打合せ及び関係県挨拶のため沖縄、鹿児島出張
13～14日	大野調査役、原田調査員、「カツオ漁海況予報会議」出席のため塩釜出張
18～19日	長尾開発部長、「北部まき網漁業生産調整組合総会」に出席のため熱海出張
18～19日	鈴木調査員、村松調査員、漁船活用型地球環境モニタリング事業に係る調査打合せのため下関出張
24日	「第76回理事会」（於：センター会議室）
24～25日	松澤総務課販売係員、第18日之出丸水揚立会のため焼津出張
25日	「第61回評議員会」（於：赤坂プリンスホテル）
26～27日	長尾開発部長、日本丸入港出迎えのため枕崎出張
26～28日	松浦調査員、資材整理及び日本丸調査打合せのため枕崎出張
26～29日	小林調査員、小型魚漁獲実態調査のため枕崎出張
26～7/3日	浦総務課課長補佐、日本丸、第8天王丸水揚立会のため枕崎出張
27～28日	小河調査員、漁船科学調査員等育成事業打合せのため清水出張

28～29日	長尾開発部長、平成丸調査打合せ及び沖合再開発基礎調査（東海アマダイ）打合せのため長崎出張
7月 1日	創立25周年記念式典（於：センター会議室）
2日	大野調査役、第30丸定丸乗船のため八戸出張
4～日	諏訪調査員、第8興洋丸乗船のため新潟出張
4～5日	上野総務課課長補佐、第8興洋丸用船開始のため新潟出張
4～6日	武智調査役、沖合漁場再開発基礎調査（日本海中北部）調査打合せ及び第8興洋丸出港見送りのため新潟出張
6～8日	水谷専務、第8興洋丸出港見送りのため新潟出張
16～17日	会田調査員、末兼調査員、H8年度東北・中央ブロック予報会議出席のため横須賀出張
17日	外洋性大型イカ類に関する国際シンポジウム歓迎夕食会（於：虎ノ門パストラル8F）
18～19日	外洋性大型イカ類に関する国際シンポジウム（於：石垣記念ホール）
21～27日	高橋開発調査第2課長、佐々木調査員、みなみまぐろ資源加入状況モニタリング調査ワークショップ出席のためホバート出張
22～23日	田淵調査役、若竹丸調査終了打合せのため函館出張
24日	第2回開発部報告会 会田調査員：まき網（日本丸） 末兼調査員：いか釣（第3新興丸）
29～30日	水谷専務、長尾開発部長、小河調査員、新操業形態実証化事業（沖底）調査打合せのため釧路出張
30日	廣川調査員、第8天王丸乗船のため焼津出張
30日	遠藤補助調査員、山口補助調査員、深海丸乗船のためセントジョーンズ出張
31～8/3日	大城監事、第30丸定丸入港出迎えのため八戸出張
8月 5～7日	松浦調査員、内山調査員、日本丸調査打合せ及び調査機材整理のため塩釜出張
5～9日	長尾開発部長、東海アマダイ日中民間協議出席のため中国出張
6～8日	田淵調査役、中高度回遊資源管理方策検討調査打合せのため境港及び松浦出張
9日	越智調査員、沖縄漁業調査委員会にてソデイカ標識放流調査説明のため沖縄出張
9～10日	水谷専務、大塚総務部長、日本丸出港見送りのため塩釜出張
13～14日	黒岩開発調査第1課長、北勝丸調査検討会のため石巻出張
29日	片山調査員、深海丸乗船のためセントジョーンズ出張
29～30日	村井開発部次長、小林調査員、中高度回遊資源管理方策検討調査打合せのため鹿児島出張
30日	小河調査員、第2星徳丸乗船のため釧路出張
29～30日	長尾開発部長、第8興洋丸入港出迎え及び調査打合せのため新潟出張
29～30日	根本総務課長、第8興洋丸用船解除のため新潟出張
31～9/2日	水谷専務、第31宝来丸入港出迎えのため八戸出張
31～9/2日	大塚総務部長、第11茨城丸入港出迎えのため石巻出張
9月 1～2日	浦総務課課長補佐、第11茨城丸水揚げ立合のため石巻出張

1～3日	松澤総務課販売係員、第31宝来丸水揚げ立合のため八戸出張
2～3日	上野総務課課長補佐、第11茨城丸用船解除のため石巻出張
2～3日	大塚総務部長、第52住吉丸入港出迎えのため三崎出張
2～3日	高橋開発調査第2課長、第52住吉丸入港出迎えのため三崎出張
2～4日	和田総務課係長、第31宝来丸用船解除のため八戸出張
2～4日	川田企画課長、古賀企画課係長、大型イカ類に関する国際シンポジウム結果報告及び展示試食会用加工品収集のため八戸出張
2～4日	澤田石調査員、第52住吉丸水揚げ立合及び調査機材等搬出のため三崎出張
3～4日	浦総務課課長補佐、伊藤調査員、第52住吉丸水揚げ立合及び用船解除のため三崎出張
4～12日	水谷専務、根本総務課長、みなみまぐろ資源加入状況モニタリング調査に係る代理店契約締結のためオーストラリア出張
5～13日	上野総務課課長補佐、第18太幸丸乗船のため外浦出張
6～14日	浦総務課課長補佐、北勝丸乗船のため石巻出張
8～16日	長尾開発部長、N A F O年次会議出席のためロシア出張
10～11日	越智調査員、中層型浮漁礁製作中間検査のため守山、貝塚出張
13日	松澤総務課販売係員、第18太幸丸乗船のため鹿児島出張
17～19日	村松調査員、鈴木調査員、漁船活用型地球環境モニタリング調査カラム製作検収のため松山出張
18～23日	越智調査員、岩澤調査員、中層型浮漁礁設置の検収のため秋田出張
23～25日	松澤総務課販売係員、第3新興丸水揚げ立合のため八戸出張
23～26日	大野調査役、第8天王丸調査打合せのため枕崎出張
24～27日	浦総務課課長補佐、第8天王丸水揚げ立合のため枕崎出張
26～27日	高橋開発調査第2課長、平成丸調査打合せのため長崎出張
26～27日	水谷専務、平成丸調査打合せのため長崎出張
30日	細萱調査員、三崎遠洋漁業研究会出席のため三崎出張
10月 1日	第25回開発魚種展示会（おさかなフェア'96）
6日	会田調査員、北勝丸乗船のため塩釜出張
7～8日	大野調査役、北勝丸調査打合せのため塩釜出張
7～8日	村井開発部次長、越智調査員、ソデイカ資源管理協議会出席のため那覇出張
15日	アカイカ調査中間報告会（於：センター会議室）
15～16日	佐谷開発調査第2課課長補佐、末兼調査員、深海丸、第3新興丸に係る共同調査等打合せのため清水（遠洋水産研究所）出張
16～19日	黒岩開発調査第1課長、諏訪調査員、第2星徳丸漁具試験のため下関出張
17～18日	水谷専務、沿岸漁業等振興審議会現地調査のため福島出張
17～18日	大塚総務部長、北部まき網漁業㈱取締役会出席のため仙台出張
22～31日	浦総務課課長補佐、古賀企画課係長、日本丸水揚げ立合のためプーケット出張
24～25日	長尾開発部長、川田企画課長、平成9年度ベニズワイ調査打合せのため鳥取出張
24～25日	中村理事長、沿岸漁業等振興審議会現地調査のため新潟出張
24～25日	黒岩開発調査第1課長、日本水産学会漁業懇話会出席のため波崎出張

25～11/5日	和田総務課係長、平成丸乗船のため長崎出張
25～27日	田淵調査役、鈴木調査員、海洋生態系保全型漁業確立実施調査有効利用部会出席のため石巻出張
27～29日	長尾開発部長、諏訪調査員、北水研との調査打合せ及び第2星徳丸選択性コード仕立立合のため釧路出張
28～30日	今井調査員、平成丸調査打合せのため長崎出張
29～31日	高橋開発調査第2課長、川田企画課長、平成8年度全国資源管理型漁業推進会議出席のため秋田出張
31日	岩澤調査員、沖合漁場再開発基礎調査（沖縄舟状海盆）ソデイカ調査船第5栄福丸乗船のため糸満出張
31～11/2日	大塚総務部長、日景総務課課長補佐、第5栄福丸用船開始及び出港見送りのため沖縄出張
11月 2日	中野調査員、開発丸乗船のためホノルル出張
2～17日	黒岩開発調査第1課長、外国200海里漁場開発事前調査打合せのためモロッコ出張
5～7日	鈴木調査員、村松調査員、海洋生態系保全型漁業確立実施調査打合せのため鹿児島出張
7日	村井開発部次長、第1勢力丸及び第3大漁丸調査打合せのため長崎出張
7～8日	高橋開発調査第2課長、平成8年度水産工学研究推進全国会議水産調査計測部会出席のため波崎出張
11～12日	日景総務課課長補佐、沖合漁場再開発基礎調査（沖縄舟状海盆）ソデイカ調査船用船打合せのため沖縄出張
11～12日	武智調査役、沖合漁場再開発基礎調査（沖縄舟状海盆）ソデイカ延縄調査打合せのため糸満出張
11～13日	村松調査員、海洋生態系保全型漁業確立実施調査のため仙台下出張
11～14日	田中（昭）調査員、第18日之出丸乗船のため焼津出張
16～17日	小林調査員、熊野難フォーラム出席のため三重出張
14～15日	根本総務課長、たいけい用船解除のため石巻出張
14～15日	武智調査役、沖合漁場再開発基礎調査（日本海中北部）浮魚調査打合せのため石巻出張
14～15日	田淵調査役、小型魚漁獲実態調査のため焼津出張
14～16日	水谷専務、第18日之出丸出港見送りのため焼津出張
15～16日	高橋開発調査第2課長、第18日之出丸調査打合せのため焼津出張
20～日	越智調査員、沖合漁場再開発基礎調査（沖縄舟状海盆）ソデイカ調査船常丸乗船のため糸満出張
21日	常丸用船開始
24～26日	小林調査員、小型魚漁獲実態調査のため枕崎出張
25～26日	田淵調査役、鈴木調査員、海洋生態系保全型漁業確立実施調査有効利用委員会出席のため石巻出張
25～28日	古賀調査員、大門調査員、水産庁海洋丸乗船のため名古屋出張
25～27日	高橋開発調査第2課長、みなみまぐろ資源加入状況モニタリング調査打合せのため

	ため石巻出張
26～30日	長尾開発部長、東海あまだい日中民間協議・同調査打合せのため福岡及び長崎出張
29～30日	上野総務課課長補佐、第1勢力丸及び第3大漁丸用船解除のため長崎出張
29～12/3日	浦総務課課長補佐、第8天王丸水揚げ立合のため枕崎出張
12月11～21日	上野総務課課長補佐、松澤総務課販売係員、日本丸水揚げ立合のためプーケット出張
18日	大野調査役、日本丸乗船のためプーケット出張
19～20日	高橋開発調査第2課長、みなみまぐろ資源加入状況モニタリング調査打合せのため石巻出張
19～20日	伊藤調査員、たいけい用船開始のため石巻出張
24～26日	村井開発部次長、ベニズワイに関する情報収集のため島根県及び鳥取県出張
25日	原田調査員、第3新興丸乗船のためプエルト・マドリン出張
25～26日	佐谷開発調査第2課課長補佐、開発丸調査打合せのため清水（遠洋水産研究所）出張
26～28日	植田調査員、平成丸調査打合せのため長崎出張

役職員等の異動（平成8年1月～12月）

年月日	氏 名	（前 職）	（現 職）
職員			
H8. 1. 21	竹濱 秀一	開発部長	（逝去）
3. 31	清水 弘文	開発調査第二課	（退職） 西海区水産研究所
4. 1	長尾 一彦	水産庁資源課	（採用） 開発部長
4. 1	大門 智	—	（採用） 開発調査第二課
5. 19	馬場 幸男	企画課調査係長	（退職） 水産庁漁場保全課
5. 20	古賀 一郎	水産庁水産流通課	（採用） 企画課調査係長
嘱託調査員			
H8. 3. 31	橋本 隆夫	開発部嘱託調査員	（退職）
4. 1	村松 三郎	(社)日本栽培漁業協会	（採用） 開発部嘱託調査員
7. 31	木立 孝	開発部嘱託調査員	（退職）
8. 5	内山 松好	日本水産(株)	（採用） 開発部嘱託調査員
8. 31	松浦 満晴	開発部嘱託調査員	（退職） 全日本海員組合
10. 1	今井 章一	全国まき網漁業協会	（採用） 開発部嘱託調査員
12. 14	末兼 信行	開発部嘱託調査員	（逝去）

編集後記

月曜日から金曜日まで休まず働いて週末を迎える。週末にはゆっくり眠って十分な休養をとって、さあ次の月曜日、「今週もがんばるぞ。」と元気を取り戻しているはずが、身体が重く感じられて出勤したくない。そんな経験のある方も少なからず居られるのではないのでしょうか。これがどんどん進行すると「出勤拒否」に陥るのだそうです。「休養が十分ではなかったのだろうか。」と思われる方もあるかもしれませんが、これは「精神的疲労」が回復していないために起こるようです。つまり、何もしないでぼんやり過ごしていると、脳は休止していますが、それだけでは前の週に蓄積された精神的疲労が、そのまま次の週まで持ち越されてしまうのです。リフレッシュするためには、週末によく眠るだけではダメで、仕事とは別のことで頭を使わなければいけません。最近の「仕事」は、単純労働よりも頭脳労働が主体となっていて、肉体疲労よりも精神疲労の方が強い傾向にあると言われています。パソコンなどを職場で使うことが当たり前になってきて、頭脳労働が主になると、「よく眠る」だけでは、リフレッシュには逆効果ということもあります。週末の2日のうち1日は「身体を休ませる日」に、もう1日を「精神のリフレッシュ」にあてて、脳に新鮮な刺激を与えて下さい。週明けにはいつも新鮮な気持ちでいたいものですね。

T. T.

* 今号の発刊が諸般の事情により大幅に遅れましたこと、深くお詫び致します。

表紙写真：平成6年度がすとり新資源開発調査（南太平洋中部〈東部〉海域）

調査船第18住吉丸（撮影：佐谷守朗調査員）

— 愉快的名前のおさかな紹介 —



和名：スベスベラクダアンコウ

英名：Smoothhead dreamer

学名：*Chaenophryne longiceps*

(図鑑：「グリーンランド海域の水属」より)